



E-ISSN: 2528-5548

*Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang*  
**JAPANEDU**



Diterbitkan oleh:

DEPARTEMEN PENDIDIKAN BAHASA JEPANG  
FAKULTAS PENDIDIKAN BAHASA DAN SASTRA  
UNIVERSITAS PENDIDIKAN INDONESIA



# JAPANEDU

Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang

e-ISSN 2528-5548

Volume 4, Issue 1, June 2019

**JAPANEDU: Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang** is an online, open access peer reviewed journal, which is published twice year every June and December. This journal is for all contributors who are concerned with a research related to Japanese language education studies.

**JAPANEDU: Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang** provides a forum for publishing the original reserach articles, paper-based articles and review articles from contributors, related to Japanese culture, Japanese literature and Japanese language teaching/learning, which have never been published before.

## Editorial Team

Editor in Chief : Nuria Haristiani (Universitas Pendidikan Indonesia)

Vice Chief Editor : Herniwati (Universitas Pendidikan Indonesia)

Advisory & Editorial Boards

: Kumiko Sakoda (Hiroshima University)  
Levent Toksoz (Namik Kemal University)  
Lkhagava Ariunjargal (Mongolian National University of Education)  
Didi Sukyadi (Universitas Pendidikan Indonesia)  
Ari Arifin Danuwijaya (Universitas Pendidikan Indonesia)  
Dian Bayu Firmansyah (Universitas Jenderal Soedirman)

Reviewers

: Nuria Haristiani (Universitas Pendidikan Indonesia)  
Dian Bayu Firmansyah (Universitas Jenderal Soedirman)  
Kumiko Sakoda (Hiroshima University)  
Levent Toksoz (Namik Kemal University)  
Herniwati (Universitas Pendidikan Indonesia)  
Noviyanti Aneros (Universitas Pendidikan Indonesia)

## Editorial Office:

**Fakultas Pendidikan Bahasa dan Sastra, Universitas Pendidikan Indonesia**

Jl. Dr. Setiabudhi 229 Bandung 40154 Bandung, Jawa Barat, Indonesia

Email : [japanedu@upi.edu](mailto:japanedu@upi.edu)

Website : <http://ejournal.upi.edu/index.php/japanedu/index>

# JAPANEDU

Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang

e-ISSN 2528-5548

Volume 4, Issue 1, June 2019

---

## TABLE OF CONTENT

- An Inquiry on Japanese Language Education in Indonesia: A focus on the curriculum and its' implementation** 1-6  
*Mutia Kusumawati, Hiroshima University*
- Honami's Personality Aspects: A Study on Freud's Psychoanalysis of the Main Figures in Holy Mother's Novel by Akiyoshi Rikako** 7-15  
*Andi Irma Sarjani, Zuriyati Zuriyati, Siti Gomo Attas, Universitas Darma Persada*
- Giving Reasons as Politeness Strategy in Refusal Speech Act: A contrastive analysis on Japanese native speakers and Indonesian Japanese refusal speech act** 16-25  
*Lisda Nurjaleka, Universitas Padjajaran*
- The Use of Katakana in City Names in Java Island on Japanese Google Map** 26-36  
*Asteria Permata Martawijaya, R Januar Radhiya, STBA YAPARI-ABA Bandung*
- The Formation of Abbreviated Loanwords in Japanese: A study of *Ryakugo* and *Toujigo* in *Asahi Shinbun* digital website of automotive-technology column** 37-45  
*Witria Diah Sari, Linna Meilia Rasiban, Neneng Sutjiati, Universitas Pendidikan Indonesia*
- Re-discussion on the Relation between *Nihonjijo* Course and Cultivation of Intercultural Communication Competence: Indonesian case** 46-53  
*Jeni Putra, Kyushu University*
- The Emerging of Japanese Neologism and Aging Society** 54-64  
*Ni Nengah Suartini, Universitas Pendidikan Ganesha*



**An Inquiry on Japanese Language Education in Indonesia**  
*A focus on the curriculum and its' implementation*

Mutia Kusumawati

*Teaching Japanese as A Second Language Department, Graduate School of Education, Hiroshima University*  
[mutia.kusu21@gmail.com](mailto:mutia.kusu21@gmail.com)

**ABSTRACT**

The number of Japanese language learners in Indonesia has reached second place in the world (The Japan Foundation, 2015). However, Japanese language skills of learners in Indonesia are still very far behind from other countries, especially China and South Korea. Therefore, this study aims to discuss the causes of the lack of development on Japanese language learning abilities in Indonesia with the curriculum approach used. To answer these problems, author analysed data by The Japan Foundation, interviewed Japanese language teachers at one national high school in Bandung, and reviewed the curriculum that was being used. The results showed that most of Japanese language learners in Indonesia are at the secondary education level and mostly are high school students. However, the purpose of the Japanese language teaching curriculum in high schools in Indonesia does not require students to master Japanese to the upper level. Therefore, even though the number of Japanese language learners in Indonesia is large, but because the target of language acquisition is low, the Japanese language ability also tends to be low.

**KEYWORDS**

Curriculum; High school; Indonesia; Japanese education; Secondary education

**ARTICLE INFO**

*First received: 11 April 2019*

*Final proof accepted: 27 June 2019*

*Available online: 28 June 2019*

**はじめに**

日本はアジアの国々の中でも科学、技術、経済的に最も発展した国である。そのため、日本の技術

を学習する、日本と貿易するなどのために、日本語を学習する外国人が多い（図1をご参照）。インドネシアでは第二次世界大戦の時代から日本語が既に学習されていたが、今日、インドネシアの日本語学習者は急激に増加してきた。図1を見ると、1979年から2003年にかけてはインドネシアの日本語学習者数は横ばい状態であった。

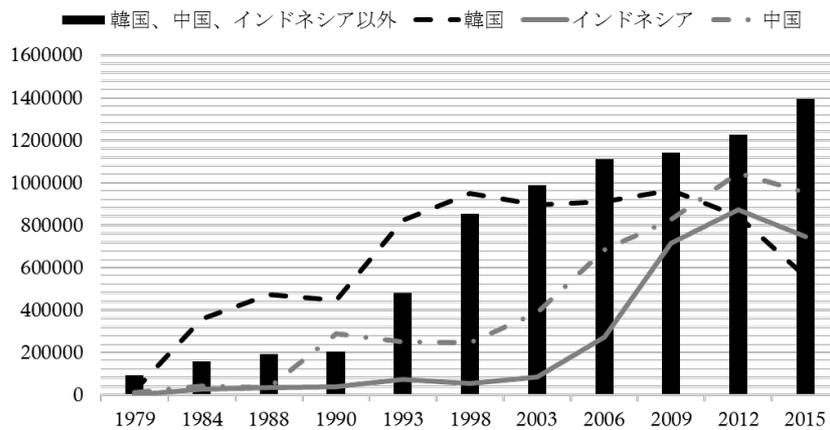


図1 国際交流基金（2016）による国・地域別日本語学習者数の推移

しかし、2006年にはわずかに増加し、2009年には716,353人に達した。さらに、2012年にそれまで世界2位であった韓国の学習者数を上回り、840,187人となった。2015年にはやや減少したが、人数は2009年に比べるとより多いことが見られる。これらのことから、インドネシアの日本語学習者数は、世界3位から2位となっていることが分かる。

このように、学習者数が非常に多いが、インドネシア人日本語学習者の能力には課題がある。表1は国際交流基金（2015）による日本語能力試験の実施国・地域別受験者数を表したものである。

N1は日本語能力試験の最も高いレベルで、N5は最も低いレベルである。表1を見ると、中国ではN1の受験者数が38,106人で最も多く、レベルが低くなるにつれ、受験者数が減っている。また、韓国でも中国同様の傾向が見られ、N1の受験者数が10,836人で最も多く、N5は759人で最も少ない。これに対して、インドネシアではN3が9,986人と最も多く、次いでN5が3,344人となっており、最も少ないのがN1でわずか500人である。

表1 日本語能力試験の実施国・地域別受験者数

国名	受験者数 (千単位)					合計
	N1	N2	N3	N4	N5	
中国	38	34	9	3	1	87
韓国	10	7	6	2	0,7	27
インドネシア	0,5	12	3	2	3	1

表1から、中国と韓国ではN1レベルを目指して受験する傾向がある一方、インドネシアではN3を一つの到着点として受験していることが分かる。このことから、インドネシアでは日本語学習者の能力が中国と韓国に比べると、低いと考えられる。

インドネシアは非漢字圏であり、インドネシア語の文法が日本語と違うことがその原因の一つとされているが、これ以外の原因もあると思われる。したがって、インドネシア人日本語学習者の能力が低い原因を具体的に分析し、向上させる方法を考察することが必要である。

### 先行研究と残された課題

これまでインドネシアにおける日本語教育の課題やその解決方法に関して様々な研究が行われてきた。土持（1994）、Danasmita（2009）、Sutedi（2017）では、インドネシアの日本語教育の全般的な問題が記述され、その問題の解決方法が提案されている。しかし、土持（1994）は1994年の高等教育や中等教育における状況と課題を述べているため、現在とは状況が大きく変わる可能性があると考えられる。Danasmita（2009）では日本語教育の主な問題はカリキュラム、教材、学習者のモチベーションと挙げられている。但し、Danasmita（2009）では問題の解決方法が具体的に述べられていないため、より詳細にその点を明らかにすることが必要だと思われる。また、学習者のモチベーションの側面からは

Kobari (2014) や Djafri (2018) で解明されているため、モチベーション以外の側面を解明する必要がある。

一方、Sutedi (2017) では日本語学習における問題が挙げられているが、主に高等教育（大学等）における日本語教育状況のみを述べているため、他の教育段階における日本語教育の状況を明らかにする必要がある。

この他に、高等教育における研究はハリ (2015) や Setiawati (2017) がある。ハリ (2015) では、Universitas Darma Persada (ジャカルタ首都にある大学) の日本語教育状況が明らかになっている。日本語教育の問題に関する結果は、ほぼ Danasasmita (2009) と同じであるが、ハリ (2015) はジャカルタには日本人が大勢いるため、日本人との接触が多いことを明確にした。また、Setiawati (2017) では開発したカリキュラム (Kurikulum 2012 と名付けられている) の実施について報告されている。しかし、ハリ (2015) と同じ、Setiawati (2017) でも特定の大学 (Universitas Negeri Semarang) の状況のみを明らかにされているため、他の地域や教育機関の状況を明らかにする必要があると思われる。

一方、中等教育（小学校、中学校、高等学校等）における日本語教育状況に関する研究は篠山 (2001)、藤長他 (2006)、Herniwati (2015) がある。前述の Sutedi (2017) では高等学校における問題を挙げられているが、具体的には記述されていない。それらの問題はカリキュラム、教材、教授法、メディアなどのみが挙げられている。しかし、教材に関しては篠山 (2001) で明らかにされているように、インドネシアの高等学校には教科書など日本語の教材は充分にあると言える。しかし、教師が自作教材を作成することが未だに少ないため、教材作成の研修が必要だと述べられている。この他に、藤長他 (2006) は高等学校を中心に、Herniwati (2015) は中学校を中心にインドネシアの日本語教育状況を記述している。しかし、カリキュラムの側面は 2004 年までのカリキュラムのみが記述されているため、最新カリキュラム (2013 年) の現状を見る必要がある。

以上のことを踏まえ、本研究ではインドネシア人日本語学習者の人数が多いにもかかわらず、日本語能力が低い理由を検討しながら、教育の基本となるカリキュラムの側面から解決方法を考察していきたい。また、今回の研究では日本の文化に関心が高いバンドンにおける日本語教育機関を事例とする。

上記の研究範囲を考慮し、本研究の課題を以下のようにまとめる。

1. インドネシアでは学習者数が多いものの、日本語能力が低い原因は何だろうか。
2. 現在のインドネシアにおける日本語教育のカリキュラムはどのようなものがあるか。
3. 学習者の能力を向上させるために、どのような方法が提案できるか。

## 研究方法

インドネシア人日本語学習者の日本語能力を向上させる方法を考察するためには、まず、インドネシア人日本語学習者の数が急激に増加した原因を探る必要がある。原因を明確にすることによって、学習者のニーズも明らかになると考えられる。そこで、まず、国際交流基金による日本語教育機関などについての統計データを分析し、それに基づき、学習者のニーズを考察する。

次に、第 1 バンドン国立高等学校 (SMAN 1 Bandung) の日本語教師 2 名にインタビューを行い、現在の日本語教育カリキュラムについてのデータを収集する。そのデータに基づいて現在のカリキュラムが学習者のニーズに合っているかどうかを分析する。さらに、教育現場でカリキュラムに沿って教育が行われているかどうかを確認するために、第 1 バンドン国立高等学校で使用されているシラバスと教案のデータも分析する。

最後に、カリキュラムと学習者のニーズが合っていない、あるいは問題がある場合、その解決方法も考察する。

## 調査結果と考察

### インドネシア人日本語学習者数の増加原因

表 2 国際交流基金 (2014) による教育段階別日本語学習者数

教育段階	学習者数	割合
初等教育	5,750	0.7%
中等教育	835,938	95.8%
高等教育	22,081	2.5%
その他	8,642	1.0%
合計	872,411	100.0%

まず、インドネシア人日本語学習者数の増加の原因について見ていきたい。

表 2 を見るとインドネシアにおいて中等教育は学習者数の割合が圧倒的に高く、95,8%に達している。そのため、本研究では高等学校の日本語カリキュラムに着目したい。

現状を見ると、高等学校で日本語が行われているのは新しいことではない。インドネシアの高等学校では、2 年生になってから学生が理系のクラスと文系のクラスに分かれるが、学校によって学生が理系、文系、言語系の 3 つのクラスに分けている学校もある。言語系のクラスでは英語以外の外国語が必修科目となっている。そのために、学校が日本語、中国語、ドイツ語、フランス語、アラビア語の中から選択し、言語系の必修科目のみとして行っている。

しかし、2006 年に政府が KTSP カリキュラムという全国教育の基本となるカリキュラムを決定したことで日本語を行っている学校が増えたと思われる。KTSP カリキュラムでは科目の種類を増やし、各科目の学習時間を短くするという特徴がある。また、どのような科目を追加するかは各学校に任されており、追加された科目は理系、文系、言語系を問わず、その全学校必修科目となったのである。

これに加えて、近年、インドネシアでは日本企業が増えつつある。そこで、就職のことを考慮してこの機会を利用し、日本語を始める学校が増えてきたと考えられる。これらのことから、2006 年から 2009 年まででインドネシアの日本語学習者数が飛躍的に伸びた原因は KTSP カリキュラムの実施にあることが明らかになった。

しかし、2013 年に再びカリキュラムの変更が行われた。2013 年からは、KTSP ではなく、2013 カリキュラムが全国の学校の基本カリキュラムになっている。2013 カリキュラムの特徴は科目の種類を減らし、各科目の学習時間を増やすという KTSP の真逆のものである。そのため、日本語を含め、英語以外の外国語の授業を削除した学校もある。このことから、2015 年にインドネシアの日本語学習者数が減少した原因はカリキュラムの変更にあるといえる。ただし、学習者数が減少しても、インドネシアの日本語学習者では依然として中等教育での人数が最も多い。

次に、インドネシアの高等学校における日本語教育のカリキュラムの実施について記述していきたい。

## インドネシアの高等学校における日本語教育

ここでは、2013 カリキュラムを実施している高等学校の日本語教育実施とその問題点について述べていきたい。

正確に現場の状況を把握するために、筆者はバンドンにある国立高校の日本語教師 2 名にインタビューし、使用されているシラバスや教案を分析した。その結果を以下に記述する。

2013 カリキュラムでは理系・文系・言語系のクラス分けは 1 年生から決定されている。日本語は言語系の必修科目又は全学生の選択科目として行われている。しかし、第 1 バンドン国立高等学校では 2013 カリキュラムを使用しているのは 1 年生のみであり、2 年生と 3 年生はまだ KTSP を使用しているとのことであった。

2 年生と 3 年生は KTSP を使用しているため、日本語はクラスにかかわらず、全学生の必修科目となっている。それに対して、第 1 バンドン国立高等学校では言語系のクラスはないため、2013 カリキュラムを使用している 1 年生では、日本語は全学生が選べる選択科目となっている。これらを見ると、第 1 バンドン国立高等学校では 2013 カリキュラムの実施がいまだに統一していないことが把握できた。

実際、第 1 バンドン国立高等学校のみならず、インドネシア全国的にも 2013 カリキュラムの実施がまだ統一されていないと被験者が述べている。インドネシアの教育カリキュラムでは「選択科目」という概念が 2013 カリキュラムで初めて紹介されているため、慣れていない学校は 2013 カリキュラムの実施にあたって準備する必要があると思われる。その準備のスピードが学校により異なるため、現在、2013 カリキュラムの実施が統一されていない状況になっていると考えられる。

それでは、第 1 バンドン国立高等学校の日本語教育現場において KTSP と 2013 カリキュラムの内容・実施事態はどのように違うのだろうか。

表 3 は日本語教育における KTSP と 2013 カリキュラムの違いについての第 1 バンドン国立高等学校の日本語教師へのインタビュー結果のまとめである。

表3 KTSP と 2013 カリキュラムの違い

項目	KTSP (2-3年)	2013 (1年)
学習時間	72時間 x 3年 = 216時間	108時間 x 3年 = 324時間
必修・選択	必修	選択
学生人数 / 学年	20組 x 約40人 = 800人	3組 x 約40人 = 120人 (11組から)
教材	Mari Mengenal Bahasa Jepang (西ジャワ州日本語教師会より)	Sakura (国際交流基金より)
学習の重視点	認知と精神運動を重視	献身を重視

国際交流基金によると、N5 を合格するには 150 時間、N4 には 300 時間日本語を学習する必要がある。表 3 の「学習時間」を見ると、KTSP では 1 年間で日本語の授業がおおよそ 72 時間行われている。つまり、高校過程 3 年間の合計時間はおよそ 216 時間である。これに対して、2013 カリキュラムでは 1 年間で日本語がおおよそ 108 時間行われ、高校過程 3 年間の合計時間はおよそ 324 時間である。

これらのことから、KTSP では高校過程 3 年間で N5 以上 N4 以下のレベルが目標となっているのに対して、2013 カリキュラムでは高校過程 3 年間で N4 とほぼ同じレベルが目標になっていることが分かった。

したがって、インドネシアの学習者数が多いにもかかわらず日本語能力が低い原因は、学習者の大半が高等学校で学習し、学習の目標レベルが N5 以上 N4 以下又は N4 相当のレベルであるためだと考えられる。

また、表 3 に示した第 1 バンドン国立高等学校の日本語教師による、2013 カリキュラムの長所は以下のとおりである。

1. 学生は自分の意思で日本語の授業を選択したため、勉強へのモチベーションは KTSP より高い。
2. 学習時間がより長いため、KTSP より学習目標もさらに高くなる。
3. 学生が非常に授業に興味を持っているため、教師が指導しやすい。

しかし、教師は 2013 カリキュラムではまだ多くの欠点があると述べている。その欠点は、献身を重視する点である。「献身」とは授業中の姿勢

であり、授業の内容自体には関係ないものである。第 1 バンドン国立高等学校の日本語教師によると、言語の学習では認知（知識）と精神運動（知識をどう活かすか）も重視しないといけないという意見がある。そのため、日本語の学習には KTSP が最も合っているカリキュラムではないかと述べている。

このように献身を重視することによって、学生は競争心を失い、より多くの知識を得る必要性を感じていないと言えるだろう。そのため、教師は 2013 カリキュラムでは学生の日本語習得が遅くなるととらえていると考えられる。

しかし、インタビュー結果で明らかになったように、学習者数、学習時間、学生のモチベーションの面から見ると、教師は日本語の学習がより効率的に実施できると確信している。そのため、日本語の学習には 2013 カリキュラムが最も良いと考えられる。確かに、2013 カリキュラムにはまだ多くの欠点・課題があるが、それを改善すれば、より良い日本語教育の実施が期待できよう。

### インドネシアの高等学校における日本語教育

以上の考察を踏まえ、2013 カリキュラムにおける日本語教育の改善方法について考察していく。

2013 カリキュラムの改善方法について 3 つの方法が考えられる。1 つ目は、2013 カリキュラムの実施を全国で統一するように働きかけることである。学校だけでなく、政府からも各学校における 2013 カリキュラムの実施に対してサポートする必要がある。例えば、説明会の実施、カリキュラムコンサルタントの用意などが考えられる。

2 つ目は、献身だけではなく、認知・精神運動も重視することである。具体的には、授業で十分な知識を得て、その獲得した知識を日常生活にも活かし、人間としてより良い姿勢が持てることを目標とするなどが考えられる。そうすると、3 つの要素のバランスが取れて、より良い学習成果が出るのだろう。

3 つ目は、高等学校では高いレベルの日本語まで学習する必要がないため、今の学習レベルでも良いと思われるが、日本語の授業内容をより効率的に習得できる教授法を考える必要があると考えられる。

## おわりに

以上、本稿では、インドネシアの中等教育における日本語学習者数の増減はカリキュラムの変更が原因であることが明確になった。さらに、インドネシアの学習者数が多いにもかかわらず日本語能力が低い原因は、学習者数の多くが高等学校で学習し、学習の目標レベルが N5 以上 N4 以下又は N4 であることが明らかになった。

また、学習者数、学習時間、学生のモチベーションから見ると、インドネシアの高等学校における日本語の学習には 2013 カリキュラムが合っていると考えられる。しかし、前節で述べたように 2013 カリキュラムではまだ欠点があるため、さらに改善が必要と考えられる。

本研究では教授法、教科書、教師からの面に触れていないため、これらの点については今後の課題とする。また、他の教育機関における問題と解決方法についてもまだ明らかにする必要が多少ある。例えば、高等教育では高いレベルを目指すため、どのような問題があるかを明らかにし、その問題の解決方法を検証する研究が望まれる。

## 参考文献

- Danasasmita, W. (2009). Pendidikan Bahasa Jepang di Indonesia Sebuah Refleksi. *Repositori UPI*. Universitas Pendidikan Indonesia.
- Djafri, F. (2018). Analisis Naratif pada Proses Pembelajaran Bahasa Jepang di Perguruan Tinggi dan Pengaruhnya terhadap Pilihan Masa Depan Pembelajar setelah Lulus. *Jurnal Lingua Aplicata*, 1(2), 1-18.
- Herniwati. (2015). Kurikulum Berbasis Kompetensi Komunikatif Bahasa Jepang untuk Meningkatkan Kemampuan Berbicara pada Sekolah Menengah Pertama (SMP) (Desertasi). Universitas Pendidikan Indonesia.
- Kobari, N. (2014). Penelitian Dasar Terhadap Motivasi Mahasiswa yang Memilih Keahlian Pendidikan Bahasa Jepang. *Jurnal Bahasa & Sastra*, 14(2), 117-130.
- Setiawati, A. S. (2017). Keefektivan Penerapan Kurikulum Tahun 2012 Pada Prodi Pendidikan Bahasa Jepang Unnes. *Proceeding Seminar Internasional Dinamika Perkembangan Bahasa Jepang di Indonesia*, 39-49.
- Sutedi, D. (2017). Dinamika Perkembangan Pendidikan Bahasa Jepang di Indonesia dan Permasalahannya. *Proceeding Seminar Internasional Dinamika Perkembangan Bahasa Jepang di Indonesia*, 7-13.

- 国際交流基金 (2015) 「2015 年第 2 回 日本語能力試験 実施国・地域別応募者数・受験者数」独立行政法人 国際交流基金
- 国際交流基金 (2016) 「2015 年度海外日本語教育機関調査結果」独立行政法人 国際交流基金
- 国際交流基金「インドネシア (2014 年度)」 <<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/indonesia.html>> (2016.12.20 時点)
- 国際交流基金「旧試験 新試験 級 認定基準」 <<https://jlpt.jp/about/pdf/comparison01.pdf>> (2017.2.17 時点)
- 篠山美智子 (2001) 「インドネシアの日本語教育における教材に関する日本の協力—後期中等教育を事例として—」. *Journal of International Development and Cooperation*, 8(1), 51-66. 広島大学.
- 土持かおり (1994) 「インドネシアにおける日本語教育の現状—西ジャワを中心に—」 『鹿児島県立短期大学紀要.人文・社会科学篇』, 8, 31-43. 鹿児島県立短期大学.
- ハリ・スティアワン (2015) 「特集 アジアの中の日本 インドネシアにおける日本語教育事情」 『日本研究教育年報』 19, 157-163. 東京外国語大学.
- 藤長かおる・古川嘉子・エフィ ルシアナ (2006) 「インドネシアの高校日本語教師の成長を 支援する教師研修プログラム」 『日本語教育紀要』 2, 81-96. 国際交流基金.



**Honami's Personality Aspects**  
*A Study on Freud's Psychoanalysis of the Main Figures in Holy Mother's Novel by Akiyoshi Rikako*

Andi Irma Sarjani<sup>1</sup>, Zuriyati<sup>2</sup> and Siti Gomo Attas<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Universitas Darma Persada, Jakarta, Indonesia

<sup>2</sup>Universitas Negeri Jakarta, Jakarta, Indonesia

[andiirma.2210@gmail.com](mailto:andiirma.2210@gmail.com)

**ABSTRACT**

This study aims to reveal the character of one of the main characters, Honami in the Holy Mother novel. The data source in this study is the Holy Mother novel wrote by Japanese author Akiyoshi Rikako, which has been published in Indonesia in 2016. The technique used for data collection in this study is library techniques. The method used in conducting this research was the psychoanalysis method which was first put forward by Sigmund Freud. The results showed that based on psychoanalytic studies, the main character of the novel, a woman named Honami, showed that the *Id* aspect influences all of her thoughts and actions. This was triggered by various events, namely her own misfortune which had many miscarriages and had a disease that made it difficult for her to get pregnant, and Kaoru's existence that changed her life to become more meaningful. The emergence of fear and concern for her daughter because of the successive killings that struck a small child in the city where she lived, making her falsify and obscure the fact that Makoto, was committed murder to protect her daughter. The results also showed that the personality of the main character, Honami, is dominated by an element of the *Ego* personality that defeats the *Superego*.

**KEYWORDS**

*Ego; Id; Literature; Psychoanalysis; Superego*

**ARTICLE INFO**

*First received: 17 April 2019*

*Final proof accepted: 27 June 2019*

*Available online: 28 June 2019*

**PENDAHULUAN**

Sastra adalah sebuah karya seni manusia yang pada hakikatnya adalah gambaran kehidupan masyarakat yang sesungguhnya. Sastra merupakan media yang digunakan oleh pengarang untuk memaparkan realita kehidupan masyarakat dalam segala sisinya, baik maupun

buruk. Menurut Nurhayati, karya sastra menampilkan potret kehidupan masyarakat yang menyangkut persoalan sosial yang terjadi, dimana tampilan yang disuguhkan kepada masyarakat tersebut telah mengalami pengendapan secara intensif dalam ruang imajinasi sang pengarang. Hasil endapan yang berkolaborasi dengan imajinasi itulah yang kemudian terlahir dalam

bentuk karya sastra (Nurhayati, 2008). Pendapat serupa diutarakan oleh Jabrohim, yang menyatakan bahwa karya sastra pada hakikatnya adalah sebuah hasil aktivitas manusia dalam kehidupan bermasyarakat dengan segala warnawarni persoalan kehidupan. Jabrohim juga menambahkan bahwa sastra adalah suatu hasil ciptaan manusia yang di dalamnya terdapat berbagai ekspresi kehidupan berupa pikiran, gagasan, pemahaman, juga tanggapan perasaan penulis tentang kehidupan bermasyarakat yang dituangkan dengan bahasa yang imajinatif dan bersifat emosional (Jabrohim, 1986 dalam Setianingrum, 2008).

Berdasarkan pendapat di atas dapat dipahami bahwa karya sastra dapat digali melalui aspek-aspek kejiwaan seseorang. Aspek-aspek kejiwaan sendiri dapat dipahami dengan mempelajari ilmu psikologi, karena psikologi adalah ilmu pengetahuan yang mempelajari tentang kejiwaan. Ideologi, pemikiran, tingkah laku, dan aktifitas manusia pada dasarnya adalah cerminan dari aspek kejiwaan manusia, yang akan tergambar melalui karya sastra. Pengarang akan menggambarkan potret pahit manis realita kehidupan yang terjadi atau dialaminya secara langsung melalui suatu karya sastra. Sehingga, karya sastra bisa dihayati karena ia merupakan suatu karya imajinatif pengarangnya yang terkait langsung dengan kenyataan yang terjadi. Karena alasan inilah, Ambarini menyatakan bahwa diperlukan pendekatan atau metode tertentu dalam rangka memahami karya sastra (Ambarini, 2008).

Sejalan dengan pendapat tersebut, Wiyatmi juga menjabarkan bahwa perkembangan kajian sastra yang bersifat interdisipliner telah menyandingkan sastra dengan beberapa disiplin ilmu yang lain, diantaranya adalah ilmu psikologi (Sudikan, 2015), dan bahkan ilmu sejarah (Felman & Laub, 1992). Pertemuan kedua ilmu tersebut akhirnya melahirkan pendekatan dalam kajian sastra antara lain psikologi sastra. Disamping itu pertemuan kedua ilmu juga melahirkan berbagai kerangka teori yang dikembangkan dari hubungan antara sastra dengan berbagai disiplin ilmu tersebut, diantaranya adalah psikoanalisis atau psikologi sastra, psikologi pengarang, dan psikologi pembaca (Wiyatmi, 2011).

Berbicara mengenai psikologi, pengertiannya diuraikan oleh Fitriyah & Jauhar (2004) dalam (Sembiring, Herlina., & Attas, 2018), dimana dikatakan bahwa psikologi merupakan sebuah

bidang ilmu pengetahuan dan ilmu terapan yang mempelajari perilaku dan fungsi mental secara ilmiah. Berdasarkan pengertian tersebut, maka psikologi diterjemahkan sebagai ilmu pengetahuan tentang kejiwaan. Dalam ilmu jiwa terkandung ideologi dan pemikiran, sedangkan pada ilmu psikologi dikupas dan diteliti mengenai jiwa seseorang dengan menggunakan analisis yang berbasis pendekatan ilmiah. Oleh karena itu kejiwaan seseorang yang dipelajari dalam bidang psikologi berkaitan erat dengan tipe kepribadian.

Dalam kaitannya dengan sastra, sebagaimana telah dijelaskan di atas bahwa dalam kajian sastra ada beberapa pendekatan yang bisa digunakan untuk memahami suatu karya sastra. Pendekatan tersebut bukan terbatas pada aspek sastra secara substantif saja, tetapi juga pada aspek lain yaitu aspek psikoanalisis (Wiyatmi, 2011). Sasaran yang dituju pada konsep psikoanalisis adalah manusia dengan segala kepribadian dan sifat-sifatnya. Adapun konsep psikoanalisis tersebut pertama kali diutarakan oleh Sigmund Freud (1856-1939).

Bertens (2006) dalam (Wiyatmi, 2011) menjabarkan bahwa Freud dilahirkan pada 6 Mei 1856 di sebuah kota bernama Freiberg, Moeavia, Cekoslovakia. Freud sendiri merupakan keturunan Yahudi. Pada usia 4 tahun, keluarga Freud pindah ke Wina, Austria dan kemudian ia menetap disana sampai usia senjanya yaitu pada umur 82 tahun. Latar belakang ilmu yang digelutinya adalah ilmu kedokteran yang dipelajari Freud saat ia menuntut ilmu di Universitas Wina. Freud kemudian berhasil menjadi dokter di sebuah rumah sakit umum di kota Wina, dimana ia bekerja di laboratorium seorang ahli bidang fisiologi yaitu Profesor Bruecke. Teori psikoanalisis sendiri pertama kali dikemukakan oleh Freud pada tahun 1895. Teori tersebut didapatnya berdasarkan hasil analisis terhadap pengobatan yang ia lakukan terhadap pasien-pasiennya dan juga analisis terhadap keadaan dirinya sendiri (Wiyatmi, 2011). Dengan demikian dapat dimengerti bahwa Psikoanalisis bukan merupakan ilmu jiwa dalam arti keseluruhan, namun hanya merupakan bagian dari ilmu jiwa itu sendiri. Freud kemudian mengemukakan bahwa psikoanalisis adalah sebuah teori yang berkaitan erat dengan kepribadian (Bertens dalam Freud, 1987 dalam Ambarini, 2008).

Menurut Freud, bagian terbesar dalam pikiran seseorang adalah alam bawah sadar, dimana bagian ini meliputi sesuatu yang dirasakan sulit

untuk diarahkan menuju alam sadar. Nafsu manusia dan juga insting yang dimilikinya berasal dari alam bawah sadar. Selain itu kenangan dan sesuatu yang bersifat traumatik menurut Freud juga berasal dari alam bawah sadar. Freud juga menegaskan bahwa hasrat seks dan keinginan alami seperti makan dan minum, kemudian juga kreativitas seperti menghasilkan sebuah karya sebenarnya didorong oleh alam bawah sadar (Ahmad, 2011).

Wiyatmi secara rinci menjelaskan bahwa beberapa konsep dasar teori Freud meliputi kesadaran dan ketidaksadaran, dimana keduanya merupakan aspek dari kepribadian manusia. Selain itu insting dan kecemasan juga merupakan cakupan dari wilayah kesadaran dan ketidaksadaran ini. Menurut Freud (dalam Walgito, 2004) dalam (Wiyatmi, 2011), kesadaran dan ketidaksadaran merupakan bagian dari kehidupan psikis. Perumpamaannya adalah, sesuatu yang berada di puncak gunung yang terlihat dari manapun adalah bagian kesadaran yang merupakan sebagian kecil dari kepribadian, dan perumpamaan sesuatu yang berada di bawah permukaan air merupakan bagian ketidaksadaran dimana terdapat di dalamnya insting-insting yang mendorong segala tingkah laku dan perbuatan manusia.

Dalam perkembangannya, Freud kemudian mencanangkan 3 buah konsep dalam teori psikoanalisisnya yaitu konsep *id*, *ego*, dan *superego* yang kesemuanya merupakan bagian dari struktur kepribadian (Wiyatmi, 2011). Konsep *Id* berhubungan erat dengan alam bawah sadar atau disebut juga ketidaksadaran, yang dikenal juga sebagai bagian primitif dari sebuah kepribadian. *Id* meliputi hasrat seksual dan juga insting agresif. Dalam *Id*, dibutuhkan pemenuhan hasrat secepatnya tanpa memperdulikan lingkungan realitas secara akal sehat. Ini disebut Freud sebagai suatu prinsip kenikmatan. Pada konsep *Ego*, seseorang sadar akan realitas yang ada sehingga Freud menamakannya sebagai suatu prinsip realitas. Disini dapat dipahami bahwa di dalam konsep *Ego* ada penyesuaian diri dengan realitas yang ada. Selanjutnya adalah konsep *Superego*, dimana dalam konsep ini terdapat kontrol atau pengendalian diri untuk mempertimbangkan mana saja perilaku yang boleh dilakukan, dan mana saja perilaku yang tidak boleh untuk dilakukan. Freud menamakan konsep *Superego* ini sebagai prinsip moral. Konsep *Superego* diketahui berkembang pada masa anak-anak, dimana banyak peraturan dan prinsip-

prinsip yang diberlakukan oleh orang tua di dalam keluarga, dimana bila melaksanakan peraturan tersebut akan mendapat hadiah/*reward* dan bila melanggar akan diberikan hukuman/*punishment*. Dapat dipahami bahwa semasa kecil, perbuatan anak adalah di bawah pengawasan dan kontrol orang tuanya, tetapi seiring perkembangan kedewasaannya dimana telah terbentuk *superego*, maka kontrol bukan lagi berasal dari orang tua namun bersumber dari superegonya sendiri (Walgito, 2004 dalam Wiyatmi, 2011).

Freud (Walgito, 2004) dalam (Wiyatmi, 2011) kemudian membagi insting ke dalam dua jenis yaitu insting untuk hidup dan juga insting untuk mati. Yang dimaksud dengan insting untuk hidup adalah meliputi rasa lapar, haus, dan juga hasrat seks. Freud menjelaskan bahwa insting untuk hidup ini adalah kekuatan yang bersifat kreatif, dimana kekuatan ini disebut juga dengan istilah libido. Sedangkan insting untuk mati menurut Freud adalah kekuatan yang bersifat destruktif. Insting untuk mati ini dapat dilakukan untuk diri sendiri seperti menyakiti dan melukai diri sampai berujung pada tindakan bunuh diri, selain itu insting untuk mati ini dapat ditujukan ke luar sebagai suatu bentuk agresi atau penyerangan.

Dalam (Walgito, 2004 dalam Wiyatmi, 2011) Freud mendeskripsikan tiga jenis kecemasan yang ia sebut sebagai kecemasan objektif, kecemasan neuretik, dan kecemasan moral. Freud menyatakan bahwa asal mula munculnya kecemasan objektif berasal dari ketakutan akan bahaya yang benar-benar nyata. Kemudian, kecemasan neuretik adalah rasa ketakutan menerima hukuman atas ekspresi keinginan yang impulsif, yaitu keinginan yang bisa cepat berubah-ubah dan bersifat irrasional. Sedangkan kecemasan moral akan muncul saat seseorang melanggar peraturan atau norma-norma moral yang berlaku dalam masyarakat.

Dalam novel *Holy Mother* (聖母) ini, bentuk kecemasan pada tokoh utama Honami adalah kecemasan objektif, dimana Honami mengalami ketakutan akan berbagai masalah yang benar-benar nyata terjadi dalam kehidupannya, khususnya segala masalah yang terkait dengan psikologis diri dan anaknya. Inilah yang mendorong penulis untuk memilih novel *Holy Mother* (聖母) karya Akiyoshi Rikako sebagai topik penelitian ini. Karena sebagaimana diketahui bahwa karya sastra adalah suatu pengungkapan kehidupan nyata yang dialami atau dilihat oleh pengarang dan kemudian

diendapkan dan diekspresikan secara imajinatif dalam bentuk verbal, dan tujuan kajian psikologi sastra adalah untuk dapat mengerti apa saja aspek-aspek kejiwaan yang terdapat pada sebuah karya tersebut (Hudson, 1961 dalam Ambarini, 2008). Kita ketahui bahwa dalam melakukan analisis terhadap kajian psikologi sastra maka analisis tersebut tidak bisa dipisahkan dari kebutuhan masyarakat. Secara tidak langsung, melalui karya sastra kita dapat memahami masyarakat segala aspek yang berkaitan dengannya. Karena dengan melalui pemahaman terhadap tokoh-tokohnya, masyarakat dapat memahami perubahan, kontradiksi, dan penyimpangan-penyimpangan lain yang terjadi dalam masyarakat.

*Holy Mother* (聖母) sendiri merupakan salah satu novel Akiyoshi Rikako yang terkenal akan karya novel pertamanya, *Girls in The Dark*, yang telah diterbitkan tahun 2014 lalu dan kini menjadi best seller. Karya keduanya adalah *The Dead Returns* dan yang ketiga adalah *Holy Mother* (聖母) yang diterbitkan di Indonesia pada tahun 2016. Mengingat Akiyoshi Rikako, yang terbayang pertama kali adalah kelihaiannya dalam mengelola cerita, sehingga mampu membawa pembaca "terseret" ke dalam alur cerita, kemudian pembaca tiba-tiba akan dikagetkan dengan akhir cerita yang mencengangkan dan tak terduga. Hampir sama dengan novel Akiyoshi Rikako yang lain, novel *Holy Mother* (聖母) berjenre misteri dan kriminal. *Holy Mother* (聖母) ini adalah novel berkategori dewasa, mengingat vulgarnya penjelasan pembunuhan yang diceritakan secara detail. Namun, penjelasan bagaimana Honami menjalani perawatan kedokteran agar ia bisa mengandung dijelaskan dengan teliti dan hati-hati, sehingga hal ini menjadi daya tarik tersendiri pada novel *Holy Mother* (聖母) ini. Perjuangan Honami yang dituturkan secara runut dan jelas dalam menahan pedih dan rasa sakit di setiap perjuangannya kala berusaha mengandung menjadikan pembaca turut prihatin dan simpati. Keunggulan novel ini ada pada beberapa info dan ilmu yang dibagikan. Seperti tentang perawatan kemandulan yang dialami Honami, penjelasan tentang senyawa kimia dan beberapa istilah-istilah kedokteran, dan juga mengenai analisis kriminal sehingga banyak hal-hal baru yang dapat diketahui dengan membaca novel ini.

Adapun penelitian sebelumnya mengenai novel *Holy Mother* (聖母) ini telah dilakukan oleh

Kartika (2017), Puteri (2017), maupun Lestari (2017). Ketiga penelitian tersebut memiliki kesamaan dimana penelitian yang dilakukan hanya berfokus pada tokoh Tanaka Makoto yang dibahas dengan teori PTSD (*post traumatic stress disorder*) dan konsep naluri kematian. Berbeda dengan penelitian-penelitian sebelumnya, dalam penelitian ini penulis menitikberatkan pada tokoh Honami dan analisis dilakukan dengan menggunakan pendekatan psikoanalisis dari Sigmund Freud.

## ALUR CERITA NOVEL *HOLY MOTHER* (聖母)

Novel *Holy Mother* (聖母) diawali dengan kejadian pembunuhan di kota Aiide, Tokyo, dimana ditemukan mayat seorang anak laki-laki berumur 4 tahun di tepi sungai dalam kondisi telanjang dan alat kelaminnya terpotong. Setelah kejadian tersebut, warga mulai waspada dan bekerja sama melakukan pengawasan di lingkungan mereka. Polisi dan detektif pun segera bekerjasama melakukan penyelidikan. Kota Aiide seketika berubah menjadi kota yang kelam, dipenuhi dengan rasa ketakutan dan kecemasan masyarakatnya. Para orang tua memberikan pengawasan yang lebih ketat terhadap keselamatan anak-anaknya. Di sisi lain masih ada kecemasan yang tinggi karena pembunuhan belum ditemukan identitasnya sehingga masih ada kemungkinan akan bermunculan korban berikutnya.

Cerita novel ini juga diawali dengan kisah seorang Ibu bernama Honami (46) yang tinggal di kota Aiide tersebut bersama putrinya bernama Kaoru (4). Karena perjuangannya yang sulit untuk mendapatkan keturunan, Honami menjadi sangat protektif terhadap keselamatan anaknya. Pengalaman kemandulan dan segala usaha untuk mendapatkan keturunan membuat Honami amat menyayangi Kaoru, seorang anak perempuan semata wayangnya. Sejak dahulu, keinginan terbesar Honami adalah memiliki keturunan. Namun fakta berbicara lain, karena riwayat penyakit yang dideritanya maka dia harus menempuh berbagai cara hingga akhirnya Honami berhasil melahirkan putrinya tersebut. Dengan kejadian pembunuhan terhadap anak kecil di kota Aiide tersebut menjadikan Honami bertekad untuk melindungi putrinya yang sangat ia cintai. Honami akan melakukan apa saja

karena Kaoru yang ia dapatkan dengan susah payah bisa jadi menjadi target pembunuhan berikutnya.

Kejadian berubah menjadi semakin menakutkan saat ditemukan kembali korban pembunuhan, yaitu mayat anak laki-laki yang kemudian diketahui bernama Satoshi di reruntuhan rumah sakit yang tidak terpakai. Mayat anak laki-laki tersebut ditemukan dengan kondisi yang sama dengan pembunuhan yang pertama, yaitu mayat ditemukan dalam keadaan telanjang dan alat kelamin yang telah terpotong, serupa seperti kejadian pertama. Polisi pun turun tangan untuk memecahkan kasus ini, bekerjasama dengan tim detektif yang bernama Sakaguchi dan Tanizaki.

Novel ini juga mengisahkan Tanaka Makoto, seorang pelatih Kendo yang masih duduk di bangku SMA. Makoto digambarkan sebagai anak yang memiliki wajah rupawan, pembawaannya berwibawa namun ia tidak terlalu suka menjalin hubungan dengan orang lain. Beberapa orang yang menyatakan jatuh cinta kepada Makoto langsung ditolak dengan tegas. Sebagai pelatih kendo, Makoto sangat menyayangi dan menjaga anak-anak dan ia dia paling tidak suka jika ada yang mengganggu atau melukai mereka. Digambarkan kemudian bahwa Tanaka Makoto ini sebenarnya adalah anak semata wayang Honami, dan Kaoru adalah anak Makoto akibat perkosaan yang dialami Makoto saat berumur 13 tahun.

## METODOLOGI PENELITIAN

Penelitian ini menggunakan metode deskriptif kualitatif sebagai metode penelitian. Pengumpulan data dilakukan dengan teknik kepustakaan dan data diperoleh dari novel *Holy Mother* (聖母). Metode/pendekatan yang digunakan dalam penelitian ini adalah pendekatan dengan menggunakan teori Psikoanalisis Freud. Data yang diperoleh diidentifikasi, dikaji, dan dideskripsikan untuk mengetahui hubungan unsur-unsur pembangun cerita dalam novel.

## HASIL DAN PEMBAHASAN

Honami mengalami kelainan yang membuatnya kesulitan untuk memiliki seorang anak. Setelah

menikah, Honami baru mengetahui bahwa ia mengidap sebuah penyakit yang membuatnya susah mendapatkan keturunan. Ia dan suaminya telah menghabiskan uang dan melakukan segala cara agar mereka bisa memiliki keturunan, mulai dari menjalani perawatan kemandulan sampai berbagai metode inseminasi buatan.

*Berdasarkan pemeriksaan USG dan tes darah, akhirnya dia divonis menderita sindrom ovarium polistik. Normalnya, di dalam indung telur ada banyak sel telur. Biasanya dalam satu bulan, folikel yang membungkus sel telur itu akan matang dan pecah, mengeluarkan sel telur ke tuba fallopii untuk dibuahi. Namun penderita penyakit ini memiliki banyak folikel, dan meskipun sudah mencapai besar tertentu, prosesnya akan berhenti di situ dan sel telurnya tidak keluar untuk ovulasi. Honami juga sempat melihat hasil USG. Pada indung telurnya, terlihat banyak sekali bulatan yang berjajar. Saat dia berfikir bahwa bentuknya seperti kalung mutiara, ternyata memang benar-benar disebut pearl necklace sign. (Holy Mother (聖母), hal.7)*

Berkali-kali gagal hamil dan keguguran, akhirnya Honami berhasil mengandung. Benar-benar merupakan sebuah perjuangan panjang dan melelahkan hingga akhirnya Honami bisa dinyatakan mengandung dan kemudian dapat melahirkan seorang anak perempuan. Kehadiran seorang anak yang sudah bertahun-tahun ditunggu dengan perjuangan berat, akhirnya dapat merubah kehidupan Honami.

*Berkat anak gadisnya, suasana keluarganya-yang tadinya terasa dingin-dan hubungannya dengan mertua pun jadi membaik. Kelahiran anak perempuan mengubah kehidupan Honami seluruhnya. Masa lalunya pedih gara-gara perawatan kemandulan yang menyakitkan. Oleh karena itu, kehadiran Kaoru sangat berharga. Merupakan sebuah mukjizat untuk memiliki Kaoru di usianya yang empat puluh tahunan. (Holy Mother (聖母), hal. 10)*

Namun suatu hari, di kota Aiide yang tenang, terjadi sebuah kasus yang menggemparkan dimana terdapat anak laki-laki yang ditemukan dalam keadaan sudah tak bernyawa lagi. Ia dihabisi dengan cara keji dan brutal, dimana anak itu mengalami kekerasan seksual setelah direnggut nyawanya. Mengetahui hal tersebut,

tentu saja Honami menjadi sangat ketakutan dan mengkhawatirkan keselamatan putrinya itu. Ia tidak bisa diam saja saat ada pembunuh kejam berkeliaran di sekitarnya, dan tentu saja dapat mengancam keselamatan putrinya. Tanpa bantuan polisi atau detektif sekalipun, Honami bersumpah untuk melindungi anaknya itu dengan segala kemampuan yang ia miliki, walaupun hanya dilakukannya seorang diri.

*Tiba-tiba dia merasa tertekan hanya dengan melihat lokasi pembunuhan di acara berita. Dia harus bisa melindungi putrinya dengan tangannya sendiri. (Holy Mother (聖母), hal.17)*  
*Yang bisa melindungi senyumnya, hanya aku sendiri. (Holy Mother (聖母), hal.52)*

Honami pun bertekad melakukan investigasi terhadap seorang laki-laki yang ia yakini sebagai pelaku kejahatan. Ia ingin melakukan sendiri investigasi tersebut karena apa yang ia sampaikan kepada polisi tidak dihiraukan dan dianggap hanya angin lalu oleh pihak kepolisian.

*“Saya tahu dengan pasti. Pria itu penjahatnya. Tidak salah lagi. Jika pihak Anda tidak menangkapnya, akan muncul lagi korbannya. Saya mohon. Tangkap dia.”*

*[Saya tidak bisa mengatakan apa-apa lagi tentang hal ini lebih dari ini. Saya mohon maaf]*  
*Setelah kata-kata maaf yang sopan itu, teleponnya terputus. Sembari melongo Honami menjauhkan smartphonenya dari telinga. Pria itu tidak ditangkap? Honami terpuruk di sofa. “Padahal pria itu pasti orang jahat...” sambil bergumam seperti itu seorang diri, Honami menggigiti kuku jempolnya. Kukunya terkikis dengan bentuk yang aneh. Namun Honami tetap menggigitnya sampai rasa sakit yang sangat pun menyerang jempolnya. Kukunya nyaris terkelupas, dan mengeluarkan darah. Akhirnya wanita itu sadar dan kemudian menghembuskan nafas. Polisi...tidak bisa diandalkan. (Holy Mother (聖母), hal. 137)*

Kemauannya yang keras untuk melindungi anaknya membuat ia akan melakukan apapun meski harus dilakukan sendirian. Hal ini dilakukan Honami karena ia sangat mencintai Kaoru dan rela melakukan apa saja demi keselamatan anaknya. Honami pernah mengalami kesulitan dalam proses kehamilannya. Ia mengalami tiga kali keguguran karena kondisi

rahimnya. Honami bersumpah bahwa dia akan melindungi anaknya dengan cara apapun.

*Dia bertekad untuk menjaga anak ini sebagai miliknya yang paling berharga. Dia bertekad untuk memberikan seluruh hidupnya. Karena anak ini akhirnya...akhirnya datang dalam kehidupannya. Hari itu, Honami bersumpah. Karena itu, Honami berbisik dalam hatinya sambil memasuki apartemen, karena itu aku harus melindungi anak gadisku. Tidak peduli apapun caranya. (Holy Mother (聖母), hal. 235)*

Kecintaan Honami terhadap anaknya terlihat saat ia rela berkorban untuk mengurus bayi kecil bernama Kaoru yang ternyata bukan anaknya namun adalah anak dari Makoto. Ia harus memprioritaskan diri untuk menjaga seorang anak berumur tiga tahun walaupun pekerjaan yang bisa dikerjakan dari rumah sangatlah terbatas.

*Yang memberi bayi itu nama Kaoru adalah ibunya. Ibunya juga yang mengurus segala macam hal untuk sang bayi dan Makoto, seperti menyerahkan laporan kelahiran dan administrasi adopsi anak. Kaoru yang masuk dalam kartu keluarga kedua orang tuanya tercatat bukan sebagai ‘anak angkat’ melainkan ‘anak’, di dalam Buku Kesehatan Ibu dan Anak juga tertulis orang tua Kaoru adalah ayah dan ibu Makoto, setelah mereka menceritakan kepada yang berwajib. (Holy Mother (聖母), hal. 265)*

Honami pula yang berjuang meyakinkan Makoto agar bersedia melahirkan anak yang dikandungnya, walaupun Makoto merasa jijik karena janin yang dikandungnya adalah akibat perkosaan yang dialaminya. Dengan sabar dan bijak, Honami memberi pengertian kepada Makoto.

*“Lagipula Makoto, mengandung dan berhasil melahirkan anak bukanlah hal yang bisa terjadi sehari-hari. Ibu pernah bercerita kepadamu, kan? Sebenarnya kau memiliki tiga orang kakak. Tetapi ibu tidak bisa melahirkan mereka semua. Ibu tidak pernah tidak memikirkan wajah mereka setiap hari. Ibu ingin sekali melihat wajah-wajah mereka. Ibu ingin hidup gembira dengan kalian. Karena anak ini harus lahir, anak ini datang kepadamu. Mungkin ini tanda bahwa kakak-kakakmu kembali. Dia sedang berjuang sekuat tenaga untuk bisa terlahir suatu hari nanti, lho”, Ibunya berkata-kata sambil menahan*

*air matanya. Mungkin ibunya pun mengenang kembali saat-saat itu. (Holy Mother (聖母), hal.264)*

Karena terpancing akan insting seorang ibu yang ingin melindungi anaknya, Honami melakukan penyelidikan sendiri untuk mencari tahu siapa yang melakukan kejahatan di kota Aiide terhadap kasus pembunuhan beruntun yang menimpa anak-anak kecil di bawah umur. Ia menyelinap masuk ke dalam apartemen seorang laki-laki yang gerak-geriknya mencurigakan.

*Honami mengambil album dan membukanya. Halaman albumnya bisa ditambahkan, dan setiap halamannya terdiri dari dua foto dengan ukuran standar. Pada foto yang mana pun, ada anak perempuan di dalamnya. Anak-anak itu tidak berpose untuk difoto, tapi mereka sedang berjalan-jalan atau berbelanja. Pasti mereka tidak sadar bahwa mereka sedang difoto. Mungkin mereka masih sekolah menengah; ada yang memakai seragam, ada juga yang memakai pakaian pribadi, ada bermacam-macam. Ada juga foto menjijikkan di mana celana gadis-gadis itu nyaris kelihatan dari balik rok. Pasti ini hasil cetak foto kamera digital yang pria itu cetak sendiri di rumah (Holy Mother (聖母), hal.188)*

Honami yang bermaksud melindungi Makoto dari jejak pembunuhan yang dilakukannya, bertindak secara sembunyi-sembunyi dengan perencanaan yang sangat matang. Tidak ada seorang pun yang mengetahuinya, bahkan oleh Makoto sendiri. Inilah bukti perjuangan Honami yang rela melakukan apapun bahkan sesuatu yang mengerikan demi menghapus jejak kriminal yang dilakukan anaknya. Tindakan Honami ini secara sadar dia lakukan, sehingga bila dikaitkan dengan teori psikoanalisis Freud, dapat dikatakan inilah tindakan *ego* Honami yang ia lakukan tanpa memperdulikan *Superego* atau nilai-nilai moral dan kebenaran.

*"Kali ini Jari-jari Dipotong: Kasus Pembunuhan Anak Berantai Kota Aiide", Apa ini...? Dengan jemarinya yang gemeteran, Makoto menyentuh layar smartphone di salah satu judul. Layarnya menampilkan artikel beritanya. Korban kedua yang bernama Sanbongi Satoshi (5) ditemukan sudah menjadi mayat di bekas Rumah Sakit Shirota yang berada di dalam kota. Kepolisian melanjutkan penyelidikan dengan asumsi bahwa pelakunya sama dengan pelaku pembunuhan Yaguchi Yukio. Mayat*

*korban telanjang bulat dan ada bekas luka penyiksaan, selain itu, kemaluan dan kesepuluh jarinya dipotong. Jari-jarinya dipotong. Artinya, tidak mungkin polisi menemukan bekas kulit dan darah Makoto dari jemari tersebut. Tiba-tiba ketegangan tubuhnya terlepas, dan dia menandatangani tubuhnya pada bangku. Syukurlah. Kali ini pun dia berhasil lolos. Namun, tentu saja pertanyaan itu muncul. Sebenarnya... siapa? (Holy Mother (聖母), hal.218)*

Karakter Honami merupakan seorang ibu yang rela menjadi iblis untuk melindungi putrinya dari kecemasan dan trauma perkosaan yang dialami anak semata wayangnya, Makoto. Seorang ibu yang rela melakukan apa saja, agar putrinya bisa kembali tersenyum menatap dunia. Ini pun akhirnya disadari oleh Makoto, bahwa ibunya, Honami lah yang menghapus semua jejak pembunuhan yang ia lakukan, dan Honami lah yang membunuh Tateshina Hideki si pelaku perkosaan terhadap Makoto saat ia berusia 13 tahun. Honami membuat semua bukti pembunuhan ada di apartemen Tateshina Hideki, seolah-olah Tateshina adalah pelaku pembunuhan anak-anak kecil tersebut dan kemudian bunuh diri untuk menebus dosanya.

*Honami: "Tapi sudah tidak apa-apa. Laki-laki itu katanya sudah mati. Bunuh diri, katanya." Ucap Honami.*

*Makoto: "Bunuh diri...?" Suara Makoto gemeteran. Honami: "Iya. Tentu saja untuk menebus dosanya. Di kamarnya ditemukan foto mayat dua orang anak laki-laki dan bagian tubuhnya. Dia memakan sendiri buah perbuatannya."*

*Foto? Bagian tubuh? Sebenarnya, apa maksudnya? Jangan-jangan kunci lacinya....*

*Honami: "Sebenarnya, ibu pernah menelepon dan melaporkan kesaksian. Hebat, kan? Jadi detektif tadi datang untuk mendengar kesaksiannya dengan rinci." Ujar ibunya dengan bangga seolah dia sudah melakukan hal besar, sambil menyisir rambut Kaoru dengan sebelah tangannya. Saat itulah Makoto bisa mengerti semuanya. Siapa yang memerkosanya—bukan, memperlihatkan seolah mayat baru saja diperkosanya. Siapa yang memotong jemari Satoshi dan merapikan mayatnya. Siapa yang membawa pergi barang bukti dan membersihkan laci mejanya. Di sini juga ada. Seorang ibu yang rela menjadi iblis untuk melindungi putrinya.*

**Honami: "Dengan ini, semua sudah selesai." Ibunya tersenyum damai, seolah sedang memeluk dunia Makoto. (Holy Mother (聖母), hal.275)**

Dari novel *Holy Mother* (聖母) ini, pembaca akan disadarkan kembali bahwa seorang ibu benar-benar bisa dan akan melakukan apapun untuk menjaga kedamaian keluarga, terutama jika menyangkut anak-anak. Bahkan seorang ibu yang bersedia menjadi sosok yang paling buruk sekalipun untuk melindungi anak-anaknya. Bagi Honami, ia sudah merasa sejiwa dengan anaknya.

**Bagi seorang ibu, anak adalah satu kesatuan, satu tubuh dan satu jiwa dengannya. Berbeda dengan laki-laki yang baru menjadi ayah setelah anak itu lahir, seorang wanita menjadi ibu langsung setelah nyawa itu ada di dalam perutnya. Ah tidak, lebih tepatnya seorang wanita menjadi ibu sejak dia mulai berusaha untuk mempunyai anak. (Holy Mother (聖母), hal.53)**

Berdasarkan kutipan-kutipan novel di atas, dapat diketahui bahwa dengan dorongan *Id* yaitu rasa cinta terhadap putrinya dapat menempatkan *Ego* dalam kondisi aman dan menyelamatkan diri dari hukuman dunia di luar dan lingkungannya. Selain itu, dari analisis kutipan-kutipan novel diatas dapat ditarik beberapa kesimpulan berikut:

1. Naluri cinta seorang ibu (*Id*) mendesak *Ego* untuk melakukan apa saja demi melindungi putri yang dicintainya. Honami bahkan rela menjadi iblis untuk melindungi putrinya dari kecemasan dan trauma perkosaan yang dialami anak semata wayangnya, Makoto.
2. *Ego* melakukan pengaburan jejak pembunuhan yang dilakukan Makoto terhadap dua anak kecil di kota Aiiide, disamping juga *Ego* membuat Honami membunuh Tateshina karena dendam atas perkosaan yang dilakukan Tateshina terhadap Makoto dan menyebabkannya hamil dan mengalami trauma sepanjang hidupnya.
3. Dari kisah novel tersebut dapat diketahui bahwa pada *Ego* tidak ada konflik atau pergolakan batin yang melibatkan *Id* dan *Superego*. Honami melakukan penghapusan jejak atas pembunuhan yang dilakukan Makoto adalah bentuk nafsu atau insting (*Id*) dan dia melakukannya tanpa ada pergolakan dengan prinsip-prinsip moral (*Superego*).

## SIMPULAN

Topik utama novel *Holy Mother* (聖母) adalah kegigihan dan rasa cinta seorang ibu yang dapat melakukan apapun untuk melindungi anaknya. Tema sentralnya adalah segala kecemasan dan kekhawatiran yang dirasakan dari trauma masa lalu dapat dituntaskan dengan kasih sayang seorang ibu yang berjuang dengan caranya sendiri bahkan dengan mengabaikan *Superego* atau nilai-nilai moral dan kebenaran, dan ia lakukan tanpa sepengetahuan siapapun.

Berdasarkan kajian psikoanalisis, karakter Honami dapat disimpulkan sebagai berikut:

Pertama, karakter tokoh utama yaitu Honami memperlihatkan bahwa *Id* memmpengaruhi segala pemikiran dan tindakannya, dimana dalam *Id* dibutuhkan pemenuhan hasrat secepatnya tanpa memperdulikan lingkungan realitas secara akal sehat. Honami tidak lagi mempertimbangkan realita akal sehat untuk menyerahkan semua kasus pembunuhan kepada polisi, karena instingnya ingin melindungi putri satu-satunya yang sangat ia harapkan kehadirannya semenjak dulu. Hal ini dipicu oleh berbagai peristiwa yaitu ketidakberuntungan dirinya sendiri yang mengalami masalah kemandulan, dan keberadaan Kaoru yang mengubah hidupnya menjadi lebih bermakna. Munculnya ketakutan dan kekhawatiran akan keselamatan Kaoru karena terjadi pembunuhan beruntun yang menimpa anak kecil di kota tempat tinggalnya, menjadikannya memalsukan dan mengaburkan fakta pembunuhan yang dilakukan Makoto untuk melindungi putrinya tersebut. Ketakutan yang berasal dari traumatik yang dialami Honami inilah yang menurut Freud berasal dari alam bawah sadar.

Kedua, kepribadian tokoh utama yaitu Honami adalah didominasi oleh unsur kepribadian *Ego* yang mengalahkan *Superego*. Dari penjelasan di atas dapat diketahui bahwa *Id*-insting seorang ibu untuk menyelamatkan putrinya mendorong *Ego* untuk menghapus jejak pembunuhan yang dilakukan Makoto, dengan membuat mayat-mayat tersebut seakan-akan telah diperkosa. Honami juga melindungi sang anak dengan membuat seakan-akan Tateshina lah dalang pelaku pembunuhan berantai, dengan meletakkan semua barang bukti di apartemen Tateshina. Honami pula yang melakukan pembunuhan terhadap Tateshina dan membuatnya seperti kasus bunuh diri, karena

dendam atas ketakutan traumatik yang dialami Honami akibat perkosaan yang dilakukan Tateshina terhadap Makoto saat masih duduk di bangku SMP. Tindakan Honami ini secara sadar dia lakukan, sehingga bila dikaitkan dengan teori psikoanalisis Freud, dapat dikatakan inilah tindakan *ego* Honami yang ia lakukan tanpa memperdulikan *Superego* atau nilai-nilai moral dan kebenaran. Disini *Superego* tidak berjalan dengan semestinya, karena latar belakang Honami yang merasakan trauma perkosaan yang dialami Makoto, dan juga perjuangannya yang sangat berat untuk dapat memiliki anak membuat *Superego* dikalahkan oleh *Ego*. *Ego* kemudian melakukan tindakan-tindakan penghapusan jejak kriminal pembunuhan yang dilakukan secara diam-diam tanpa sepengetahuan Makoto sekalipun. Keinginan dari *Id* untuk melindungi putrinya menjadi energi dan kekuatan iblis untuk melakukan penghapusan jejak dengan mencuci mayat menggunakan cairan kimia setelah terlebih dahulu memotong alat kelamin dan memotong jari-jari mayat dengan sadis. *Ego* pula yang menghabisi Tateshina dan membuat seakan-akan Tateshina lah pelaku pembunuhan berantai di kota Aiide. Semua itu dilakukan karena insting seorang ibu yang rela melakukan apa saja untuk melindungi putrinya dari tekanan akibat pengalaman traumatis yang masih menghantui Makoto.

Disini dapat kita simpulkan bahwa standar kebaikan yang dianut oleh Honami adalah standar kebaikan dari sudut pandang dirinya untuk melindungi putri semata wayangnya dari perilaku kejahatan orang-orang di sekitarnya.

## REFERENSI

- Ahmad, M. (2011). AGAMA DAN PSIKOANALISA SIGMUND FREUD. *Religia*, 14(9), 277–296.
- Akiyoshi, R. (2016). *Holy Mother (聖母)*. Haru.
- Ambarini, R. (2008). *Konflik batin Dolour Darcy- Pendekatan Psikoanalisis Freud Terhadap Tokoh Utama Novel Poor Mans's Orange Karya Ruth Park*.
- Felman, S., & Laub, D. (1992). *Testimony: Crises of witnessing in literature, psychoanalysis, and history*. Taylor & Francis.
- Syahfitri, N. K. (2017). Analisis Psikologis Tokoh Tanaka Makoto dalam Novel "Holy Mother" Karya Akiyoshi Rikako (Skripsi). Universitas Sumatra Utara.
- Nurhayati, H. (2008). *ASPEK KEPERIBADIAN TOKOH UTAMA DALAM NOVEL MIDAH, SIMANIS BERGIGI EMAS KARYA PRAMOEDYA ANANTA TOER: TINJAUAN PSIKOLOGI SASTRA* (Skripsi). Universitas Muhammadiyah Surakarta.
- Puteri, A. A. (2017). *ANALISIS GEJALA PTSD (POST TRAUMATIC STRESS DISORDER) YANG DIALAMI OLEH TOKOH TANAKA MAKOTO DALAM NOVEL SEIBO KARYA AKIYOSHI RIKAKO* (Skripsi). Universitas Darma Persada.
- Sembiring, R. H., Herlina., & Attas, S. G. (2018). Kepribadian Tokoh Utama dalam Novel Negeri Para Bedebah Karya Tere Liye Kajian Psikoanalisis Carl. *Transformatika: Jurnal Bahasa, Sastra, Dan Pengajarannya*, 2(2), 157–172. <https://doi.org/10.31002/transformatika.v>
- Setianingrum, R. (2008). *ANALISIS ASPEK KEPERIBADIAN DALAM NOVEL SUPERNOVA EPISODE AKAR KARYA DEWI LESTARI: TINJAUAN PSIKOLOGI SASTRA* (Skripsi). Universitas Muhammadiyah Surakarta.
- Sudikan, S. Y. (2015). Pendekatan interdisipliner, multidisipliner, dan transdisipliner dalam studi sastra. *Paramasastra*, 2(1).
- Wiyatmi. (2011). *Psikologi Sastra*. Kanwa Publisher.



# JAPANEDU: Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang

<http://ejournal.upi.edu/index.php/japanedu/index>



## **Giving Reasons as Politeness Strategy in Refusal Speech Act *A Contrastive Analysis on Japanese Native Speakers and Indonesian Japanese Learners Refusal Speech Act***

Lisda Nurjaleka

*Department of Japanese Language Education, Universitas Negeri Semarang, Semarang, Indonesia*

[lisda\\_nurjaleka@yahoo.com](mailto:lisda_nurjaleka@yahoo.com)

### ABSTRACT

Japanese Language considered as an HC (high context) language. It means that the context of communication is essential in socio-cultural discourses regarding Japanese language use. Nishijima (2007) stated that communicative behaviors are different in every language because of its' socio-cultural background. Japanese is a language that often considers other people's feeling, especially interlocutor's. This paper aims to analyze and explain how Japanese native speaker and Indonesian Japanese learners giving an explanation or reason in a refusal situation. The data in this study collected through Discourse Completion Test (DCT), consisting a single role-play situation which participant will read to elicit the response from another participant. The participants in this study including 16 Japanese Native Speakers (JNS) and 20 Indonesian Japanese Learners (IJL). The results of this study suggested that both JNS and IJL tend to explain their reason in a refusal situation based on the socio-cultural background in their language. JNS tend to make an excuse for the things that they can not do and ask if it may make their interlocutor in trouble because of their incapability. On the other hand, Indonesian tend to make an excuse because they feel they are incapable of doing the request.

### KEYWORDS

Contrastive study; Politeness behaviour; Reason; Refusal

### ARTICLE INFO

*First received: 04 May 2019*

*Final proof accepted: 27 June 2019*

*Available online: 28 June 2019*

## PENDAHULUAN

Bahasa Jepang disebut sebagai bahasa yang memiliki tingkat kompleksitas yang sangat tinggi, terutama dalam hal konteks bahasa yang digunakan. Hal ini berarti bahwa konteks

berkomunikasi sangatlah penting dalam wacana sosial budaya yang berkaitan dengan penggunaan bahasa Jepang.

Dalam setiap Bahasa yang ada di dunia, kesantunan berperilaku biasanya berbeda-beda antara Bahasa yang satu dengan bahasa lainnya. Nishijima (2007) menyatakan bahwa dalam setiap

bahasa, perbedaan perilaku berkomunikasi seseorang terjadi karena adanya pengaruh dari latar belakang sosial budaya setiap negara yang berbeda juga.

Seorang penutur asli bahasa Jepang yang berprofesi sebagai dosen di sebuah universitas Jepang memiliki pengalaman menarik mengenai perilaku berkomunikasi mahasiswanya. Beliau bermaksud untuk menanyakan sesuatu kepada mahasiswa tersebut dan alangkah terkejutnya beliau ketika jawaban yang diperoleh dari mahasiswa tersebut adalah “*wakarimasen/saya tidak tahu*”. Umumnya, ketika tidak mengetahui apa maksud pertanyaan yang dilontarkan oleh lawan bicara, maka orang Indonesia cenderung akan menjawab dengan lugas dengan “saya tidak tahu”. Bagi orang Jepang, hal tersebut cukup mengejutkan karena perilaku tersebut sangat berbeda dengan kebiasaan kesantunan berperilaku di Jepang.

Orang Jepang ketika mendapatkan sebuah pertanyaan dari lawan bicara, walaupun mereka tidak mengerti tentang yang apa yang ditanyakan, mereka cenderung akan mencarikan informasi untuk menjawab pertanyaan tersebut. Selain itu, ketika mereka mengungkapkan ketidaktahuannya akan pertanyaan yang dilontarkan oleh lawan bicara, mereka tidak secara langsung mengungkapkan ketidaktahuannya tersebut. Kalimat seperti “*watashi wa sono koto o wakarimasen/saya tidak tahu akan hal itu*”, sangat jarang diungkapkan oleh orang Jepang. Biasanya mereka akan berujar, “*yoku wakarimasen ga, hoka no hito ni kiite mimashou/saya juga tidak paham, tapi saya coba tanyakan sama orang lain ya*” atau “*yoku wakarimasenga, \_\_\_san ni kiitara dou desuka? / saya juga tidak paham, bagaimana kalau kita tanyakan pada saudara.....*”.

Percakapan di atas menunjukkan bahwa terdapat perbedaan ragam bahasa komunikasi dalam bahasa Jepang dan bahasa Indonesia. Jika suatu komunikasi atau interaksi linguistik berjalan lancar, dengan kata lain sesuai yang diperkirakan, maka dapat disimpulkan bahwa normalitas komunikatif telah sesuai.

Menurut Nishijima (2007), pada umumnya, dalam komunikasi sehari-hari, pembicara akan menganggap lawan bicara menggunakan kaidah bahasa yang sama dengan pembicara. Hal itu merupakan suatu keharusan bagi setiap partisipan dalam berkomunikasi. Dengan kata lain, pembicara jarang mempertanyakan perilaku komunikasinya sendiri dan jarang pula mengetahui bahwa perilaku berkomunikasi lawan

bicaranya ternyata tidak lazim. Dengan alasan karena mereka berkomunikasi dengan latar belakang sosial budaya yang sama.

Tetapi jika lawan bicara mempunyai latar belakang sosial budaya yang berbeda dari pembicara, maka lawan bicara akan menyadari bahwa perilaku pembicara tidak lazim dan dia akan merasa tidak dipahami oleh pembicara, karena perilaku berkomunikasi yang dia harapkan tidak berjalan dengan lancar pada situasi tersebut (Marui, Noro, Nishijima, Reinelt, & Yamashita, 1996). Dalam berkomunikasi biasanya setiap partisipan menganggap lawan bicara mempunyai aturan yang sama dalam berkomunikasi, dan akan menjadi suatu masalah jika aturan tersebut ternyata berbeda dari yang dipikirkan.

Setiap bahasa mempunyai sebuah konsep perilaku berkomunikasi. Hal ini berkaitan erat dengan tingkat kesopanan dan kebiasaan berkomunikasi dari seseorang. Contohnya dalam bahasa Jepang *teinei* (sopan), *yasashii* (akrab), *namaiki* (arogan). Dalam bahasa Indonesia tingkatan kesopanannya menjadi sopan, biasa, dan kasar. Sebuah studi mengenai analisis kontrasif tentang konsep berkomunikasi dalam sebuah bahasa, terungkap bahwa setiap bahasa memiliki ragam bahasa yang unik dalam penggunaannya di kehidupan sehari-hari.

Penelitian ini merupakan penelitian pendahuluan mengenai pengungkapan alasan dalam situasi penolakan, sebagai salah satu kesantunan berperilaku. Penelitian ini dilaksanakan karena adanya perbedaan konsep berkomunikasi (yang diasumsikan memiliki latar belakang sosial budaya bahasa yang berbeda) di setiap bahasa, yang mengakibatkan kesalahpahaman antara pembicara dan lawan bicara. Dalam penelitian ini, peneliti akan fokus pada pengungkapan alasan dalam situasi penolakan dan akan membandingkan pengungkapan alasan dalam tindak tutur penolakan orang Jepang serta pembelajar bahasa Jepang orang Indonesia. Selain itu, penelitian ini juga akan menganalisis bentuk-bentuk ungkapan penolakan sebagai suatu usaha kesantunan dalam berkomunikasi.

## PENELITIAN TERDAHULU

Ada beberapa penelitian terdahulu yang meneliti tentang kesopansantunan yang berhubungan dengan perilaku berkomunikasi. Salah satunya yaitu penelitian tentang analisis kontrasif antara

konsep kesantunan berperilaku bahasa Jepang dan Jerman (Nishijima, 2010). Selain itu terdapat beberapa penelitian kontrastif mengenai penggunaan alasan atau *iwake* dalam tindak tutur penolakan dalam bahasa Jepang dan Bahasa Inggris (Nishimura, 2007), dan strategi penolakan yang digunakan oleh orang Jepang dan Amerika (Yokoyama, 1993). Selain itu terdapat penelitian mengenai strategi tindak tutur penolakan oleh orang Jepang (Moriyama, 1990), dan gestur penolakan penutur Jepang (Jungheim, 2006). Nishijima (2007) mengemukakan bahwa penggunaan konsep evaluasi dalam proses komunikasi datang dari empati lawan bicara terhadap pembicara. Empati muncul juga sebagai salah satu tindakan sebagai jalan untuk konsep yang berkaitan dengan formulasi linguistik dalam bahasa Jepang. Nishijima (2007) juga mengungkapkan bahwa komunikasi antar budaya terasa sulit karena ada perbedaan jenis tindak tutur setiap bahasa yang diperkuat dengan pola formulasi linguistik dari masing-masing masyarakat. Sehingga walaupun kita ada di dalam proses perubahan globalisasi, kita lebih baik mempertimbangkan bentuk komunikasi masing-masing masyarakat.

Selain itu Fujimori (1995) juga menyatakan bahwa orang Jepang ketika menolak dalam situasi permohonan, mereka tidak menggunakan ungkapan "*yaritakunai/saya tidak mau*" tetapi menggunakan bentuk ungkapan "*tsugo ga tsukanai/waktunya tidak cocok*". Walaupun lawan bicara tidak ingin melakukannya, tetapi setidaknya untuk mempertimbangkan perasaan pembicara, maka digunakan ungkapan di atas.

Kemudian Nishimura (2007) menyatakan bahwa penutur asli Jepang dan penutur asli Inggris ketika dihadapkan dalam situasi penolakan terhadap suatu ajakan, alasan penolakan yang banyak digunakan oleh kedua penutur tersebut adalah menggunakan ungkapan "*yoji/ada keperluan*", dan "*taichou furyo/ga enak badan*". Tetapi jika dibandingkan dengan penutur asli Inggris, penutur asli Jepang cenderung banyak menggunakan alasan "*taichou furyo/ga enak badan*" dan "*isogashii/sibuk*".

Dari penelitian-penelitian tersebut di atas, peneliti tertarik untuk melakukan penelitian bagaimana perbandingan dalam hal penyampaian alasan dalam situasi penolakan yang dilakukan oleh penutur asli Jepang dan pembelajar bahasa Jepang orang Indonesia. Hal ini dilakukan untuk melihat adakah pengaruh dari cara berkomunikasi masyarakat Indonesia terhadap cara

penyampaian alasan pembelajar bahasa Jepang orang Indonesia, serta bagaimana bentuk alasan yang diungkapkan kepada lawan bicara. Hal ini akan membentuk hipotesa seperti berikut ini:

H1: Pembelajar bahasa Jepang orang Indonesia akan cenderung menyatakan alasan dengan terus terang tanpa adanya ungkapan-ungkapan penghalus untuk membedakan tingkatan kesopanan terhadap lawan bicara.

H2: Seperti halnya dengan penelitian-penelitian di atas, penutur asli Jepang cenderung memberikan suatu alasan yang tidak sesuai kenyataan. Hal tersebut dilakukan agar tidak menyinggung perasaan lawan bicara.

## METODE PENELITIAN

Peneliti menggunakan metode DCT (*Discourse Completion Test*) seperti halnya para ahli linguistik seperti Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990). Yang dimaksud dengan DCT (*Discourse Completion Test*) adalah suatu angket berbentuk test menyelesaikan suatu percakapan yang telah ditentukan kondisi dan persyaratannya. Kemudian responden diminta untuk mengisi tes dalam bentuk percakapan. Karena bukan percakapan yang sesungguhnya, ada permasalahan yang timbul ketika pengisian angket. Tetapi jika kondisi dan persyaratan sudah ditetapkan dan digambarkan dengan jelas, maka keuntungan dari angket DCT ini adalah dapat mengumpulkan data penelitian yang cukup banyak dalam jangka waktu yang singkat.

Data responden dikumpulkan mulai dari bulan Juni 2013 sampai dengan Agustus 2013, dengan ketentuan data responden pembelajar bahasa Jepang sebanyak 20 orang dari Universitas S, dan 16 orang penutur asli Jepang dari mulai usia 20 tahun sampai dengan 50 tahun.

Angket DCT yang telah dibuat mencakup 2 buah soal percakapan dengan situasi menolak ajakan dan menolak permintaan. Adapun target dari data penelitian terbagi menjadi 3 yaitu senior, junior dan teman. Berikut adalah contoh soal angket yang digunakan.

(Angket DCT 1: Situasi penolakan ajakan)

*Shinkan Kompa* : [Welcome Party]

*Bamen*: Anata wa shitashikunai sempai ni shinkan kompa ni sanku suru youni sasowaremasu. Shikashi, anatawa pa-ti ni iku no wa Amari suki dewa nai node, sono shinkan kompa ni sanku dekinai to kotowaritai desu.

[Situasi: Anda diminta untuk bergabung di welcome party oleh senior yang tidak terlalu akrab dengan Anda. Tetapi, anda sebetulnya tidak suka pesta, bagaimana anda menolak untuk menghadiri pesta tersebut.]

*Sempai*: Asatte no shinkan kompa, ikanai?

[Senior]: Maukah kamu ikut welcome party lusa besok?

*Watashi*:

Saya:

(Angket DCT 2: Situasi penolakan bentuk permohonan)

*Tsuuyaku* [Interpreter]

*Bamen*: Anata wa shitashii kohai ni Ahmad sensei no kyouju no kouenkai de tsuuyaku suru you tanomaremasu. Shikashi, ichido mo tsuuyaku o shita koto ga arimasen shi, senmon yougo mo shirimasen. Kotowaritai desu.

Situasi: Anda diminta untuk membantu menjadi interpreter di Kuliah umum Prof. Ahmad oleh junior yang cukup akrab dengan Anda. Tetapi, sebetulnya Anda tidak bisa, bagaimana Anda menolak tawaran tersebut.

*Kohai*: B san, Kyouju no kouenkai de tsuuyaku wo shitekureru hito wo sagashite irun dakedo, onegai dekinai?

*Junior*: B san, Saya lagi cari orang untuk bantu Prof Ahmad di kuliah umumnya menjadi interpreter beliau? Bisa bantu tidak ya?

*Watashi*:

Saya:

Penelitian ini menganalisis data dengan menggunakan semantik formula yang biasanya digunakan untuk analisis wacana seperti Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) dan Ito (2005).

Ikeda (2008) melaporkan hasil penelitiannya bahwa dari 84 contoh soal mengenai situasi penolakan yang menggunakan semantik formula, 74% data responden memberikan alasannya. Sehingga dapat disimpulkan bahwa penutur asli Jepang cenderung cukup banyak mengungkapkan alasan ketika menyatakan suatu penolakan.

Dalam penelitian ini, peneliti ingin melihat bagaimanakah penyampaian alasan yang digunakan pembelajar bahasa Jepang dan penutur asli bahasa Jepang.

## HASIL DAN PEMBAHASAN DATA PENUTUR ASLI ORANG JEPANG

### Alasan Penolakan untuk Suatu Ajakan

Dalam angket DCT 1, penyampaian alasan yang digunakan adalah untuk suatu ajakan ke sebuah pesta di kampus. Dalam penjelasan situasi, peneliti menjelaskan situasinya terlebih dahulu dan mengungkapkan penolakan yang dilakukan karena si lawan bicara tidak suka pergi ke pesta. Setelah dilakukan analisa terhadap jawaban-jawaban angket tersebut, ungkapan linguistik yang sering digunakan di dalam jawaban dapat dikelompokkan menjadi 2 grup, yaitu alasan yang digunakan adalah ketidaksukaan dan alasan lainnya adalah ada suatu keperluan. Contohnya alasan yang digunakan karena ada keperluan seperti “yoji ga arimasu node/saya ada urusan”, sedangkan alasan ketidaksukaan “Pa-ti- wa nigate nan desu/Saya tidak cocok dengan pesta”. Dalam hal ini, peneliti akan membagi hasil penelitian ke dalam 2 tabel, dikarenakan penutur asli Jepang cenderung membuat alasan yang berbeda untuk “me ue no hito/orang yang usianya lebih tua” dan “shitashikunai hito/orang yang tidak begitu akrab”, dan disisi lain alasan yang digunakan untuk “tomodachi & kohai/teman & junior” untuk teman dan junior yang akrab. Hasilnya dapat dilihat dari tabel 1 dan 2.

Tabel 1: Bentuk penyampaian alasan (*senpai/senior*).

Bentuk penyampaian	Perbandingan
Alasan tidak suka	12.5%
Alasan ada keperluan	75%
Lainnya	12.5%

Tabel 2: Bentuk penyampaian alasan (*tomodachi/teman & kohai/junior*).

Bentuk penyampaian	Perbandingan
Alasan tidak suka	50%
Alasan ada keperluan	19%
Lainnya	31%

Dari tabel 1 dan 2 di atas dapat dilihat bahwa penyampaian alasan untuk penolakan terhadap suatu ajakan ke pesta terbagi menjadi 2 alasan yaitu ketidaksukaan, contohnya seperti “*pa-ti ga amari suki jya arimasenga/saya tidak terlalu suka pesta*”, atau “*pa-ti wa nigate nan desu/saya tidak cocok dengan pesta*”. Peneliti membagi ke dalam 2 kelompok besar, karena dilihat dari kecenderungan jawaban yang berbeda terhadap lawan bicara. Tabel 1 adalah hasil jawaban responden kepada senior dan orang yang tidak terlalu akrab. Sebanyak 75% penutur Jepang mengemukakan alasan bahwa mereka ada keperluan seperti “*baito ga haichatte.../saya ada kerja paruh waktu...*”, “*yoji ga arimasunode/saya ada keperluan*”, atau “*sono hi wa kaisha no hou de, settai ga haitte irun desu/hari itu saya ada urusan di kantor*”. Sedangkan 12.5% dari penutur asli cenderung menggunakan alasan pribadi yang ditujukan untuk lawan bicara yang kedudukannya lebih tinggi, dalam hal ini senior dan orang yang tidak akrab. Selain itu terdapat kurang lebih 12.5% penutur asli menjawab dengan ungkapan ambigu seperti “*sono hi wa chotto.../hari itu seperti...*” atau ada juga yang menjawab “*shinyusaki no koto wa amari yoku shiranai kara/saya tidak kenal dengan penyelenggara*”.

Sedangkan dari tabel 2 dapat dilihat bahwa jika lawan bicara adalah orang yang akrab misalnya teman ataupun junior, alasan yang digunakan pun cenderung berbeda. Sebanyak 50% penutur asli mengemukakan alasan ketidaksukaan akan pesta, selain itu 31% responden mengemukakan hal lainnya di luar tersebut seperti bentuk penolakan langsung tanpa alasan “*akannen?/saya gak bisa pergi*” atau bentuk ambigu seperti “*shinkan konpa wa chotto.../kalo pesta, seperti saya kurang suka...*” atau dengan alasan “*chotto tsukareteirunode*

*yametokimasu/ kayanya saya tidak ikut karena capek*”. Sedangkan sebanyak 19% responden menyatakan alasan karena ada keperluan.

Dari data jawaban di atas dapat disimpulkan bahwa, pada data penutur asli bahasa Jepang, penyampaian alasan ‘ada keperluan’ sering dikemukakan kepada lawan bicara yang tidak akrab atau kedudukannya lebih tinggi. Hal ini diasumsikan bahwa untuk menghargai perasaan lawan bicara, perasaan pribadi cenderung tidak terlalu diungkapkan.

### Alasan Penolakan untuk Suatu Permintaan

Untuk situasi yang kedua adalah situasi penolakan terhadap permintaan untuk menjadi interpreter dalam suatu kuliah umum. Dalam penjelasan situasi dijelaskan bahwa lawan bicara diminta untuk menolak permintaan tersebut dengan alasan belum pernah menjadi interpreter dan tidak mengerti istilah teknis perkuliahan tersebut.

Setelah menganalisa jawaban angket, ungkapan yang sering digunakan sebagai jawaban dapat dikelompokkan menjadi 3 bentuk ungkapan. Pertama adalah alasan belum pernah menjadi interpreter “*keiken mo naishi/saya tidak punya pengalaman*”, “*tsuyaku mo shita koto naishi/saya tidak pernah menjadi penerjemah*” dan tidak mengerti istilah teknis dalam perkuliahan tersebut “*senmonyogo mo shiranai node/saya tidak paham istilah-istilah teknis*”, “*goi mo sukunai node.../saya hanya tahu sedikit kosakata*”, “*senmon chishiki mo toboshii/kemampuan dan pengetahuan teknis saya sedikit*” dan ungkapan lainnya yang mengungkapkan ketidak mengertian dalam istilah-istilah teknis. Kedua adalah ungkapan mengenai ketidak mampuan diri sendiri untuk menjadi interpreter seperti “*jishin ga arimasen/saya tidak percaya diri*”, sedangkan yang ketiga adalah alasan lainnya seperti “*kichinto eigo o shiranai node.../saya tidak mengerti bahasa Inggris*” atau “*eigo wa tokui jyanai yo/saya ga pintar bahasa Inggris lho*”, “*yaku tatsu nai wa ne/mungkin saya ga akan berguna*”.

Mengenai hasil jawaban angket situasi kedua pun akan dibagi ke dalam dua tabel dikarenakan penutur asli Jepang cenderung membuat alasan yang berbeda untuk “*me ue no hito/orang yang lebih tua atau posisi senior*” dan “*shitashikunai hito/ orang yang tidak terlalu akrab*” dalam hal ini senior dan tidak akrab. Selain itu terdapat

alasan yang digunakan untuk “*tomodachi/teman & kohai/junior*” dalam hal ini teman dan junior yang akrab. Hasilnya dapat dilihat dari tabel 3 dan 4.

Tabel 3: Bentuk penyampaian alasan (*sempai/senior*).

Bentuk penyampaian	Perbandingan
Belum pernah menjadi interpreter dan tidak mengerti istilah khusus	56%
Alasan ketidakmampuan diri sendiri	7%
Keduanya	31%
Lainnya	6%

Tabel 4: Bentuk penyampaian alasan (*tomodachi/teman & kohai/junior*).

Bentuk penyampaian	Perbandingan
Belum pernah menjadi interpreter dan tidak mengerti istilah khusus	63%
Keduanya	6%
Alasan ketidakmampuan diri sendiri	19%
lainnya	13%

Dari tabel 3 dan 4 dapat dilihat bahwa sebanyak 56% dan 63% responden menjawab bahwa ia belum pernah menjadi interpreter dan tidak mengerti istilah khusus, baik saat lawan bicara adalah senior maupun teman dan orang yang akrab. Dalam situasi ini, selain jenis alasan sudah disebutkan dalam angket, dapat dilihat pula bahwa alasan tersebut memang suatu hal yang sering digunakan pada saat penyampaian alasan penolakan terhadap suatu permintaan. Hasil yang berbeda terlihat pada penggunaan alasan mengenai ketidak-mampuan diri sendiri, dimana penutur asli Jepang cenderung memberikan alasan yang cukup banyak terhadap lawan bicara yang tidak akrab atau orang yang tingkatannya di atas sebagai salah satu bentuk kesopanan. Sama halnya dalam bahasa Indonesia, untuk menunjukkan kesopanan dalam bahasa Jepang pun selain menggunakan ungkapan ambigu, penolakan menggunakan ungkapan yang panjang disertai alasan untuk membuat lawan bicara mengerti tanpa menyakiti perasaan lawan bicara sehingga dirasakan lebih sopan.

Selain penggunaan jenis alasan di atas, peneliti menambahkan analisa tambahan untuk semantik formula dalam ungkapan penolakan yaitu adanya ungkapan empati seperti “*zannen desuga/sayang sekali*”, “*yaku ni tatenakute/maaf saya tidak bisa membantu*”, atau “*enryou sasete itadakimasu/sepertinya saya tidak bisa*” dan rencana alternatif seperti “*hokano kata ni onegaishite itadakenai deshouka/bagaimana kalau minta tolong kepada yang lain?*” atau “*hoka no hito ni kite miyo/bagaimana kalau kita tanya pada orang lain?*” yang ditambahkan oleh pembicara sebagai bentuk perasaan menyesal karena tidak bisa membantu dan sebagai ungkapan kesopanan.

Penggunaan semantik formula untuk perasaan empati dan rencana alternatif ini dibedakan menjadi 2 lawan bicara yaitu “*me ue no hito/orang yang lebih tua atau senior*” dan “*shitashikunai hito/orang yang tidak terlalu akrab*” yaitu teman dan junior yang akrab. Penggunaan masing-masing semantic formula tersebut dapat dilihat pada tabel 5 dan 6.

Tabel 5 Semantik formula (*senpai/senior*).

Jenis	Perbandingan
Perasaan empati	25%
Rencana alternatif	44%
tidak ada keduanya	31%

Tabel 6: Semantik formula (*tomodachi/teman & kohai/junior*).

Jenis	Perbandingan
Perasaan empati	12%
Rencana alternatif	19%
tidak ada keduanya	69%

Dari tabel 5 dan 6, dapat disimpulkan bahwa penutur asli Jepang cenderung mengungkapkan empati dan rencana alternatif kepada lawan bicara sebanyak 25% dan 44% jika lawan bicaranya adalah senior dan orang yang tidak terlalu akrab. Hal ini kemungkinan disebabkan karena pembicara menggunakan perasaan empati dan memberikan alternatif rencana sebagai bentuk kesantunan terhadap lawan bicara. Sedangkan ketika lawan bicaranya adalah teman dan orang yang cukup akrab, penutur asli Jepang yang tidak menggunakan ungkapan pernyataan empati maupun memberikan rencana alternatif pilihan dalam ungkapan penolakan mencapai sebanyak 69%. Hal ini dimungkinkan karena

orang yang melakukan permohonan adalah orang yang akrab.

Selain itu, terdapat penggunaan semantic formula yang jumlahnya tidak terlalu signifikan namun menarik yaitu pemberian alternatif oleh pembicara. Pada umumnya, strategi ini digunakan pembicara untuk membantu memberikan solusi karena ketidakmampuan pembicara untuk memenuhi permohonan lawan bicara.

## DATA PEMBELAJAR BAHASA JEPANG PENUTUR INDONESIA

### Alasan Penolakan untuk Suatu Ajakan

Dalam kategori pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia, peneliti juga mengklasifikasikan pengungkapan alasan menjadi dua, yaitu alasan karena ketidaksukaan dan alasan karena ada suatu keperluan. Angket yang diberikan beserta ketentuan menjawabnya adalah sama. Data dari hasil angket dapat dilihat seperti pada tabel 7 dan 8.

Tabel 7 Bentuk penyampaian alasan (*senpai/senior*).

Bentuk penyampaian	Perbandingan
Alasan tidak suka	65%
Alasan ada keperluan	35%
lainnya	0%

Tabel 8: Bentuk penyampaian alasan (*tomodachi/ teman & kohai/junior*).

Bentuk penyampaian	Perbandingan
Alasan tidak suka	60%
Alasan ada keperluan	30%
lainnya	10%

Dari tabel 7 dan 8, dapat dilihat bahwa alasan yang digunakan oleh pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia menunjukkan kecenderungan yang sama baik kepada lawan bicara senior dan orang yang tidak akrab, maupun kepada junior dan orang yang akrab. Dimana kepada lawan bicara senior dan orang yang tidak akrab menyatakan alasan tidak suka sebanyak 65%, dan kepada junior dan orang yang akrab sebanyak 60%. Hal ini disebabkan karena ada dua kemungkinan yang muncul yaitu pengaruh dari ketentuan yang dijelaskan dalam angket yakni

keterangan bahwa penolakan tersebut berdasarkan pada ketidaksukaan akan pesta. Selain itu para responden cenderung tidak membedakan lawan bicara antara orang yang tingkatannya lebih tinggi (senior atau orang yang tidak akrab) dengan teman atau junior (orang yang akrab) dalam hal penyampaian alasan. Sehingga hal ini tercermin dari hasil angket dimana jumlah penggunaan untuk kedua alasan hampir sama, seperti terlihat pada tabel 7 dan 8.

Selain itu, tingkat kesopanan yang ditunjukkan dalam penolakan kepada seseorang yang kedudukannya lebih tinggi dengan orang yang cukup akrab tidak terlihat. Kecenderungan ini dapat dilihat dari semantik formula yang digunakan, ungkapan penolakan cenderung langsung dan tidak membedakan lawan bicara. Hal ini diperkirakan dikarenakan oleh keterbatasan kemampuan bahasa Jepang pembelajar, juga kekurangpahaman pembelajar mengenai ungkapan yang menunjukkan tingkat kesopanan, selain *keigo*/ragam hormat ataupun *sonkeigo*/ragam sopan.

Dari data pada tabel 7 dan 8 juga dapat dilihat bahwa alasan yang diberikan pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia cenderung mengungkapkan alasan mengenai ketidaksukaannya akan pesta, yang kemungkinan besar dipengaruhi oleh pengaturan situasi poin 1 dalam angket.

### Alasan Penolakan untuk Suatu Permintaan

Situasi kedua dalam instrumen adalah mengenai penolakan terhadap suatu permintaan untuk menjadi penerjemah dalam suatu kuliah umum. Dalam penjelasan situasi disebutkan bahwa lawan bicara diminta untuk menolak permintaan tersebut, dengan contoh alasan yang muncul antara lain belum pernah menjadi penerjemah dan tidak mengerti istilah teknis yang mungkin muncul.

Setelah dilakukan analisa terhadap jawaban-jawaban angket tersebut, data responden yang telah dikelompokkan dapat dilihat seperti pada tabel 9 dan 10.

Tabel 9: Bentuk penyampaian alasan (*senpai/senior*).

Bentuk penyampaian	Perbandingan
Belum pernah menjadi interpreter dan tidak mengerti istilah khusus	65%
Alasan ketidak mampuan diri sendiri	15%
Keduanya	15%
lainnya	5%

Tabel 10: Bentuk penyampaian alasan (*tomodachi/teman & kohai/junior*).

Bentuk penyampaian	Perbandingan
Belum pernah menjadi interpreter dan tidak mengerti istilah khusus	65%
Keduanya	5%
Alasan ketidak mampuan diri sendiri	20%
lainnya	10%

Dari tabel 9 dan 10, dapat diketahui bahwa pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia cenderung tidak terlalu membedakan lawan bicara apakah senior atau orang yang tidak akrab atautkah teman, junior atau orang yang akrab, hal ini dapat dilihat dari prosentase yang diperoleh sebanyak masing-masing 65%. Begitu juga halnya dengan penyebaran prosentase untuk alasan lainnya yang tidak terlalu signifikan perbedaannya. Selain itu banyaknya pembelajar yang memilih penyampaian alasan dengan menyatakan belum pernah menjadi interpreter dan tidak mengerti istilah khusus ini cenderung diakibatkan pengaruh dari pengaturan situasi kedua dalam DCT.

Pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia mempunyai perbedaan semantic formula yang ditambahkan pada ungkapan penolakan. Tidak seperti halnya penutur asli bahasa Jepang yang menggunakan ungkapan-ungkapan lain di luar penolakan seperti ungkapan pernyataan empati, atau pemberian rencana alternatif seperti "*hokano kata ni onegaishite itadakenai deshouka*/bagaimana kalau minta tolong kepada yang lain?" atau "*hoka no hito ni kiite miyo*/bagaimana kalau kita tanya ke orang lain?" yang ditambahkan oleh si pembicara sebagai bentuk perasaan menyesal tidak bisa membantu dan ungkapan kesopanan. Pembelajar bahasa Jepang tidak menggunakan ungkapan-ungkapan tersebut, yang asumsinya dikarenakan keterbatasan pengetahuan pembelajar mengenai

konteks sosial budaya yang melekat pada bahasa Jepang. Pengetahuan pembelajar mengenai konteks-konteks pragmatik dan sociolinguistik yang kurang memadai mengakibatkan variasi alasan yang digunakan oleh pembelajar dalam penolakan jauh lebih sedikit dibanding penutur asli bahasa Jepang.

Dari tabel 9 dan 10 di atas, dapat disimpulkan bahwa seperti halnya situasi 1 pada angket mengenai alasan penolakan suatu ajakan, pembelajar Bahasa Jepang orang Indonesia cenderung melakukan penolakan dengan menyampaikan alasan yang sama kepada lawan bicara. Tidak memandang bahwa lawan bicara tersebut adalah senior, teman, ataupun junior. Hal ini berbeda dengan hasil dari angket untuk penutur asli orang Jepang.

Tabel 11 dan tabel 12 berikut merupakan bentuk semantic formula ungkapan penolakan yang digunakan oleh pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia. Analisa semantik formula untuk pernyataan empati dan rencana alternatif ini dibedakan menjadi 2 yaitu "*me ue no hito*/orang yang lebih tua atau posisi senior" dan "*shitashikunai hito*/orang yang tidak terlalu akrab" dengan teman dan junior yang akrab.

Tabel 11: Semantik formula (*senpai/senior*).

Jenis	Perbandingan
Perasaan empati	0%
Rencana alternatif	15%
tidak ada keduanya	85%

Tabel 12: Semantik formula (*tomodachi/teman & kohai/junior*).

Jenis	Perbandingan
Perasaan empati	0%
Rencana alternatif	20%
tidak ada keduanya	80%

Dari tabel 11 dan 12 mengenai penggunaan ungkapan pernyataan empati dan rencana alternatif yang diberikan pada lawan bicara ketika mengemukakan suatu penolakan, diketahui bahwa pembelajar bahasa Jepang yang tidak menggunakan dua jenis semantik formula secara bersamaan adalah sebanyak 85% dan 80%. Hal ini sangatlah berbeda jika dibandingkan dengan prosentase data responden penutur Jepang yang cenderung menambahkan ungkapan perasaan empati ataupun memberikan solusi saat melakukan penolakan.

Dari data-data dan analisis di atas, dapat disimpulkan bahwa penutur Indonesia ketika melakukan penolakan cenderung tidak terlalu mempertimbangkan perasaan lawan bicara. Hal ini dapat dilihat dari tidak adanya pembelajar bahasa Jepang yang memberikan perasaan empati seperti ungkapan “*zannen desuga/sayang* sekali, saya...” sebelum melakukan penolakan.

## DISKUSI

Dari hasil analisa data responden di atas dapat dilihat bahwa saat menolak, penutur asli Jepang cenderung memberikan alasan yang berbeda antara kepada senior dan orang yang kurang akrab dengan teman atau junior yang sudah akrab. Selain itu alasan “*yoji ga arimasu/saya* ada keperluan” sering digunakan kepada lawan bicara yang kurang akrab sebagai salah satu “*iwwake/alasan*” supaya tidak menyakiti hati lawan bicara. Penutur asli Jepang juga cenderung lebih berterus terang mengemukakan ketidaksukaannya pada pesta apabila lawan bicara adalah seseorang yang akrab atau juniornya.

Disisi lain, pembelajar bahasa Jepang cenderung menggunakan alasan ketidaksukaan akan pesta dibandingkan dengan penggunaan alasan ada keperluan. Selain itu, responden cenderung tidak melihat kedudukan lawan bicara dan memberikan alasan yang sama, baik kepada senior ataupun teman/junior yang sudah akrab, dengan kata lain tidak memberikan perbedaan perlakuan.

Dalam situasi kedua pada angket, penutur Jepang cenderung memberikan alasan yang cukup panjang untuk lawan bicara yang tidak terlalu akrab. Selain itu beberapa penutur Jepang cenderung lebih terbuka memberikan alasan mengenai ketidakmampuannya terhadap lawan bicara yang sudah akrab seperti teman ataupun junior. Sedangkan pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia cenderung menggunakan alasan belum pernah melakukan interpreter dan tidak mengerti istilah khusus.

Selain itu, jika membandingkan data penutur asli Jepang dengan pembelajar bahasa Jepang, dapat dilihat bahwa dalam melakukan penolakan penutur asli Jepang cenderung menolak tanpa menyakiti perasaan lawan bicara dengan cara menambahkan ungkapan pernyataan empati ataupun memberikan bantuan solusi. Sedangkan pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia

cenderung memberikan alasan penolakan secara lugas tanpa terlalu mempertimbangkan perasaan lawan bicara. Perbedaan penggunaan alasan yang muncul dalam situasi penolakan oleh penutur Jepang dan pembelajar bahasa Jepang penutur Indonesia diasumsikan salah satunya disebabkan oleh perbedaan sosial budaya bahasa yang melatar-belakangi kesantunan berkomunikasi.

## REFERENSI

- Beebe, L. M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. (1990) 'Pragmatic transfer in ESL refusals.' "On the development of communicative competence in a second language" Newbury House.
- Ikeda, Y. (2009). Chuukyuu no koutou happyou hyougen wo nobasu shidou wo kangaeru-Gakushuusha no kotowari hyougen ni okeru 'riyuu' wo megutte-. *Nihongo to Nihongo kyouiku*, 37, 155-175. Keiou gijuku daigaku: Nihongo/nihon bunka kyouiku senta.
- Ito, E. (2005). The comparison of refusals to invitations in Malay cultural Sphere: on the order of utterance of the Javanese, the Indonesian, and the Malaysian Languages. *Forum of International development studies* 29, 15-27.
- Jungheim, N. O. (2006). Learner and native speaker perspectives on a culturally-specific Japanese refusal gesture. *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 44(2), 125-143.
- Marui, I., Noro, K., Nishijima, Y., Reinelt, R. & Yamashita, H. (1996). Concept of Communicative Virtues (CCV) in Japanese and German. In: Hallinger, M. / Ammon, U. (eds): *Contrastive Sociolinguistics* (pp. 285-409). New York: Mouton de Gruyter.
- Nishijima, Y., (2007). For a constrastive Study of Routine for Controlling Communicative Behaviors in German and Japanese: A Pilot Investigation. In *Socio-Cultural Transformation in the 21<sup>st</sup> Century? Risks and Challenges of Social Changes*" (pp 347-357). Kanazawa/ Japan: Kanazawa electric.
- Nishijima, Y., (2010). Perspectives in Routine Formulas: A contrastive Analysis of Japanese and German. In Gendrin, D. (eds). *Intercultural Communication Studies*, 19(2), 55-63.
- 西村史子. (2005). 勧誘談話における断りの日英対照分析—一言い訳に注目して—. *社会言語科学会 16 回大会発表論文集*, 16-19.
- 西村史子. (2007). 断りに用いられる言い訳の日英対照分析. *世界の日本語教育. 日本語教育論集*, 17, 93-112.
- 藤森弘子. (1995). 日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—*日本語教育*, 87, 79-90.

- 森山卓郎.(1990).断りの方略:対人関係調整とコミュニケーション. *言語*, 19(8), 59-66.
- 横山杉子. (1993). 日本語における「日本人の日本人に対する断り」と「日本人のアメリカ人に対する断り」の比較—社会言語学のレベルでのフォリナー トークー. *日本語教育*, 81, 141-151.



# JAPANEDU: Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang

<http://ejournal.upi.edu/index.php/japanedu/index>



## The Use of *Katakana* in City Names in Java Island on Japanese Google Map

Asteria Permata Martawijaya, Rd. Januar Radhiya  
Program Studi Bahasa Jepang, STBA YAPARI-ABA Bandung, Bandung, Indonesia  
[asteria@stba.ac.id](mailto:asteria@stba.ac.id), [rjradhiya@stba.ac.id](mailto:rjradhiya@stba.ac.id)

### ABSTRACT

Japanese has different characteristics from other foreign languages including having kana letters, kanji and *romaji*. The kana letters include *hiragana* and *katakana*. The *katakana* letters are used to write loan word from foreign languages into Japanese. The names from outside Japan are also written using *katakana*. This study discusses about the writing of names of cities in Java island into Japanese *katakana* which contained in Japanese version of Google Maps. The aims of this study are to know how [google.map.jp](http://google.map.jp) write the names of cities in Java island using Japanese *katakana* and what pattern did they use to write those city's names. The analysis conducted by using descriptive method. The results of this study revealed that in Japanese version of Google Map, there are 62 city names written in *katakana*, while the rest are written in *romaji*. There are eight patterns found in writing the name of the cities using *katakana*. Those are including writing *katakana* based on *Hepburn* style using the KVKV pattern, adding vowels to each closed syllable sound, writing "r" for the sound of "l", and syllable "ci" written as "chi (チ)" or "shi (シ)".

### KEYWORDS

City Names; Java; *Gairaigo*; *Katakana*

### ARTICLE INFO

*First received: 07 May 2019*

*Final proof accepted: 27 June 2019*

*Available online: 28 June 2019*

## PENDAHULUAN

*Katakana* adalah salah satu dari tiga jenis huruf yang digunakan di Jepang. Huruf *katakana* digunakan untuk menulis kata serapan dari bahasa asing (selain Bahasa Cina), dalam telegram, kata-kata seperti nama tempat dan nama orang asing, nama-nama binatang dan tumbuhan, atau ketika ingin menegaskan suatu

kata dalam kalimat (Sutedi, 2011:7; Ishida dalam Dahidi & Sudjianto, 2009:83).

Nama dari bahasa asing dituliskan dengan menggunakan *katakana* dengan mengubahnya terlebih dahulu ke dalam pelafalan bahasa Jepang. Hal ini menyebabkan adanya perubahan pelafalan nama dari bahasa asing jika dituliskan dalam bahasa Jepang dengan menggunakan *katakana* (Kawarazaki, 1998).

Hasil penelitian Septiyanti, dkk (2016) menunjukkan bahwa penggunaan penulisan

kosakata bahasa Indonesia ke dalam *katakana* bahasa Jepang yang memiliki bunyi [n] berekor /ng/[ŋ] dan yang memiliki bunyi huruf h bertangkai atas /h/ [h] dipengaruhi oleh bunyi dalam Bahasa Indonesia yang kemudian akan disesuaikan dengan bunyi yang terdapat dalam bahasa Jepang sendiri. Dalam penelitiannya data diambil dari website yang menawarkan tentang wisata.

Wijaya (2015) dalam penelitiannya mengenai penggunaan huruf *katakana* dalam komik doraemon menyatakan bahwa terdapat *katakana* dengan bunyi rangkap, bunyi panjang dan konsonan c, b, g, k, l, m, p, dan s. Penggunaan huruf *katakana* ini sebagai fungsi onomatope, menegaskan makna dan serapan dalam Bahasa asing.

Mengenai analisis kesalahan penggunaan penulisan *katakana* pada pembelajaran Bahasa Jepang, Pratiwi (2014) menemukan bahwa kesalahan penulisan *katakana* pada *gairaigo* ini terjadi karena pengaruh bahasa Ibu dan kebiasaan serta pendapat populer. Kesalahan yang paling banyak ditemukan adalah pada bunyi panjang dan konsonan rangkap (Pratiwi, 2014).

Berdasarkan hasil penelitian di atas, fokus penelitian ini adalah untuk mencari tahu bagaimana pola penulisan nama-nama kota di pulau Jawa menggunakan *katakana* pada *Google map* versi Bahasa Jepang. Apakah perubahan ini disesuaikan dengan pelafalan orang Jepang saat menyebutkan nama dalam bahasa asing tersebut, atau disesuaikan dari huruf latin yang tertulis pada Bahasa Indonesia aslinya. Sehingga penelitian ini pada akhirnya bertujuan untuk mengidentifikasi standar penulisan nama asing dengan menggunakan *katakana* yang baik dan benar.

Manfaat dari penelitian ini adalah mengetahui pola penulisan nama-nama kota di pulau Jawa menggunakan *katakana*, dan dapat dijadikan panduan ketika akan menuliskan nama tempat dalam Bahasa Indonesia ke Bahasa Jepang dalam *katakana*.

## METODE PENELITIAN

Penelitian ini menggunakan metode deskriptif yaitu penelitian yang dilakukan untuk menggambarkan, menjabarkan suatu fenomena yang terjadi saat ini dengan menggunakan prosedur ilmiah untuk menjawab masalah secara

aktual (Sutedi, 2009). Istilah deskriptif itu menyarankan bahwa penelitian yang dilakukan hanya semata-mata hanya dilakukan berdasarkan fakta yang ada atau fenomena yang memang secara empiris hidup pada penutur-penuturnya, sehingga yang dihasilkan atau yang dicatat berupa perian bahasa yang biasa dikatakan sifatnya seperti potret yaitu paparan seperti apa adanya. Bahwa perian yang deskriptif itu tidak mempertimbangkan benar salahnya penggunaan bahasa oleh penutur-penuturnya (Sudaryanto, 1992).

## Teknik Pengumpulan Data

Instrumen yang digunakan untuk mengambil data berupa data penulisan nama kota dan kabupaten di pulau Jawa dari aplikasi *Google Map* versi Jepang. Aplikasi *Google Map* versi Jepang dijadikan acuan karena aplikasi ini digunakan secara umum oleh khalayak ramai sehingga dapat dianggap sebagai data yang berterima.

## Teknik Analisis Data

Data yang terkumpul diolah secara kualitatif dan dikaji dengan mempergunakan teknik kajian yang relevan. Pengolahan data dalam penelitian ini dilakukan melalui tiga kegiatan analisis yakni sebagai berikut.

### a. Seleksi Data

Dalam tahap ini peneliti melakukan seleksi data dan menggolongkan data. Data-data berupa contoh penulisan nama tempat di pulau Jawa dan Madura pada laman *Google Map* versi Jepang yang telah dikumpulkan kemudian dikelompokkan berdasarkan wilayah administrasi provinsi di Pulau Jawa. Jumlah provinsi di Pulau Jawa ada 6 provinsi yaitu, Banten, DKI Jakarta, Jawa Barat, Jawa Tengah, DI Yogyakarta, dan Jawa Timur.

### b. Penyajian Data

Pada penelitian ini, data yang telah direduksi disajikan dalam bentuk tabel untuk mempermudah proses analisis.

### c. Penarikan Kesimpulan

Penarikan kesimpulan dilakukan dengan memperhatikan data yang ada dengan analisis yang disesuaikan dengan rumusan masalah yang akan dijawab, hingga akhirnya diperoleh kesimpulan yang komprehensif.

## HASIL DAN PEMBAHASAN

Beberapa bunyi dari bahasa asing tidak dapat dinyatakan dengan tepat sekali dalam kata-kata bahasa Jepang, karena dalam bahasa Jepang tidak terdapat huruf untuk bunyi-bunyi tertentu. Oleh karena itu, kata-kata asing kemudian “di-Jepangkan” terlebih dahulu atau diubah menurut sistem lafal bahasa Jepang yang dapat ditulis dengan huruf Jepang. Kawazaki (1998) memaparkan aturan penulisan kata-kata dari bahasa asing dengan menggunakan *katakana*, sebagai berikut:

### Kata-kata susunan CVCV

<i>ma</i>	<i>ni</i>	<i>a</i>		<i>ka</i>	<i>me</i>	<i>ra</i>		<i>co</i>	<i>i</i>	<i>n</i>
マ	ニ	ア		カ	メ	ラ		コ	イ	ン

### Kata-kata susunan -cc-

Kata-kata konsonan yang mengandung dua atau lebih konsonan secara berturut-turut seperti (-cc-) diucapkan dan ditulis dengan menambahkan sesuatu vokal di belakang konsonan masing-masing.

### Bunyi Panjang

Bunyi panjang dinyatakan dengan tanda ‘ — ’ tanda garis ini berarti suku kata sebelumnya diucapkan secara panjang.

<i>Seesaw</i>	シ	—	ソ	—
<i>Queen</i>	ク	イ	—	ン

### Bunyi konsonan rangkap

Bunyi konsonan rangkap dinyatakan dengan memakai aksara “ツ (tsu)” kecil.

### Alih aksara Hepburn

Beberapa cara alih aksara dari Bahasa Jepang yang paling dikenal adalah *Hepburn*, *Kunrei*, dan *Nihon shiki*, sedangkan untuk keperluan di luar negeri Jepang biasanya alih aksara menggunakan *Hepburn* (*hebon-shiki romaji*). *Hepburn* membuat transliterasi bunyi huruf Bahasa Jepang kedalam tulisan latin. *Hebon-shiki* ditulis berdasarkan pada fonologi Bahasa Inggris. Alih aksara *Hepburn* sudah mengalami beberapa kali revisi. Yang sekarang digunakan adalah berdasarkan pada *Shūsei Hebon-shiki Rōmaji* (修正ヘボン式ローマ字). Penggunaan *hebon-shiki* ini paling banyak

digunakan karena penutur bahasa Inggris lebih cenderung bisa mengucapkan kata-kata dalam bahasa Jepang secara lebih akurat. Banyak juga digunakan dalam buku pelajaran bahasa Jepang untuk orang asing.

Ciri khas dari alih aksara *Hepburn* adalah ejaan yang didasarkan pada fonologi bahasa Inggris yang membuat penutur Inggris lebih mudah mengucapkannya.

## Penulisan Nama Kota Menggunakan Katakana pada Laman Google Map Versi Jepang

Data dalam penelitian ini berupa contoh penulisan nama tempat di pulau Jawa dan Madura pada laman *Google Map* versi Jepang yang telah dikumpulkan kemudian dikelompokkan berdasarkan wilayah administrasi provinsi di Pulau Jawa. Jumlah provinsi di Pulau Jawa ada enam provinsi yaitu, Banten, DKI Jakarta, Jawa Barat, Jawa Tengah, DI Yogyakarta, dan Jawa Timur. Pada laman *Google Map* versi Jepang tidak semua nama kota dan kabupaten dituliskan menggunakan *katakana*. Nama kota dan kabupaten yang ditulis dengan *katakana* adalah sebagai berikut.

### Banten

Provinsi Banten terdiri dari empat kabupaten dan empat kotamadya. Dalam laman *Google Map* versi Jepang, dari delapan nama kota/kabupaten tersebut hanya enam nama kota/kabupaten yang dituliskan menggunakan *katakana*. Dua kabupaten yaitu kabupaten Serang dan kabupaten Tangerang tidak ditulis dengan menggunakan *katakana*. Nama kota/kabupaten yang dituliskan menggunakan *katakana* di provinsi Banten dapat dilihat pada tabel 1.

Tabel 1: Penulisan Nama Kota di Provinsi Banten

No	Nama Kota	Nama Kota dengan Katakana	Romaji
1	Rangkasbitung	ランカスピトゥン	<i>Rankasubitun</i>
2	Pandeglang	パンデグラ	<i>Pandeguran</i>
3	Cilegon	シレゴン	<i>Shiregon</i>
4	Serang	セラ	<i>Seran</i>
5	Tangerang	タンゲ	<i>Tangeran</i>
6	Tangerang Selatan	南タンゲ	<i>Minami tangeran</i>

## DKI Jakarta

Daerah Khusus Ibu kota Jakarta terdiri dari lima kota administrasi. Pada laman *Google Map* versi Jepang hanya satu buah nama yang dituliskan dengan menggunakan *katakana* yaitu nama ibu kota provinsinya. Jakarta ditulis menggunakan *katakana* menjadi ジャカルタ (*Jakaruta*).

## Jawa Barat

Provinsi Jawa Barat terdiri dari 15 Kota dan Kabupaten. Pada laman *Google Map* versi Jepang ada 14 nama kota/kabupaten di Jawa Barat yang dituliskan menggunakan *katakana*, sisanya ditulis menggunakan *romaji*. Ke-14 nama kota/kabupaten tersebut adalah seperti terlihat pada tabel 2.

Tabel 2: Nama Kota di Jawa Barat

No	Nama Kota	Nama Kota dengan Katakana	Romaji
1	Bogor	ボゴール	<i>Bogôru</i>
2	Ciamis	チアミス	<i>Chiamisu</i>
3	Cianjur	シアンジャー	<i>Shianjā</i>
4	Garut	ガルト	<i>Garuto</i>
5	Indramayu	インドラマユ	<i>Indoramayu</i>
6	Karawang	カラワン	<i>Karawan</i>
7	Kuningan	クニンガン	<i>Kuningan</i>
8	Purwakarta	ブルワカルタ	<i>Puruwakaruta</i>
9	Sumedang	サマダン	<i>Samadan</i>
10	Bandung	バンドン	<i>Bandon</i>
11	Bekasi	ブカシ	<i>Bukashi</i>
12	Cirebon	チルボン	<i>Chirubon</i>
13	Depok	デポック	<i>Deppoku</i>
14	Sukabumi	スカブミ	<i>Sukabumi</i>

## Jawa Tengah

Provinsi Jawa Tengah terdiri dari 35 kota dan kabupaten. Pada laman *Google Map* versi Jepang ada 17 nama kota/kabupaten di Jawa Tengah yang dituliskan menggunakan *katakana*, sisanya ditulis menggunakan huruf latin/*romaji*. Nama-nama kota/kabupaten yang telah dituliskan dengan menggunakan *katakana* adalah seperti terlihat pada tabel 3.

Tabel 3: Nama Kota di Jawa Tengah

No	Nama Kota	Nama kota dengan Katakana	Romaji
1	Purwokerto	フルウオケルト	<i>Puruwokeruto</i>
2	Blora	ブローラ	<i>Burôra</i>
3	Brebes	ブレベス	<i>Burebesu</i>
4	Cilacap	チラチャブ	<i>Chirachapu</i>
5	Purwodadi	ブルウオダディ	<i>Puruwodadi</i>
6	Kebumen	ケブメン	<i>Kebumen</i>
7	Klaten	クレートン	<i>Kurēton</i>
8	Kudus	クドゥス	<i>Kudusu</i>
9	Pemalang	ペマラン	<i>Pemaran</i>
10	Rembang	レンバン	<i>Renban</i>
11	Sragen	スラゲン	<i>Suragen</i>
12	Tegal	テガル	<i>Tegaru</i>
13	Wonogiri	ウォノギリ	<i>Wonogiri</i>
14	Wonosobo	ウォノソボ	<i>Wonosobo</i>
16	Magelang	マゲラン	<i>Mageran</i>
17	Pekalongan	ペカロンガン	<i>Pekarongan</i>

## DI Yogyakarta

Daerah Istimewa Jakarta terdiri dari lima kota/kabupaten. Pada laman *Google Map* versi Jepang hanya satu buah nama yang dituliskan dengan menggunakan *katakana* yaitu nama ibu kota provinsinya. Yogyakarta ditulis menggunakan *katakana* menjadi ジョグジャカルタ (*Jogujakaruta*). Sama seperti di DKI Jakarta, kota/kabupaten lainnya di sekitar Yogyakarta ditulis menggunakan huruf latin/*romaji*.

## Jawa Timur

Provinsi Jawa Timur terdiri dari 38 kota dan kabupaten. Pada laman *Google Map* versi Jepang ada 23 nama kota/kabupaten di Jawa Timur yang dituliskan dengan menggunakan *katakana*, sisanya ditulis menggunakan huruf latin/*romaji*. Nama-nama kota/kabupaten yang telah dituliskan dengan menggunakan *katakana* seperti terlihat pada tabel 4.

Tabel 4: Nama Kota di Jawa Timur

No	Nama Kota	Nama kota dengan Katakana	Romaji
1	Bangkalan	バンカラン	<i>Bankaran</i>
2	Banyuwangi	バニユワンギ	<i>Banyuwangi</i>
3	Bojonegoro	ボジョネゴロ	<i>Bojonegoro</i>
4	Bondowoso	ボンドウオソ	<i>Bondowoso</i>
5	Jember	ジェンベル	<i>Jenberu</i>
6	Lamongan	ラモンガン	<i>Ramongan</i>
7	Nganjuk	ヌガンジユク	<i>Nuganjuku</i>
8	Ngawi	ガウイ	<i>Gawi</i>
9	Pacitan	パチタン	<i>Pachitan</i>
10	Pamekasan	パメカサン	<i>Pamekasan</i>
11	Bangil	バンギル	<i>Bangiru</i>
12	Ponorogo	ポノロゴ	<i>Ponorogo</i>
13	Sumenep	スメネブ	<i>Sumenep</i>
14	Tuban	トゥバン	<i>Tuban</i>
16	Tulungagung	トゥルンガグン	<i>Turungagun</i>
17	Blitar	ブリタル	<i>Buritaru</i>
18	Kediri	クディリ	<i>Kudiri</i>
19	Madiun	マディウン	<i>Madiun</i>
20	Malang	マラン	<i>Maran</i>
21	Mojokerto	モジョケルト	<i>Mojokeruto</i>
22	Pasuruan	パスルアン	<i>Pasuruan</i>
23	Probolinggo	プロボリンゴ	<i>Puroboringo</i>

Seperti terlihat pada tabel 4, dari data diperoleh cara penulisan 62 nama kota/kabupaten yang ditulis menggunakan *katakana*. Sedangkan untuk kota/kabupaten lainnya belum ditulis dengan menggunakan *katakana*. Tabel 5 berikut menunjukkan jumlah nama tempat yang telah ditulis menggunakan *katakana* pada laman *Google Map* versi Jepang.

Tabel 5: Jumlah Nama Tempat yang Ditulis dalam Katakana pada *Google Map*

No	Provinsi	Jumlah kota/kabupaten	Jumlah kota/kabupaten yang ditulis dalam <i>katakana</i>
1.	Banten	8	6
2.	DKI Jakarta	5	1
3.	Jawa Barat	15	14
4.	Jawa Tengah	35	17
5.	DI Yogyakarta	5	1
6.	Jawa Timur	38	23
	Total	106	62

## Pola Penulisan Nama Kota Menggunakan Katakana

Dari data yang telah diperoleh terdapat pola penulisan nama kota/kabupaten di Indonesia. Data yang telah dikumpulkan dikategorisasikan berdasarkan pola susunan kata dalam bahasa Indonesia, dijelaskan sebagai berikut.

### Nama Kota/kabupaten dengan Akhiran Berpola KVK

Dari data diperoleh contoh penulisan nama kota/kabupaten yang memiliki pola susunan kata Konsonan-Vokal-Konsonan-Vokal. Nama-nama kota tersebut seperti terlihat pada tabel 6.

Tabel 6: Nama Kota dengan Pola Susunan Kata KVKV

Nama kota	Katakana	Romaji	Pola
Bekasi	ブカシ	<i>Bu-ka-shi</i>	KVKVKV
Sukabumi	スカブミ	<i>Su-ka-bu-mi</i>	KVKVKVK V
Ponorogo	ポノロゴ	<i>Po-no-ro-go</i>	KVKVKVK V
Kediri	クディリ	<i>Ku-di-ri</i>	KVKVKV
Bojonegoro	ボジョネゴロ	<i>Bo-jo-ne-go-ro</i>	KVKVKVK VKV

Dari tabel 6 dapat kita lihat bahwa nama kota yang memiliki pola susunan kata KVKV saat ditulis menggunakan *katakana* pola susunan katanya tidak berubah tetap dengan pola KVKV. Akan tetapi pada nama kota yang memiliki fonem vokal “e” diawal kata seperti Bekasi dan Kediri, mengalami perubahan bunyi vokal saat dituliskan dengan *katakana*. Yaitu dari vokal “e” menjadi vokal “u”.

### Nama Kota/kabupaten dengan Akhiran Berpola KVK

Dari data diperoleh contoh penulisan nama kota/kabupaten yang memiliki pola susunan kata Konsonan-Vokal-Konsonan-Vokal. Hal ini dapat dilihat pada tabel 7.

Tabel 7: Nama Kota dengan Akhiran Berpola KVK

Nama kota	Katakana	Romaji	Pola
Banten	バンテン	<i>Banten</i>	KVK <u>KVK</u>
Cilegon	シレゴン	<i>Shiregon</i>	KVK <u>VKVK</u>
Kuningan	クニンガン	<i>Kuningan</i>	KVK <u>VKVK</u>
Cirebon	チルボン	<i>Chirubon</i>	KVK <u>VKVK</u>
Kebumen	ケブメン	<i>Kebumen</i>	KVK <u>VKVK</u>
Sragen	スラゲン	<i>Suragen</i>	KVK <u>VKVK</u>
Bangkalan	バンカラ	<i>Bankaran</i>	KVK <u>KVK</u>
Pacitan	パチタン	<i>Pachitan</i>	KVK <u>VKVK</u>
Pamekasan	パメカサン	<i>Pamekasan</i>	KVK <u>VKVK</u> VK
Tuban	トゥバン	<i>Tuban</i>	KVK <u>VK</u>
Klaten	クレートン	<i>Kurēton</i>	KVK <u>VK</u>
Bogor	ボゴール	<i>Bogōru</i>	KVK <u>VK</u>
Depok	デポック	<i>Deppoku</i>	KVK <u>VK</u>
Cianjur	シアンジャー	<i>Shianjā</i>	KVV <u>KVK</u>

Tabel 7 menunjukkan bahwa nama kota dengan akhiran berpola KVK yang fonem terakhirnya berupa konsonan “n” saat ditulis menggunakan *katakana* pola susunan katanya tidak berubah. Hal ini dikarenakan dalam bahasa Jepang juga terdapat konsonan “n”.

### Nama Kota dengan Akhiran KVK - Selain Konsonan “n”

Pada penulisan silabel tertutup pada Bahasa Indonesia seperti diakhiri huruf konsonan lain selain “n” maka dalam penulisan *katakana*nya huruf konsonan tersebut di berikan huruf vokal tambahan seperti terlihat pada tabel 8.

Tabel 8: Nama Kota dengan Silabel Tertutup

Nama kota	Katakana	Romaji	Pola
Bogor	ボゴール	<i>Bogōru</i>	r → ru
Ciamis	チアミス	<i>Chiamisu</i>	s → su
Garut	ガルト	<i>Garuto</i>	t → to
Depok	デポック	<i>Deppoku</i>	k → ku
Brebes	ブレバス	<i>Burebesu</i>	s → su
Cilacap	チラチャブ	<i>Chirachapu</i>	p → pu
Kudus	クドウス	<i>Kudusu</i>	s → su
Tegal	テガル	<i>Tegaru</i>	l → ru
Jember	ジェンベル	<i>Jenberu</i>	r → ru
Nganjuk	ヌガンジュク	<i>Nuganjuku</i>	k → ku
Bangil	バンギル	<i>Bangiru</i>	l → ru
Sumenep	スメネブ	<i>Sumenep</i>	p → pu
Blitar	ブリタル	<i>Buritaru</i>	r → ru
Cianjur	シアンジャー	<i>Shianjā</i>	r → bentuk panjang

Nama kota dengan akhiran berpola KVK yang fonem terakhirnya bukan konsonan “n”, seperti Bogor, Cianjur dan Depok, mengalami perubahan bunyi konsonan saat dituliskan dengan *katakana*. Yaitu dari konsonan “r” menjadi silabel “ru” dan dari konsonan “k” menjadi silabel “ku”. Hal ini disebabkan karena karakteristik huruf dalam Bahasa Jepang menggunakan silabel terbuka. Oleh karena itu, semua kata serapan dari bahasa asing yang mengandung silabel tertutup harus mengikuti aturan silabel bahasa Jepang, dengan cara menambahkan vokal pada akhir silabel tertutup. Silabel tertutup “t” dan “d” ditambah dengan “o”, sedangkan silabel tertutup “c, b, f, g, k, l, m, p, s” ditambah “u” (Kawarazaki, 1998).

### Nama Kota yang Mengandung Konsonan Rangkap

Dari data diperoleh pula nama-nama kota yang mengandung 2 konsonan yang berurutan (konsonan rangkap) di bagian tengah kata. Saat ditulis menggunakan *katakana*, nama kota-kota tersebut ditulis dengan menambahkan sebuah vokal di belakang masing-masing konsonan seperti terlihat dalam tabel 9.

Tabel 9: Nama Kota yang Mengandung Konsonan Rangkap

Nama kota	Katakana	Romaji	Pola
Rangka <u>s</u> bitung	ランカス ビットウン	<i>Rankasubitun</i>	Sbi → su-bi
Pandeg <u>l</u> ang	パンデグラン	<i>Pandeguran</i>	gla → gu-ra
Indr <u>a</u> mayu	インドラマユ	<i>Indoramayu</i>	dra → do-ra
Purwak <u>a</u> rta	プルワカルタ	<i>Puruwakaruta</i>	rwa → ru-wa
Purwok <u>e</u> rto	フルウォケルト	<i>Puruwokeruto</i>	rwo → ru-wo
B <u>r</u> ebes	ブレバス	<i>Burebesu</i>	bre → bu-re
Pur <u>w</u> odadi	ブルウォダディ	<i>Puruwodadi</i>	rwo → ru-wo
B <u>l</u> itar	ブリタル	<i>Buritaru</i>	bri → bu-ri
Mojok <u>e</u> rto	モジョケルト	<i>Mojokeruto</i>	rto → ru-to
Pro <u>b</u> olinggo	プロボリンゴ	<i>Puroboringo</i>	pro → pu-ro
Jak <u>a</u> rta	ジャカルタ	<i>Jakaruta</i>	rta → ru-ta

Dari tabel 9 dapat kita lihat bahwa konsonan “s, g, r, b, p” diakhiri dengan bunyi vokal “u”, sedangkan huruf “d”, diakhiri bunyi “o”. Hal ini disebabkan karena karakteristik huruf dalam Bahasa Jepang adalah menggunakan silabel terbuka. Oleh karena itu, semua kata serapan dari bahasa asing yang mengandung silabel tertutup harus mengikuti aturan silabel bahasa Jepang, dengan cara menambahkan vokal pada akhir silabel tertutup. Silabel tertutup “t” dan “d” ditambah dengan “o”, sedangkan silabel tertutup “c, b, f, g, k, l, m, p, s” ditambah “u” (Kawarazaki, 1998).

### **Nama Kota yang Mengandung Konsonan “l”**

Nama kota dengan menggunakan konsonan “l” yang terdapat pada *Google Map* versi Jepang antara lain seperti terlihat pada tabel 10.

Tabel 10: Nama kota yang mengandung konsonan “l”

Nama kota	<i>Katakana</i>	<i>Romaji</i>	Pola
Pandeglang	パンデグラ ン	<i>Pandeguran</i>	lang → rang
Cilegon	シレゴン	<i>Shiregon</i>	le → re
Blora	ブローラ	<i>Burôra</i>	lo → ro
Cilacap	チラチャブ	<i>Chirachapu</i>	la → ra
Klaten	クレートン	<i>Kurêton</i>	la → rê
Pemalang	ペマラン	<i>Pemaran</i>	lang → ran
Tegal	テガル	<i>Tegaru</i>	l → ru
Magelang	マゲラン	<i>Mageran</i>	lang → ran
Pekalongan	ペカロンガ ン	<i>Pekarongan</i>	lo → ro
Bangkalan	バンカラ ン	<i>Bankaran</i>	lan → ran
Lamongan	ラモンガ ン	<i>Ramongan</i>	la → ra
Bangil	バンギル	<i>Bangiru</i>	l → ru
Tulungagu ng	トゥルン ガ ン	<i>Turungagun</i>	lu → ru
Blitar	ブリタル	<i>Buritaru</i>	li → ri
Malang	マラン	<i>Maran</i>	lang → ran
Probolinggo	プロボリン ゴ	<i>Puroboringo</i>	ling → rin

Dari tabel 10 dapat kita lihat bahwa nama kota yang mengandung konsonan “l” saat ditulis menggunakan *katakana* berubah menjadi konsonan “r”. Pada umumnya vokal yang mengikuti konsonan “l” ini tidak mengalami perubahan, tetap seperti pada nama aslinya. Dan saat konsonan “l” berdiri sendiri, akan mendapatkan tambahan vokal “u” menjadi “ru”. Akan tetapi, dari data ditemukan adanya pengecualian yaitu pada nama kota “klaten”, dimana silabel “la” saat ditulis menggunakan *katakana* berubah menjadi “rê”. Hal ini disebabkan oleh kesalahan transkripsi akibat perbedaan bahasa ibu.

### **Nama Kota yang Mengandung Bunyi “ng”**

Dalam bahasa Indonesia ada konsonan rangkap dengan bunyi mendengung yaitu bunyi “ng”. Cukup banyak nama kota di Indonesia yang menggunakan bunyi seperti itu, misalnya Bandung, Tulungagung, Ngawi dan sebagainya.

Bunyi “ng” dapat digunakan di awal, tengah dan akhir nama kota/ kabupaten di Indonesia.

#### **a. Nama Kota dengan bunyi “ng” di awal kata**

Tabel 11: Nama Kota dengan Bunyi “ng” di awal kata

Nama kota	<i>Katakana</i>	<i>Romaji</i>	Pola
Nganjuk	ヌガンジュク	<i>Nuganjukku</i>	Ng → ヌガ
Ngawi	ガウイ	<i>Gawi</i>	Ng → ガ

Seperti terlihat pada tabel 11, kota Nganjuk saat dituliskan menggunakan *katakana* bunyi “ng” menjadi huruf “nu (ヌ)” dan huruf “ga (ガ)” menjadi “nuga (ヌガ)”. Kemudian untuk bunyi “ng” pada kota Ngawi berbeda dengan Nganjuk dimana pada kata Ngawi itu bunyi “ng”-nya hanya di tulis dengan huruf “ga (ガ)” saja. Tidak disertakan huruf “n (ン)” atau “nu (ヌ)” sebagai pelengkap bunyi “ng” pada nama kota itu.

#### **b. Nama Kota dengan Bunyi “ng” di tengah kata**

Kota-kota yang menggunakan bunyi “ng” di tengah kata adalah seperti terlihat pada tabel 12. Setiap bunyi “ng” di tengah kata digunakan huruf “n (ン)” dan silabel “ka (カ)”, “gi (ギ)”, “ga (ガ)” atau huruf *katakana* lain yang mempunyai bunyi konsonan “k” atau “g” sesuai dengan nama daerah asal dari tulisan *romaji*.

Tabel 12: Nama Kota dengan Bunyi “ng” di Tengah Kata

Nama kota	Katakana	Romaji	Pola
Kuningan	クニンガン	<i>Kuningan</i>	Nga → n-ga ンガ
Bangkalan	バンカラ	<i>Bankaran</i>	Ngka → n-ka ンカ
Bangil	バンギル	<i>Bangiru</i>	Ngi → n-gi ンギ
Lamongan	ラモンガン	<i>Ramongan</i>	Nga → n-ga ンガ

### c. Nama Kota dengan Bunyi “ng” di akhir kata

Nama-nama kota yang memiliki bunyi “ng” di akhir kata yang terdapat dalam *Google Map* versi Jepang adalah seperti terlihat pada tabel 13.

Tabel 13: Nama kota yang bunyi “ng” berada di akhir kata.

Nama kota	Katakana	Romaji	Pola
Pandeglang	バンデグラン	<i>Pandeguran</i>	lang → ran ラン
Serang	セラン	<i>Seran</i>	rang → ran ラン
Karawang	カラワン	<i>Karawan</i>	wang → wan ワン
Sumedang	サマダン	<i>Samadan</i>	dan → dan ダン
Bandung	バンドン	<i>Bandon</i>	dung → don ドン
Pemalang	ペマラン	<i>Pemaran</i>	lang → ran ラン
Rembang	レンバン	<i>Renban</i>	bang → ban バン
Magelang	マゲラン	<i>Mageran</i>	lang → ran ラン
Malang	マラン	<i>Maran</i>	lang → ran ラン

Seperti terlihat pada tabel 13, setiap bunyi “ng” pada akhir kata di nama kota menggunakan huruf *katakana* “n (ン)” karena bunyi huruf “n (ン)” di akhir kata dalam bahasa Jepang dapat berbunyi seperti bunyi “ng” di dalam bahasa Indonesia.

### d. Nama Kota dengan Bunyi “ng” di Tengah dan di Akhir Kata

Penggunaan nama kota dengan bunyi “ng” di tengah dan di akhir kata dapat dilihat pada tabel 14.

Tabel 14: Nama Kota dengan “ng” di Tengah dan di Akhir Kata.

Nama kota	Katakana	Romaji	Pola
Rangkasbitung	ランカス ビトゥン	<i>Rankasubitun</i>	ンカ.....ト ウン
Tangerang	タンゲラン	<i>Tangeran</i>	ンゲ.....ラ ン
Tulungagung	トゥルンガ グン	<i>Turungagun</i>	ンガ.....グ ン

Tabel 14 memperlihatkan bahwa penulisan nama kota dengan bunyi “ng” di tengah dan di akhir kata adalah gabungan penggunaan huruf “n (ン)” di tengah kata yang dilanjutkan bunyi silabel terbuka dari *ka-gyou* (カ行/baris *ka*) dan *ga-gyou* (ガ行/baris *ga*). Sedangkan bila di akhir kata cukup menggunakan huruf “n (ン)”.

### Nama Kota dengan Bunyi “ny”

Dalam Bahasa Indonesia ada bunyi “ny” seperti pada kota Banyuwangi. Ketika di tulisakan kedalam *katakana* di *Google Map* versi Jepang ditulis menjadi banyuwangi (バニユワンギ). Penulisananya cukup dengan menggunakan huruf “nyu (ニユ)” saja karena vokal yang menyertai bunyi “nyu” pada banyuwangi adalah “u” sehingga “ニユ” digunakan.

### Nama Kota dengan Awalan “ci”

Ada beberapa daerah yang menggunakan silabel “ci” di awal kata berikut nama-nama tempatnya seperti terlihat pada tabel 15.

Tabel 15: Nama Kota dengan Awalan “Ci”

Nama kota	Katakana	Romaji	Pola
Ciamis	チアミス	<i>Chiamisu</i>	Ci → チ
Cianjur	シアンジャー	<i>Shianjā</i>	Ci → シ
Cilacap	チラチャブ	<i>Chirachapu</i>	Ci → チ
Cilegon	シレゴン	<i>Shiregon</i>	Ci → シ
Cirebon	チルボン	<i>Chirubon</i>	Ci → チ

Pada nama kota yang berwalan “ci” seperti pada tabel 15, bisa ditulis dalam *katakana* menggunakan huruf “*chi* (チ)” atau huruf “*shi* (シ)” contohnya seperti pada ciamis itu menjadi *chiamisu* (チアミス) Sedangkan untuk cilegon ditulis menjadi *shiregon* (シレゴン).

Dari data dan analisis di atas, dapat diketahui bahwa pola atau aturan penggunaan *katakana* pada penulisan kota/kabupaten di pulau Jawa memiliki delapan pola umum.

Pola pertama yaitu nama kota yang memiliki pola susunan kata KVKV saat ditulis menggunakan *katakana* pola susunan katanya tidak berubah tetap dengan pola KVKV. Namun pada nama kota yang memiliki fonem vokal “e” diawal kata seperti Bekasi dan Kediri, mengalami perubahan bunyi vokal saat dituliskan dengan *katakana*. Yaitu dari vokal “e” menjadi vokal “u”.

Selain itu, nama kota dengan akhiran berpola KVK yang fonem terakhirnya berupa konsonan “n” saat ditulis menggunakan *katakana* pola susunan katanya tidak berubah tetap dengan pola KVK. Hal ini dikarenakan dalam bahasa Jepang juga terdapat konsonan “n”. Sedangkan penulisan *katakana* nama kota dengan akhiran KVK diakhiri huruf konsonan lain selain “n” di berikan huruf vokal tambahan.

Kemudian, dari data diperoleh juga nama-nama kota yang mengandung 2 konsonan yang berurutan (konsonan rangkap) di bagian tengah kata. Saat menggunakan *katakana* nama kota-kota tersebut ditulis dengan menambahkan sebuah vokal di belakang masing-masing konsonan. Dimana konsonan “s, g, r, b, p” diakhiri dengan bunyi vokal “u”, sedangkan huruf “d”, diakhiri bunyi “o”. Hal ini disebabkan karena karakteristik huruf dalam Bahasa Jepang adalah menggunakan silabel terbuka. Oleh karena itu, semua kata serapan dari bahasa asing yang mengandung silabel tertutup harus mengikuti aturan silabel bahasa Jepang, dengan cara menambahkan vokal pada akhir silabel tertutup. Silabel tertutup “t, d” ditambah dengan “o”, sedangkan silabel tertutup “c, b, f, g, k, l, m, p, s” ditambah “u”. Sedangkan nama kota yang mengandung konsonan “l” saat ditulis menggunakan *katakana* berubah menjadi konsonan “r”. Pada umumnya vokal yang mengikuti konsonan “l” ini tidak mengalami perubahan, tetap seperti pada nama aslinya. Dan saat konsonan “l” berdiri sendiri, akan mendapatkan tambahan vokal “u” menjadi “ru”. Akan tetapi, dari data ditemukan adanya kekecualian yaitu pada nama kota “klaten” silabel

“la” saat ditulis dengan menggunakan *katakana* berubah menjadi “rē”. Hal ini disebabkan oleh kesalahan transkripsi akibat perbedaan bahasa ibu.

Dalam Bahasa Indonesia terdapat konsonan rangkap dengan bunyi mendengung yaitu bunyi “ng”. Cukup banyak nama kota di Indonesia yang menggunakan bunyi seperti itu, misalnya Bandung, Tulungagung, Ngawi dan sebagainya. Bunyi “ng” dapat digunakan di awal, tengah dan akhir nama kota/kabupaten di Indonesia. Penulisan nama kota dengan bunyi “ng” di awal kata dapat dilihat pada nama kota Nganjuk dituliskan ke dalam *katakana* bunyi “ng” menjadi huruf “*nu* (ヌ)” dan huruf “*ga* (ガ)” menjadi *nuga* (ヌガ). Kemudian untuk bunyi “ng” pada kota Ngawi berbeda dengan Nganjuk dimana pada kata Ngawi bunyi “ng” hanya di tulis dengan huruf “*ga* (ガ)” saja, tanpa menyertakan huruf “*n* (ン)” atau “*nu* (ヌ)” sebagai pelengkap bunyi “ng” pada nama kota itu. Setiap bunyi “ng” di tengah kata digunakan huruf “*n* (ン)” dan silabel “*ka* (カ)”、“*ki* (キ)”、“*ga* (ガ)” atau huruf *katakana* lain yang mempunyai bunyi konsonan “k” atau “g” sesuai dengan nama daerah asal dalam tulisan *romajinya*. Setiap bunyi “ng” pada akhir kata di nama kota digunakan huruf *katakana* “*n* (ン)” karena bunyi huruf “*n* (ン)” di akhir kata dalam bahasa Jepang dapat berbunyi seperti bunyi “ng” di dalam bahasa Indonesia. Sedangkan penulisan nama kota dengan bunyi “ng” di tengah dan di akhir kata adalah gabungan penggunaan antara huruf “*n* (ン)” di tengah kata dengan dilanjutkan bunyi silabel terbuka dari *ka-gyou* (カ行) dan *ga-gyou* (ガ行). Bunyi “ny” seperti pada kota Banyuwangi ketika di tulis menggunakan *katakana* menjadi *banyuwangi* (バニユワンギ). Penulisannya cukup dengan menggunakan huruf “*nyu* (ニユ)” saja Karena vokal yang menyertai bunyi “nyu” pada banyuwangi adalah “u” makan “ニユ” digunakan.

Di sisi lain, nama kota yang berwalan “ci” bisa dituliskan dalam *katakana* dengan menggunakan huruf “*chi* (チ)” atau huruf “*shi* (シ)” contohnya seperti pada ciamis itu menjadi *chiamisu* (チアミス) Sedangkan untuk cilegon ditulis menjadi *shiregon* (シレゴン).

## Penulisan Nama Kota Menggunakan Katakana pada Laman Google Map Versi Jepang

Setelah peneliti mengumpulkan data berupa nama kota/kabupaten di Jawa pada laman *Google Map* versi Jepang, dapat diketahui bahwa dari 106 nama kota/kabupaten yang ada di pulau Jawa, terdapat 62 nama kota/kabupaten yang ditulis menggunakan *katakana*, sedangkan untuk kota/kabupaten sisanya masih ditulis dengan menggunakan huruf latin/*romaji*.

## Pola Penulisan Nama Kota Menggunakan Katakana

Secara umum penulisan nama kota di Jawa Pada laman *Google Map* versi jepang sesuai dengan aturan alihaksara *Hepburn*, dan silabel tertutup diubah menjadi silabel terbuka sesuai dengan karakteristik bahasa Jepang. Pola penulisan nama kota tersebut dapat disimpulkan sebagai berikut:

- Pola penulisan *katakana* pada nama kota/kabupaten dengan pola konsonan-vokal-konsonan-vokal (KVKV..) secara umum ditulis dengan *katakana* mengikuti alih aksara *Hepburn*.
- Pada nama kota/kabupaten dengan pola konsonan-vokal-konsonan-vokal (KVKV..) dengan fonem vokal “e” sebagai vokal pertamanya Bekasi dan Kediri, mengalami perubahan bunyi vokal saat dituliskan dengan *katakana*. Yaitu dari vokal “e” menjadi vokal “u”.
- Nama kota/ kabupaten dengan bunyi konsonan “n” diakhir kata, pada saat dialih aksarakan tidak mengalami perubahan dan tetap menggunakan konsonan “n”.
- Perubahan nama kota/kabupaten dengan silabel tertutup di akhir kata dirubah mengikuti karakteristik bahasa jepang menjadi silabel terbuka, dengan menambahkan vokal “u” atau “o” setelah silabel tertutup.
- Penulisan nama kota/kabupaten yang memiliki bunyi “l” dialih aksarakan menjadi “r”.
- Nama kota/kabupaten dengan bunyi “ng” diawal kata ada yang diubah menjadi silabel terbuka dan ada juga yang berubah dengan menghilangkan konsonan “n”-nya.
- Nama kota/ kabupaten dengan bunyi “ng” di tengah kata tidak mengalami perubahan. Tetap ditulis dengan konsonan “n” dan “g” mengikuti aturan penulisan bahasa Indonesia.

- Untuk nama kota/kabupaten dengan bunyi “ng” pada akhir kata, ditulis dengan digunakan konsonan “n (ン)” saja.
- Pada nama kota/kabupaten dengan bunyi “ny” seperti Banyuwangi tidak mengalami perubahan dan dialihaksarakan ke “nyu (ニユ)”. Untuk nama kota/ kabupaten yang diawali oleh suku kata “ci” ditulis menggunakan huruf “chi (チ)” atau dapat juga digunakan huruf “shi (シ)”.

## SIMPULAN

Simpulan dari penelitian ini adalah pada laman *Google Map* versi Jepang terdapat 62 nama kota yang ditulis dengan menggunakan *katakana* di Pulau Jawa, sedangkan sisanya ditulis menggunakan *romaji*. Pada penulisan alih aksara ini, muncul pola-pola penulisan nama kota dengan menggunakan *katakana*. Pola tersebut diantaranya penulisan alih aksara *Hepburn* pada pola KVKV, penambahan vokal pada setiap bunyi silabel tertutup, untuk bunyi “l” di alih aksarakan menjadi “r”, dan nama tempat dengan suku kata depan “ci” dialihaksarakan menjadi “chi (チ)” atau “shi (シ)”. Penggunaan *katakana* dalam menulis kota-kota di pulau jawa ini ada dua cara yang pertama menggunakan bunyi yang sesuai dengan pelafalan huruf *katakana* dalam Bahasa Jepang dan yang kedua adalah mengikuti tulisan *romaji* nama kota dalam Bahasa Indonesia.

## PUSTAKA RUJUKAN

- Hepburn, J. C. (1886). *A Japanese-English And English-Japanese Dictionary* (改正増補和英英和語林集成). Tokyo, z. P maruya & co. Limited. (diakses dari <http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~kaizu/roomazi/doc/hep3.html> pada 15 April 2019)
- Hepburn, J. C. (1867). *A Japanese And English Dictionary; With An English And Japanese Index* (和英語林集成). Shanghai, american presbyterian mission press (Diakses dari <http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~kaizu/roomazi/doc/hep1.html> pada 15 April 2019).
- Irwin, M. (2011). Mora Clipping of Loanword in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics*, 27, 71-81.
- Kawarazaki, M. (1998). *Nihongo kana Nyumon*. Tokyo: The Japan Foundation.
- Pratiwi, I. M. (2014). Analisis Kesalahan Penggunaan Gairaigo pada Mahasiswa Sastra Jepang Angkatan 2010 Universitas Brawijaya. *Jurnal Ilmiah Mahasiswa FIB*, 5(10).

- Septiyanti, S., Rahayu, N., & Budiani, D. (2016). *Penulisan Kosakata Bahasa Indonesia ke dalam Huruf Katakana Bahasa Jepang*. Jurnal Online Mahasiswa Fakultas Keguruan dan Ilmu Pendidikan Universitas Riau, 3(2), 1-9.
- Sudjianto & Dahidi, A. (2009). *Pengantar Linguistik Bahasa Jepang*. Jakarta: Kesaint Blanc.
- Sutedi, D. (2009). *Pengantar Penelitian Bahasa Jepang*. Bandung: Humaniora.
- Sutedi, D. (2011). *Dasar-Dasar Linguistik Bahasa Jepang*. Bandung, Humaniora.
- Wijaya, S. (2015). *Analisis Penggunaan Huruf Katakana dalam Komik "Doraemon Plus" volume 1 Karya Fujiko. F (Desertasi)*. Universitas Pesantren Tinggi Darul Ulum.



**JAPANEDU:**  
Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang

<http://ejournal.upi.edu/index.php/japanedu/index>



**The Formation of Abbreviated Loanwords in Japanese**  
*A Study of Ryakugo and Toujigo in Asahi Shinbun Digital Website of Automotive-Technology Column*

Witria Diah Sari, Linna Meilia Rasiban\*, and Neneng Sutjiati

Department of Japanese Language Education, Faculty of Language Education and Literature, Universitas Pendidikan Indonesia,  
Bandung, Indonesia

\*[linnameilia@upi.edu](mailto:linnameilia@upi.edu)

**ABSTRACT**

In Japan, loanwords widely used in newspapers that make it difficult for readers to understand the information. As there is a need for a practical language, it has been proven by the more dominant use of abbreviations. In newspapers, abbreviations in loanwords are most commonly found in the field of automotive technology, but the use of abbreviations in newspaper must be taken into consideration, as it may be difficult to deliver the information. This study was arranged with the aim to find out, describe and analyse the formation of loanwords in *ryakugo* and *toujigo* form in the *Asahi Shimbun Digital* website. It is intended for Japanese learners to have a basic knowledge of the formation structure of the Japanese loanwords and to know the abbreviations and meanings of the automotive and technology fields term. The method used in this study is a descriptive qualitative analysis. The results of this study were obtained 79 data of *ryakugo* and *toujigo*, which in the formation of *ryakugo* were *jouryaku*, *geryaku*, and *jougeryaku*. While the formation of *toujigo* were keeping the first letter written with alphabet, keeping the first letter written with alpha-numeric, keeping the front-middle- in the first word and keeping two letters in the first word.

**KEYWORDS**

Abbreviation; Automotive; *Gairaigo*; Japanese Loanwords; *Ryakugo*; *Toujigo*

**ARTICLE INFO**

*First received: 09 May 2019*

*Final proof accepted: 27 June 2019*

*Available online: 28 June 2019*

**PENDAHULUAN**

Setiap bahasa saling berakulturasi, berkolaborasi bahkan sampai saling bertukar dan meminjam dengan bahasa lain (Fawsitt, 2016; Kay, 1995; Olah, 2007). Begitu juga pada bahasa Jepang

yang banyak menyerap kata-kata pinjaman dari bahasa lain khususnya bahasa Inggris. Namun hal ini menjadi permasalahan ketika suatu bahasa terlalu banyak menyerap kata pinjaman. Olah (2007) menyebutkan bahwa jika terlalu banyak kata serapan dalam suatu bahasa, masyarakat

sering tidak memahami penggunaan kata pinjaman yang digunakan, karena bentuk struktur dan maknanya berbeda dengan bahasa asli.

Hal ini juga yang membuat pembelajar bahasa Jepang sering merasa kesulitan saat pertama kali berhadapan dengan perubahan-perubahan struktur dalam pembentukan kata serapan (*gairaigo*). Begitu pula sebaliknya yang terjadi pada penutur asli bahasa Jepang pun merasa kesulitan untuk mengetahui perbedaan *wasei-eigo* dan *gairaigo*, terlebih lagi ketika mereka sedang mempelajari bahasa asing (Oshima, 2004; Rasiban, 2014; Sube, 2013).

Faktor kesalahan ini disebut dengan *Ignorance of rule restriction*, yang disebabkan oleh ketidaktahuan pembelajar terhadap aturan-aturan yang berlaku dalam penulisan katakana terutama pada penulisan *gairaigo* (Kamal, 2017:24). Maka dari itu, jika melihat faktor tersebut, pembelajar bahasa Jepang harus mempunyai dasar pengetahuan mengenai pembentukan struktur kata serapan pada bahasa Jepang.

Terdapat beberapa hasil penelitian sebelumnya mengenai tema yang sama yaitu pembentukan kata yang sebagian besar membahas mengenai pembentukan kata berdasarkan struktur perubahan fonetik dan morfologis pada iklan mobil surat kabar *Asahi Shinbun* (Soelistryowati, 2010), pembentukan kata kategori majemuk dan abreviasi, serta perubahan struktur dan sikap terhadap *gairaigo* di *Asahi Shinbun* bidang ekonomi dan olahraga (Oshima, 2004). Penelitian lain yang menganalisis lebih dalam mengenai proses pembentukan kata pada kata serapan, diantaranya membandingkan abreviasi antara bahasa Jepang dan bahasa Indonesia pada artikel di situs *Asahi Shinbun* dan Kompas (Bilal, 2017), dan pembentukan bentuk kata majemuk pada buku perkuliahan tingkat 1, 2 dan 3 semester genap di Departemen Pendidikan Bahasa Jepang FPBS UPI (Nadia, 2018).

Dari beberapa penelitian terdahulu tersebut, penelitian ini akan mengisi *gap* yang belum diisi sepanjang pengetahuan peneliti yaitu penelitian mengenai *gairaigo* khususnya pembentukan kata dalam artikel kolom berita otomotif-teknologi. Artikel-artikel dengan topik ini digunakan sebagai sumber data karena dalam istilah teknis otomotif-teknologi ditemukan banyak kata pinjaman dari bahasa Inggris, terutama pada penggunaan akronim dan singkatan. Bidang otomotif-teknologi merupakan yang paling banyak menyerap kata pinjaman, karena pada istilah teknis sulit menemukan padanan kata dan nuansa

makna yang tidak dapat dideskripsikan secara tepat dalam bahasa Jepang.

Berdasarkan data yang ditemukan, pembentukan kata serapan (*gairaigo*) kategori singkatan dan akronim merupakan yang paling tinggi produktivitas penggunaannya. Misalnya kosakata bentuk *ryakugo* (singkatan) seperti *トランキヤン* /*torakyan*/, *サブコン* /*sabukon*/, *フルコン* /*furukon*/ dan kosakata bentuk *toujigo* (akronim) seperti ATF (オートマチック・トランスミッション・フルード) dan CVT (コンティニュアスリ・バリアブル・トランスミッション) menjadi kategori yang paling banyak ditemukan pada artikel dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital*.

Penelitian mengenai otomotif-teknologi dipilih karena Jepang memiliki bidang otomotif-teknologi yang sangat maju. Otomotif Indonesia telah menjadi sebuah pilar penting dalam sektor manufaktur negara ini karena banyak perusahaan mobil yang terkenal di dunia membuka pabrik-pabrik manufaktur mobil atau meningkatkan kapasitas produksinya di Indonesia, negara dengan ekonomi terbesar di Asia tenggara ([www.indonesia-investments.com](http://www.indonesia-investments.com).) Hal ini yang menyebabkan perlunya tingkat kemampuan yang tinggi bagi Tenaga Kerja Indonesia (TKI) yang paham dan mampu berbahasa Jepang khususnya dalam bidang otomotif dan teknologi.

Tetapi sepanjang pengetahuan peneliti, masih sedikit referensi dan penelitian pada ranah ini serta kurangnya buku, kamus dan bahan ajar lainnya mengenai otomotif-teknologi dalam bahasa Jepang di Indonesia. Oleh karena itu, penelitian ini bertujuan untuk menghimpun data mengenai perubahan bentuk *gairaigo* khususnya dalam bentuk *ryakugo* dan *toujigo* dalam bidang otomotif-teknologi dengan tujuan utama agar penggunaan dari kata *wasei eigo* dalam bentuk *ryakugo* dan *toujigo* dalam bidang tersebut dapat lebih mudah dipahami.

## METODE

Penelitian ini memiliki tujuan untuk mengetahui proses abreviasi bentuk *ryakugo* dan *toujigo* pada kolom berita Otomotif-Teknologi Website *Asahi Shinbun Digital*. Berdasarkan tujuannya, maka metode yang digunakan pada penelitian ini adalah metode deskriptif. Tujuan yang hendak dicapai berkaitan dengan topik penelitian ini adalah memaparkan pembentukan abreviasi

(singkatan dan akronim) dan penulisan serta maknanya dari kata serapan bahasa Inggris dalam bahasa Jepang.

Populasi dalam penelitian ini adalah *gairaigo* yang berasal dari bahasa Inggris (*wasei eigo*) yang terdapat dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital*. Sedangkan sampel penelitiannya adalah kosakata *gairaigo* bidang otomotif-teknologi yang ada dalam 56 artikel dengan jumlah 80 kosakata. Dari sejumlah artikel tersebut, pada tabel 1 didapatkan beberapa kosakata *gairaigo* yang selanjutnya diklasifikasikan menjadi 2 bagian yaitu *Ryakugo* dan *Toujigo* beserta jumlah kosakatanya.

Tabel 1: Klasifikasi *gairaigo*

No	Jenis	Jumlah kosakata
1	<i>Ryakugo</i>	27
2	<i>Toujigo</i>	53

Instrumen yang digunakan untuk menunjang penelitian ini yakni metode dokumentasi. Dalam penelitian ini, dokumen yang digunakan sebagai bahan referensi yaitu artikel-artikel pada kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* (<https://www.asahi.com/>) edisi September 2017-Februari 2019 dengan jumlah sebanyak 56 artikel, dengan alasan menggunakan surat kabar Jepang untuk memperjelas konteks sosial penggunaan *gairaigo* di Jepang.

Analisis penelitian ini juga didukung kamus otomotif online terpercaya (<https://automotive.ten-navi.com/dictionary/>) yang mana seluruh entri data yang ada pada website kamus online tersebut bersumber dari 自動車用語辞典 (*Automobile Glossary Dictionary (Shinbunkan Co., Ltd)*).

Teknik pengumpulan datanya adalah (1) mengumpulkan sejumlah kosakata *gairaigo* bentuk *ryakugo* dan *toujigo* yang ada pada instrumen penelitian; (2) penyaringan guna mendapatkan data berupa kosakata yang berhubungan dengan bidang otomotif-teknologi. Penelitian ini termasuk kedalam penelitian kualitatif non interaktif karena tidak menggunakan teknik pengumpulan data langsung dari orang secara alamiah.

Teknik pengolahan data dilakukan bersamaan dengan proses pengumpulan data (Miles & Huberman, 1992), yakni sebagai berikut, (1) *Pengumpulan data*, pada tahap ini mengumpulkan data-data dari berita-berita pada website *Asahi Shinbun Digital*. Sumber yang digunakan yaitu studi literatur dengan cara mencari, menghimpun,

meneliti dan mempelajari artikel-artikel yang berkaitan dengan objek penelitian; (2) *Reduksi data*, di tahap ini melakukan proses seleksi, pemfokusan, pengabstrakan, transformasi data kasar yang didapat dari website *Asahi Shinbun Digital* dan diteruskan pada saat pengumpulan data, dengan demikian reduksi data dimulai sejak peneliti memfokuskan objek yang diteliti yaitu kosakata.

Terdapat beberapa tahapan peneliti dalam melakukan reduksi data, diantaranya yaitu:

- Mengumpulkan kosakata *gairaigo* yang berasal dari serapan bahasa Inggris yang terdapat dalam artikel-artikel pada kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019;
- Menerjemahkan istilah otomotif-teknologi yang diperoleh dari kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017 sampai Februari 2019;
- Mengklasifikasikan kosakata *gairaigo* tersebut berdasarkan landasan teori yang ada yakni *ryakugo* dan *toujigo* guna memfokuskan objek yang akan diteliti;
- Memfokuskan kosakata bentuk *ryakugo* dan *toujigo* berdasarkan proses pembentukannya;
- Menganalisis data pada instrumen penelitian dengan meneliti proses pembentukan bentuk *ryakugo* dan *toujigo*;

(3) *Pengambilan kesimpulan (verifikasi)*, tahap ini penulis menyimpulkan pembentukan dan jenis kosakata bentuk *ryakugo* dan *toujigo* yang didapat dari hasil analisis.

## HASIL DAN PEMBAHASAN

### Kosakata *Gairaigo* Bentuk *Ryakugo* dan *Toujigo* dalam Kolom Berita Otomotif-Teknologi Website *Asahi Shinbun Digital*

*Gairaigo* yang berasal dari bahasa Inggris yang terdapat pada artikel di kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017 sampai Februari 2019. Mengacu pada instrumen penelitian, dalam berita yang dijadikan sumber penelitian terdapat 56 artikel dengan jumlah 79 kosakata *gairaigo* bentuk *ryakugo* dan *toujigo*.

Kosakata serapan (*Gairaigo*) bentuk *ryakugo* yang ada pada sumber data yakni sebagai berikut: ネットショップ; アルミホイール; アンフィカー; ウェルキャブ; エアコン; カーナビ; キャブコ

ン; サブコン; サムゲージ; ショック; スマホ; ゼロヨンアクセル; ダイネット; トラキャン; ハイテク; パスコン; バンコン; パワートレーン; フルコン; マイコン; ミニカー; メタルパッド; リモコン; ロケバス; デフ; サポカー; レーダー.

Sedangkan kosakata serapan (*Gairaigo*) bentuk *toujigo* diantaranya: ACE; CES; E:Bed; HID; LIB; LUV; OEM; PHEV; SH-AWD; SUV; TECS; TEMS; VTEC; 4WD; AT; ATF; AWD; AYC; BRP; CVCC; CVT; DNA; DOHC; EV; FF; FR; FRP; GM; GTE; GTI; GTR; HV; IR; JRVA; JWJ; LED; LKAS; LSD; MR2; MT; OHV; PGM-FI; RV; SAC; SH; SOHC; TFSI; TRC; USB; UV; VDC; VSC; WLTC.

Apabila dilihat dari rincian kosakatanya jumlah terbanyak dalam artikel-artikel pada kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* adalah *gairaigo* bentuk *toujigo* yang mana berjumlah 53 data, kemudian disusul dengan *gairaigo* bentuk *ryakugo* yang berjumlah 26 data. Dengan perbandingan penggunaan *toujigo* sebanyak 66% dan *ryakugo* sebanyak 33% ini maka dapat disimpulkan bahwa pada istilah teknis lebih banyak menggunakan akronim karena pada bidang ini lebih dituntut untuk berbahasa secara praktis dan cepat.

### Proses Pembentukan *Gairaigo* Bentuk *Ryakugo* dan *Toujigo* dalam Kolom Berita Otomotif-Teknologi Website *Asahi Shinbun Digital*

Pembentukan kata serapan (*gairaigo*) dalam penelitian ini merujuk pada teori Kindaichi (1988) dan Yazuki (2018) untuk proses pembentukan kata bentuk *ryakugo* dan *toujigo*. Setiap kata yang diteliti akan dilengkapi arti kata dan makna berdasarkan bahasa Inggris dan bahasa Jepang, proses pembentukan, dan *jitsurei* yang sumbernya diambil dari website *Asahi Shinbun Digital* guna mengetahui arti dan bukti penggunaan kosakata.

### Proses Pembentukan *Ryakugo*

#### (1) Penghapusan di bagian awal (*Jouryaku*)

Pemendekan kata pada kategori *Jouryaku* pada kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 ditemukan sebanyak satu data, yaitu sebagai berikut:

- (1) ネットショップ = Internet Shop  
インターネット+ショップ →

ネット + ショップ → ネットショップ  
Netto + Shoppu → Nettoshoppu

ネットショップ (*Nettoshoppu*) merupakan *gairaigo* bentuk *ryakugo* kategori *jouryaku* karena mengalami proses penghapusan bagian awal kata yang dapat dilihat pada kosakata インターネット /*Intaanetto*/ - Internet dan menyisakan bagian di akhir kata. Proses pembentukan pada *ryakugo* tersebut dengan menghapus 4 silabis bagian awal di kata pertama, yaitu [イ] /i/, [ン] /n/, [タ] /ta/, [-] /a/.

Contoh kalimat:

最近では安価な海外製品がネットショップ  
などでも売られています

*Saikin de wa anka na kaigaiseihin ga nettoshoppu nado de mo urareteimasu.*

Akhir-akhir ini produk luar negeri dengan harga murah dijual juga di toko Online.

Sumber: 朝日新聞 digital& [and] M, 2017/12/13 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2017121290901.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2017121290901.html).

Jika diartikan secara harfiah, ネット/*Netto*/ diambil dari pemendekan kata *Internet* yang berarti Internet dan ショップ/*Shoppu*/ diambil dari kata *Shop* yang berarti toko, yang mana ネットショップ (*Nettoshoppu*) memiliki arti jual beli yang dilakukan di *internet*/toko daring.

#### (2) Penghapusan di bagian akhir (*Geryaku*)

Pemendekan kata pada kategori *geryaku* pada kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 ditemukan sebanyak 22 data, misal diantaranya,

- (2) カーナビ = Car Navigation  
カー+ナビゲーション →  
カー + ナビ → カーナビ  
Kaa + Nabi → Kaanabi

カーナビ (*Kaanabi*) merupakan *gairaigo* bentuk *ryakugo* kategori *geryaku* karena mengalami proses penghapusan bagian akhir kata yang dapat dilihat pada kosakata ナビゲーション /*nabigeeshon*/ - Navigation. Proses pembentukan pada *ryakugo* tersebut dengan menghapus 4 silabis bagian akhir di kata kedua yaitu [ゲ] /ge/, [-] /e/, [シヨ] /sho/, [ン] /n/.

Contoh kalimat:

「世界初のナビゲーションシステム」とメーカーが謳った「カーナビ」も採用されていた。

“*Sekaihatsu no nabigeeshon shisutemu*” to meekaa ga utatta “*kaanabi*” mo saiyō sareteita.  
(Sistem navigasi pertama di dunia) dan pabrikan (Sistem navigasi mobil) juga diadopsi.

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2018/4/2 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2018032757291.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2018032757291.html).

Jika diartikan secara harfiah, カー /Kaa/ diambil dari kata *Car* yang berarti mobil dan ナビ /Nabi/ diambil dari pemendekan kata *Navigation* yang berarti navigasi; pengetahuan tentang posisi, jarak dan sebagainya, yang apabila diartikan カーナビ (*Kaanabi*) adalah navigasi mobil (GPS).

(3) *Joueryaku*/Penghapusan di bagian awal dan akhir Pemendekan kata pada kategori *geryaku* pada kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 ditemukan sebanyak 1 data, yaitu sebagai berikut:

- (3) レーダー = *Laser Radar*  
レーザ + レーダー →  
レー + ダー → レーダー  
*Ree + Daa → Reedaa*

レーダー (*Reedaa*) merupakan *gairaigo* bentuk *ryakugo* kategori *joueryaku* karena mengalami proses penghapusan di bagian awal yakni pada kata レーダー /*Reedaa*/ - *Radar* dan penghapusan pada akhir kata yang dapat dilihat pada kosakata レーザ /*Reezaa*/ - *Laser*. Proses pembentukan pada *ryakugo* tersebut dengan menghapus 2 silabis pada bagian akhir kata pertama yaitu [ザ] /za/, [ー] /a/ dan menghapus 2 silabis pada bagian awal kata kedua yaitu [ダ] /da/, [ー] /a/.

Contoh kalimat:

ベースになっているのは (レーダー) マップとよばれる三次元の地形データ。  
*Beesu ni natteiru no wa reedaa mappu to yobareru sanjigen no chikei deeta.*  
Map yang didasari data topografi tiga dimensi disebut map ‘lidar’.

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2018/5/22 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2018051889961.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2018051889961.html).

Jika diartikan secara harfiah, レー /*Ree*/ diambil dari pemendekan kata *Laser* yang berarti laser dan ダー /*Daa*/ diambil dari pemendekan kata *Radar* yang berarti radar, yang apabila diartikan レーダー (*Reedaa*) adalah teknologi peraba jarak jauh optik yang mengukur properti cahaya yang tersebar untuk menemukan jarak dan informasi lain dari target yang jauh.

(4) *Penghapusan seluruh silabis pada kata pertama dan Geryaku pada kata kedua*

Pemendekan kata pada kategori penghapusan seluruh silabis pada kata pertama dan *geryaku* pada kata kedua dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 ditemukan sebanyak 1 data, yaitu:

- (4) サポカー = *Safety Support Car*  
セーフティ + サポート + カー  
--- + サポ + カー → サポカー  
*Sapo + Kaa → Sapokaa*

サポカー (*Sapokaa*) merupakan *gairaigo* bentuk *Ryakugo* yang mana kategori ini tidak sesuai dengan teori yang dikemukakan oleh Kindaichi (1988). サポカー (*Sapokaa*) masuk kedalam kategori

サポカー (*Sapokaa*) masuk kedalam kategori penghapusan seluruh silabis pada kata pertama yang dapat dilihat pada kata セーフティ /*Sefutii*/ - *Safety* dan *geryaku* (penghapusan bagian akhir kata) yang dapat dilihat pada kata kedua サポート /*Sapooto*/ - *Support*.

Proses pembentukan pada *ryakugo* tersebut dengan menghapus seluruh silabis pada kata pertama yaitu [セ] /se/, [ー] /e/, [フ] /fu/, [ティ] /ti/ dan menghapus 2 silabis pada bagian akhir di kata kedua yaitu [ー] /o/, [ト] /to/.

Contoh kalimat:

安全運転サポート機能を搭載した車両 (サポカー) となづけ。  
*Anzen unten sapooto kinou o tousai shita sharyou (sapokaa) to nazuke*  
Kendaraan yang dilengkapi dengan fungsi pendukung berkendara yang aman dinamakan ‘sapokaa’.

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2018/1/17 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2018011210771.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2018011210771.html).

Jika diartikan secara harfiah, セーフティ /*Sefutii*/ diambil dari kata *Safety* yang berarti keselamatan, サポ /*Sapo*/ diambil dari pemendekan kata *Support* yang berarti dukungan dan カー /*Kaa*/ diambil dari kata *Car* yang berarti mobil, di mana dalam istilah automotive memiliki makna mobil dengan konsep keselamatan yang direkomendasikan untuk semua pengemudi yang didukung dengan rem otomatis.

(5) *Geryaku pada kata pertama dan penghapusan seluruh silabis pada kata kedua*

Pemendekan kata pada kategori *geryaku* dan penghapusan seluruh silabis pada kata kedua dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 ditemukan sebanyak 1 data, yaitu:

(5) デフ = *Differential Gear*

デフ + フレンシャル + ギア ↓ → デフ

デフ + ... + ...

*Defu* → *Defu*

デフ (*Defu*) merupakan *gairaigo* bentuk *ryakugo* yang mana kategori ini tidak sesuai dengan teori yang dikemukakan oleh Kindaichi (1988). デフ (*Defu*) masuk kedalam kategori *geryaku* (penghapusan bagian akhir kata) pada kata pertama yang dapat dilihat pada kata デフ + フレンシャル /*Defarensharu*/ - *Differential* dan penghapusan seluruh silabis pada kata kedua yang dapat dilihat pada kata ギア /*Gia*/ - *Gear*.

Proses pembentukan pada *ryakugo* tersebut dengan menghapus 4 silabis pada bagian akhir di kata pertama yaitu [レ] /*re*/, [ン] /*n*/, [シヤ] /*sha*/, [ル] /*ru*/ dan menghapus seluruh silabis pada kata kedua yaitu [ギ] /*gi*/, [ア] /*a*/.

Contoh kalimat:

通常のデフを「LSD」に交換してあげるだけで、4WD ほどではないにせよ、...

*Tsuijyou no defu o 「LSD」 ni koukanshite ageru dake de, 4WD hodo dewanai ni seyo, ...*

Hanya dengan menukar differential gear normal untuk LSD, namun itu tidak sebagai 4WD, ...

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2017/11/22 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2017112177851.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2017112177851.html).

Jika diartikan secara harfiah, デフ /*Defu*/ diambil dari pemendekan kata *Differential* yang berarti berbeda dan ギア /*Gia*/ diambil dari kata *Gear* yang berarti roda gigi, yang apabila dalam istilah automotive デフ /*Defu*/ adalah piranti yang berfungsi memberikan perbedaan putaran (yang berlainan) antara 2 roda.

(6) *Penghapusan seluruh silabis pada kata kedua*

Pemendekan kata dalam kategori penghapusan seluruh silabis pada kata pertama dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 ditemukan sebanyak 1 data, yaitu:

(6) ショック = *Shock Absorber*

ショック + アブソーバー → ショック

*shokku* + ---- → *shokku*

ショック (*Shokku*) merupakan *gairaigo* bentuk *Ryakugo* yang mana kategori ini tidak sesuai dengan teori yang dikemukakan oleh Kindaichi (1988). サポカー (*Sapokaa*) masuk kedalam kategori penghapusan seluruh silabis pada kata kedua yang dapat dilihat pada kata アブソーバー /*Abusoobaa*/ - *Absorber*.

Proses pembentukan pada *ryakugo* tersebut dengan menghapus seluruh silabis pada kata kedua yaitu [ア] /*a*/, [ブ] /*bu*/, [ソ] /*so*/, [ー] /*o*/, [バ] /*ba*/, [ー] /*a*/.

Contoh kalimat:

ショック (ショックアブソーバー) はすべての車に装着されている機構で、...

*Shokku (shokku abosoobaa) wa subete no kuruma ni soshaku sareteiru kikou de, ...*

*Shock (shock absorber)* adalah mekanisme yang melekat pada semua mobil, ...

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2018/6/6 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2018060499181.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2018060499181.html).

Apabila diartikan secara harfiah, ショック /*Shokku*/ diambil dari pemendekan kata *Shock* yang berarti kejut atau getaran dan アブソーバー /*Abusoobaa*/ diambil dari kata *Absorber* yang

berarti peredam, yang mana pada istilah otomotif memiliki makna perangkat mekanis atau hidrolis yang dirancang untuk menyerap dan meredam *impuls shock*.

### Proses Pembentukan *Toujigo*

(1) *Pengekalan huruf awal yang ditulis dengan alphabet*

Proses pengekalan huruf awal yang ditulis dengan alphabet dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 diperoleh sebanyak 48 data, diantara seperti,

(7) AT = *Automatic Ttransmission*  
オートマチック + トランスミッション  
*Automatic Ttransmission (AT)*

(AT) atau yang dalam bahasa Jepang disebut dengan *jidouhensokuki* (自動変速機) merupakan *gairaigo* bentuk *toujigo* kategori *kashiramoji* (*initial*) yang memiliki makna persneling otomatis. Termasuk kedalam bentuk *toujigo-kashiramoji* (*initial*) karena melafalkannya per satu karakter sebagai satu kata terpisah yakni /*Ee-Tii*/.

Contoh kalimat:

写真の「2800GT」は初代ソアラと共用の2759cc直列6気筒エンジン搭載で、5段MTと4段ATが用意されていた  
*Shasin no 「2800GT」 wa shodai soara to kyoyou no 2759cc chokuretsu 6 kitou enjin touzai de, 5-dan MT to 4-dan AT ga youisareteita*  
Gambar '2800GT' dilengkapi dengan 2759cc in-line 6 silinder engine yang disiapkan bersama dengan soarer asli, 5-stage MT dan 4-stage AT.

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2018/4/2 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2018032757291.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2018032757291.html).

Jika dilihat dari proses pembentukannya, bentuk satuan kata dari AT berasal dari pengekalan huruf pertama dari tiap suku kata, yakni *Automatic* yang diwakili dengan huruf A, dan T dari pengekalan huruf pertama *Transmission*.

(2) *Pengekalan huruf awal yang ditulis dengan alphabet dan angka*

Proses pengekalan huruf awal yang ditulis dengan alphabet dan angka dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi

September 2017-Februari 2019 diperoleh sebanyak 2 data, yaitu:

(8) 4WD = *4 Wheel Drive*  
フォー + ホイール + ドライブ  
*Four + Wheel + Drive*  
F + W + D → 4WD

フォー・ホイール・ドライブ (4WD) merupakan *gairaigo* bentuk *toujigo* kategori *kashiramoji* (*initial*) yang memiliki makna sistem tenaga penggerak pada keempat roda. Termasuk kedalam bentuk *toujigo-kashiramoji* (*initial*) karena melafalkannya per satu karakter sebagai satu kata terpisah yakni /*Foo-Daburyuu-Dii*/.

Contoh kalimat:

SH-AWDというスポーティーに走れる4WDシステム搭載である(日本での発売予定はなし)  
*SH-AWD to iu supootii ni hashireru 4WD shisutemu tousai de aru (nihon de no hatsubai yotei wa nai)*  
Yang dilengkapi dengan sistem 4WD yang sporty disebut dengan SH-AWD (tidak ada jadwal rilis di Jepang)

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2018/4/8 diakses dari [https://www.asahi.com/and\\_M/gallery/NY\\_International\\_Auto\\_Show/](https://www.asahi.com/and_M/gallery/NY_International_Auto_Show/)

Jika dilihat dari proses pembentukannya, bentuk satuan kata dari 4WD berasal dari pengekalan huruf pertama dari tiap suku kata, yakni *Four* yang diwakili tidak dengan huruf alphabet F melainkan dengan angka 4, W dari pengekalan huruf pertama *Wheel*, dan D dari pengekalan huruf pertama *Drive*.

(3) *Pengekalan huruf bagian awal-tengah-akhir kata pertama*

Proses pengekalan huruf bagian awal-tengah-akhir kata pertama dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 diperoleh sebanyak 1 data, yaitu:

(9) PGM-FI = *ProGraM Fuel Injection*  
プログラム + フューエル + インジェクション  
*ProGraM + Fuel + Injection* →  
P G M + F + I (PGM-FI)

プログラム + フューエル + インジェクション (PGM-FI) dalam bahasa Jepang disebut juga dengan *denshiseigyonen Ryoufubshasouchi* (電子制御)

燃料噴射装置) merupakan *gairaigo* bentuk *toujigo* kategori *kashiramoji* (*initial*). PGM-FI adalah sistem injeksi bahan bakar elektronik digital eksklusif untuk mesin pembakaran dalam. Termasuk kedalam bentuk *toujigo-kashiramoji* (*initial*) karena melafalkannya per satu karakter sebagai satu kata terpisah yakni /Pii-Jii-Emu-Efu-Ai/.

Contoh kalimat:

PGM-FI いうグレードでは最高出力は 135 馬力に達していた。

PGM-FI *iu gureedo dewa saikou shutsuryoku wa 135 bariki ni tasshiteita.*

Di kelas PGM-FI daya maksimum telah mencapai 135 tenaga kuda.

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2018/6/25 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2018062110341.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2018062110341.html).

Jika dilihat dari proses pembentukannya, bentuk satuan kata dari PGM merupakan pengekalannya dari huruf awal, tengah dan akhir dari kata *ProGraM*, F dari pengekalannya huruf pertama *Fuel*, dan I dari pengekalannya huruf pertama *Injection*.

(4) Pengekalannya dua huruf awal pada kata pertama

Proses pengekalannya dua huruf awal kata pertama dalam kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* edisi September 2017-Februari 2019 diperoleh sebanyak 1 data, yaitu:

(10) TRC = *Traction Control*  
トラクション + コントロール →  
*Traction* + *Control*  
T R + C → TRC

トラクション・コントロール・システム (TRC) merupakan *gairaigo* bentuk *toujigo* kategori *kashiramoji* (*initial*). TRC adalah sistem kontrol elektronik untuk mengendalikan kecepatan kendaraan. Termasuk kedalam bentuk *toujigo-kashiramoji* (*initial*) karena melafalkannya per satu karakter sebagai satu kata terpisah yakni /Tii-Aru-Sii/.

Contoh kalimat:

そのかわり、VDC や TRC がワゴンには標準で、バンの AT 車にはオプションで設定されています。

*Sono kawari, VDC ya TRC ga wagon ni wa*

*hyoujyun de, ban no AT-sha ni wa opushon de settei sareteimasu.*

Sebaliknya, VDC dan TRC ditetapkan sebagai standar untuk wagon dan opsional untuk mobil van AT.

Sumber: 朝日新聞 *digital&* [and] M, 2017/12/6 diakses dari [https://www.asahi.com/sp/and\\_M/articles/SDI2017120586101.html](https://www.asahi.com/sp/and_M/articles/SDI2017120586101.html).

Jika dilihat dari proses pembentukannya, bentuk satuan kata dari TRC berasal dari pengekalannya huruf pertama dan kedua dari kata *Traction* yang diwakili dengan huruf T dan R, dan juga C dari pengekalannya huruf pertama *Control*.

## SIMPULAN

*Gairaigo* bentuk *ryakugo* pada kolom berita otomotif-teknologi website *Asahi Shinbun Digital* menurut sistem pembentukannya mengalami 3 proses, yakni (1) *jouryaku*; (2) *geryaku* (proses pemendekan suku kata pada akhir kata pertama, proses pemendekan suku kata pada akhir kata kedua, proses pemendekan suku kata pada akhir kata ketiga, proses pemendekan suku kata pada akhir kata pertama dan kedua, proses penghapusan seluruh suku kata pada kata pertama dan pemendekan suku kata pada akhir kata kedua, proses pemendekan suku kata pada akhir kata pertama dan penghapusan seluruh suku kata pada kata kedua), dan (3) *jougeriyaku*.

Sementara itu, kosakata bentuk *toujigo* mengalami 4 proses pembentukan yakni (1) mengekalkan huruf awal sebuah kata yang ditulis dengan huruf alphabet; (2) pengekalannya huruf awal sebuah kata yang ditulis dengan huruf alphabet dan bilangan; (3) pengekalannya huruf bagian awal-tengah-akhir pada kata pertama; dan (4) pengekalannya dua huruf awal pada kata pertama.

Penelitian ini diharapkan bermanfaat bagi pembelajar bahasa Jepang yang tertarik dengan otomotif-teknologi atau yang ingin bekerja di perusahaan manufaktur otomotif untuk memperdalam pengetahuannya mengenai istilah-istilah otomotif-teknologi dan dapat memahami makna dari istilah tersebut.

Kumpulan istilah dalam penelitian ini berasal dari sumber data yang jumlahnya lebih banyak dan lebih bervariasi karena istilah yang digunakan sesuai dengan konteks sosial penggunaan *gairaigo*

yang sebenarnya, oleh karena itu diharapkan penelitian ini bisa bermanfaat bagi pembelajar bahasa Jepang untuk meningkatkan pembelajaran linguistik dan membantu mengantisipasi masalah yang berkenaan dengan proses pembentukan kata khususnya *gairaigo* di dalam proses kegiatan belajar mengajar. Lebih khususnya lagi sebagai bahan ajar bagi pengajar bahasa Jepang di sekolah/lembaga kejuruan otomotif atau mesin untuk mengenalkan siswa pada istilah otomotif-teknologi dalam bahasa Jepang.

Namun, terdapat beberapa hal yang belum tercapai dalam penelitian ini yaitu, 1) Penelitian ini hanya meneliti istilah-istilah otomotif-teknologi yang terdapat dalam satu sumber saja yakni *Asahi Shinbun Digital*, sedangkan masih banyak media lain yang dapat digunakan sebagai sumber penelitian, agar diperoleh lebih banyak data yang bervariasi; 2) Penelitian ini hanya terfokus pada pembentukan kata kategori singkatan/akronim saja; 3) Penelitian ini hanya meneliti seputar pembentukan struktur kata pada kosakata serapan, oleh karena itu akan lebih baik jika ada penelitian lebih lanjut mengenai sebab dan fungsi penggunaan *gairaigo* dari bahasa asing untuk istilah otomotif-teknologi. Dan perlu dilakukan pengkajian lebih lanjut mengenai padanan istilah otomotif-teknologi dalam bahasa Jepang karena pada penelitian ini padanan kata dalam bahasa Jepang hanya ditemukan pada sebagian istilah saja.

## PUSTAKA RUJUKAN

- Bilal, M. (2017). *Analisis Kontrasif Abreviasi Dalam Bahasa Jepang Dan Bahasa Indonesia* (Skripsi). Semarang: Universitas Diponegoro.
- Fawsitt, J. (2016). *The Phonological Features of Gairaigo*.
- Kamal, A.A. (2017). *Analisis Kesalahan Penggunaan Huruf Katakana Dalam Penulisan Gairaigo Pada Siswa Kelas XI Di SMAN 1 Kabupaten Tangerang* (Skripsi). Bandung: Universitas Komputer Indonesia. Tidak Dipublikasikan.
- Kay, G. (1995). English Loanwords in Japanese. *World Englishes*, 1(1), 67-76.
- Kindaichi, H. (1988). *Nihongo Daijiten*. Japan: Kodansha.
- Miles, B. & Michael, H. (1992). *Analisis Data Kualitatif*. Jakarta: Uip.
- Nadia. A. (2018). *Pembentukan Struktur dan Makna Kata Wasei-eigo dalam Bentuk Majemuk*. (Skripsi). Bandung: Universitas Pendidikan Indonesia. Tidak Dipublikasikan.

- Olah, B. (2007). English Loanwords in Japanese: Effects, Attitudes and Usage as a Means of Improving Spoken English Ability. *Jurnal: Jurnal Penelitian Humaniora*, 9(1), 177-188
- Oshima, K. (2002). Semantic and Structural Shift Patterns of Gairaigo in Japan. *Jurnal: Studi Komunikasi Antar Budaya International Christian University*, 9(4).
- Oshima, K. (2003). An overview of gairaigo studies: Implications for English Education. *Educational Studies*, 45, 151-158.
- Oshima, K. (2004). The movement of gairaigo usage: The case of the Asahi newspaper from 1952 to 1997. *Bunkyo Gakuin Daigaku Gaikokugo Gakubu Bunkyo Gakuin Daigaku Tankidaigaku Kiyoo*, 3, 91-102.
- Rasiban, L. M. (2014). Pemahaman Mahasiswa terhadap Penggunaan Katakana dalam Kata Serapan Bahasa Inggris (*Eigo no Shakuyoo*) pada Bahasa Jepang. *Jurnal Bahasa Asing*.
- Soelityowati, D. (2010). Pembentukan Kata Pinjaman (*Gairaigo*) Dalam Bahasa Jepang. 6(2).
- Sube, M. (2013). *Katakana Eigo to Wasei Eigo: Saikin no Keikou wo chuushinshite (English Katakana and English Wasei: The latest tendency)*. カタカナ英語と和製英語 - 最近の傾向を中心して -. 環境と経営: 静岡産業大学論集, 19(2), 127-137.

Situs Internet:

<https://automotive.ten-navi.com/dictionary/>

<https://www.asahi.com/>



**Re-discussion on the Relation Between *Nihonjijou* Course and  
Cultivation of Intercultural Communication Competence  
*Indonesian Case***

Jeni Putra

*Kyushu University, Fukuoka, Japan*  
[jeniputra-89@gmail.com](mailto:jeniputra-89@gmail.com)

**ABSTRACT**

This study backgrounded by the difficulties to cultivate Intercultural Communication Competence (ICC) in Japanese language learning in Indonesia. In learning Japanese as foreign language, knowing about latest condition and information about Japan is important. Therefore, *nihonjijo* (knowledge about Japan) course is taught as an essential course. However, with changing world and society, the inevitability of *nihonjijou* as Japanese cultural course has to be re-discussed. This study aims to find out how *nihonjijou* course can support the cultivation of the ICC, and how it can be reflected in *nihonjijou* course. Literature survey was used in this study. The results showed that Japanese cultural knowledge as material of *nihonjijou* course are able to cultivate the ICC. However, the learning materials used in *nihonjijou* tend to functioned as communication medium than as culture knowledge. Furthermore, Japanese learners need to think and analyse the cultural concept through their perspective autonomously while teachers need to act as the facilitator who supports the cultural learning process. The teaching of *nihonjijou* also need to be integrated with the other courses to improve its' effectivity.

**KEYWORDS**

Intercultural communication; Intercultural Communication Competence (ICC); JFL environment; *Nihonjijou* course

**ARTICLE INFO**

*First received: 17 April 2019*

*Final proof accepted: 27 June 2019*

*Available online: 28 June 2019*

**はじめに**

インドネシアと日本の関係がより親密になっていくにつれ、インドネシア人日本語学習者と日本語母語話者の直接的接触の機会も増えてくることが予測できる。インドネシアと日本の文化的背景は異なるため、このような接触機会は異文化コミュニケーションと呼ばれ、双方に異文

化コミュニケーション能力が求められる。そこで、この異文化コミュニケーション能力の育成に関して、インドネシアにおける日本語教育機関への期待が高まっている。

国際交流基金（2016）の調査による現在の日本語学習者数を見れば、インドネシアは世界第2位となっていると同時に、以前からいくつかの問題や課題が指摘されてきた。例えば、教

師の日本語能力の低さ (Danasasmita:2010) やインドネシア国内の教材不足、教師の資質の問題といった、日本語の教授に関する問題が明らかにされている。このような問題は外国語としての日本語でコミュニケーションする際に起こる問題の要因に関わっており、「日本人は物事が決まるまで、時間がかかる」、「何かについて言い過ぎる」といった問題が日本や日本人に関わる仕事に就いたインドネシア人を対象にした Widianti (2016) 及び調査から分かっているが、こういった問題は日本語能力ばかりでなく、文化理解にも深く関わっていると考えられる。

日本文化・日本社会をより深く理解するための授業は、日本における日本語教育では「日本事情コース」という名前が知られて久しい。細川 (1999) は、日本事情・日本文化教育の重要な項目は他者との相互関係をどのように確立或いは保持するかであり、主課題として、文化は知識としての文化でなく、能力としての文化をどのように体得していくかを教授する必要があるとしている。これを踏まえて、教師から学習者に知識を移動させるこれまでのインドネシアの日本文化の教授法は改善すべきだと考えられる。一方、インドネシアの学部の場合、日本語教育学科、日本文学学科といった日本語教育を行っている教育機関のカリキュラムを見ると、日本事情はもちろん、日本文化や日本社会文化といった科目名で設定しているところも多数ある。このような日本語関係の学科などが掲げる最終目的は、学習者が日本語でコミュニケーションできる能力を身につけることでもある。しかし、インドネシアと日本は文化背景が異なるため、日本語母語話者と日本語で接触するインドネシア人には異文化コミュニケーション能力が必要であるものの、日本文化を扱う日本事情コースで学習する文化項目は異文化コミュニケーションとどのような関わりがありどのように役に立つかについてまだ不明な点があるため、再考する必要がある。

インドネシアには、日本事情コースはもちろん、外国語教育における文化教授基準がないため、担当する教師によって文化項目の学習内容が異なってくる。この点については、アメリカやオーストラリア、韓国の政府や学会が決定した文化教授基準のような外国語教育における文化教育方針がインドネシアには存在しないためだとも言える。文化を扱う日本事情コースを再考すべき理由の一つとして文化的背景の相違

は言うまでもないが、異文化コミュニケーションの育成に必要とされる日本語母語話者との直接接触の機会がインドネシアの JFL 環境では希少であることも挙げられる。異文化コミュニケーションに関わる目に見える文化の相違はもちろん、コミュニケーションスタイル、価値観、規範、などといった見えない文化も含まれているため、異文化コミュニケーション能力の育成は単純ではない。そういった文化的要素はインタラクティブに関する文化の要素でもあるため、学習コンテンツはそういった文化項目をより重視する必要がある。学習者がコミュニケーションにおいての問題についての対策方法を学ぶことができれば、コミュニケーションの問題を起こすリスクを軽減させる可能性が高まると考えられる。

## 研究方法及び課題

本研究は文献調査、即ち先行文献や理論、本研究のテーマに関連する最新の文献や先行研究などを渉猟することで、研究課題の解明をこなす。ここでの研究課題は、①日本語教育における日本事情と異文化コミュニケーションとの関わりはどのようになっているか、②そしてその能力の育成を促すためにはどのような日本事情の学習コンテンツが必要か、③どのような教授方法が必要であるか、の3点である。

先行研究が以前から指摘しているように、インドネシアのような JFL 環境では異文化コミュニケーション能力の育成に必要とされている日本語母語話者と直接的な接触の機会が希少であることが、異文化コミュニケーション能力が伸びにくいという要素に関わると考えられる。したがってこの文献調査により、異文化コミュニケーション能力の育成に関わる困難を軽減させることが期待される。

## 分析・考察

これまで、日本事情の授業で異文化コミュニケーション能力を促すための研究として、文献調査や実践研究などが行われてきている。小川 (2013) は学習者が実際に議論したい内容を把握し、関心のあるテーマを取り上げ、教師と学習者、および学習者同士の協働によって、知的な好奇心を刺激し、活発的な授業を展開する試

みを行った。小川の教室活動は、グループを儲け、その中で討論するというパターンの活動で授業が行われた。その結果、学習者が自分自身の視点を獲得することで、自分と他者の違いやその関係性について認識できた。また、社会集団におけるコミュニケーションを行う訓練ができること、討論によって様々な意見を引き出せること、自国と他国の異文化関係にある人々と異なる見方や考え方に気づけること、共生する事の難しさがある一方分かち合える喜びが体験できたことは非常に有意義であることなどがアンケート調査から分かった。金子 (2015) は実践研究として、異文化トレーニング授業を行った結果、対象者は異文化コミュニケーションに関する理論をより理解し、コミュニケーションへの自信や意欲を高めることができたとしている。園田他 (2008) は、26名の日本人学生及び9名の留学生を対象とし、異文化コミュニケーション能力を高めるために行ったラーニング・ジャーナル教授法の結果を分析した。学習者にとっては、記述を残すことによりいつでも振り返ることができる重要な学習リソースとなっており、学習の意識化に役立っている一方、教師にとっては受講生の学習プロセスを視覚的に確認できるという点で有効性の高いツールであるとされている。

安井 (2009) は 20名の留学生 (国籍が多様) と 10名の日本人学生に対して、留学生別科 (南山大学) の日本語コースでの合同授業を 8週間連続で行った。授業では、ディスカッションやディベートといったインターアクションを中心とした活動が多く行われた。授業が終了した後に受講者にアンケートを実施した結果、留学生と日本人学生は「交流機会」と「異文化間教育及び異文化体験」を求めているといった共通点があることが分かった。また、この授業を受けることによって、日本語で話す機会になった一方、日本人学生は母国や母国語を見直し、「視野拡大」という副産物を得ていると安井は明らかにしている。

日本での日本事情コースは学習者の異文化適応能力への育成に重視し、学習者が自ら異文化体験や文化的背景が異なる話し相手とインターアクションをすることによって、異文化コミュニケーション能力の育成プロセスを促すと言える。しかし、日本語母語話者と直接的なインターアクションが希少であるインドネシアの JFL 環境は同じような育成し方を実行することが困

難であるため、異文化コミュニケーション能力の育成に必要とされる日本語母語話者との直接的なインターアクションや文化体験が欠けている。また、これまでの学習項目は Putra (2018) が述べているように、日本事情コースの学習コンテンツは知識的な項目に傾いているため、日本語母語話者とコミュニケーションを行う際にどのような役割をしているかという点にも疑問に思う。

## インドネシアの日本語教育事情

歴史的には 1960年代に高等教育機関を中心に日本語教育が展開され、1980年代以降、後期中等教育或いは高校での日本語教育が盛んになったが、これまでは後期中等教育の日本語学習者がインドネシアの日本語学習者全数の大部分を占めている。国際交流基金 (2016) の調査では、インドネシアの日本語学習者数は世界第 2位だと報告されている。しかし、日本語学習者数が多いといっても、日本語教育に問題がないという意味ではない。高等教育機関での日本語教育に注目すると、相応している教材の不足や教師の指導能力、教師の日本語能力といった問題も先行研究で指摘されている。また、日系企業や日本社会に関わる職種に就いている日本語学科の卒業生を対象とした調査の結果によると、日本語の曖昧な表現、敬語の使い方、意思決定といった社会的コミュニケーション行動に困難や違和感を感じることも少なくないと報告されている。このようなコミュニケーションにおける問題は日本語能力に関わることはもちろん、日本文化理解にも関わるため、日本文化を対象にしている日本事情コースを対象とし、本論でそのあり方を再考したい。

海外では、国によって日本事情教育の背景は様々である。例えば、北村 (2011) は、他の国と比べて日本に関する情報量が多い台湾では、日本語教育にもその影響があり、学習者の日本に関する知識が豊富だと述べている。そのような国で日本事情コースを取り扱うことは、簡単なことではないとのことだ。北村が実践したコースでは、教師は学習者に日本文化項目を教える形式ではなく、プロセス重視型のアプローチに重点を置き、事象を提示して学習者に考えさせることで、自分とは異なる価値観や考え方を理解することができ、視野を広げる姿勢を養うことができると述べている。台湾と異なり、イ

インドネシアでは日本に関する情報量が多くなく、学習者の日本事情に関するニーズも異なってくる。高寄他 (2016) は、インドネシアの国立ガネシヤ大学において、アクティブラーニングを授業に取り入れた実践研究を報告した。授業の項目は国の紹介や言語、季節、伝統、都道府県、そして文化であった。この実践は、学習者の参加及びやり取り、自国との比較、学習者の環境へのフォーカス、多彩なグループ活動、教師からの主体授業、そして学習者が日本語で意見を述べる機会といった5つの原理から組み立てられた。結果としては、学習者の日本語で意見を表す力が高まり、授業にもより一層積極的に参加した。また、学習者は自文化について日本語で意見が表せるようになり、日本文化への関心がより高まった上に、日本語非母語話者の教師にも日本語授業にアクティブラーニングを応用することを奨励した。また、Diner (2014) は、インドネシアの日本事情コースに国際交流基金が紹介した「エリンが挑戦シリーズ」を用いて日本事情コースを行った。「エリンが挑戦シリーズ」には日本文化に関するテーマがあるため、これらを主教材として用いており、文化学習活動は70%が理論的学習、30%が体験的学習とのことだった。実践的調査を行った結果は、学生からの評価が高く、日本語で話す自信を向上させることができたということがアンケートの分析の結果から明らかになった。Aneros 他 (2017) は、アクティブラーニングのアプローチを行うことで、日本文化理解を向上させる実践を行った。その結果、日本事情に関する理解や語彙も向上し、小作文を書く力も上がったとのことだった。

日本における異文化コミュニケーション教育では、異文化理解の授業はもちろん、日本事情の授業にも促されていることが先行研究から分かった。授業のシステムは留学生と日本人学生とのインターアクションを中心とし、文化や価値観等の相違点を気づかせることで、異文化コミュニケーション能力を啓発的に獲得させている。これに対して、インドネシアの場合は教師から学習者に知識等を移転させる日本事情コースの授業が殆どだった。更に、インドネシアの場合、日本人とインターアクションすることで、異文化コミュニケーション教育的な日本事情コースの実行が難しく、教材の適当さ、教師の日本語能力や資質の問題なども指摘されている。また、日本文化の学習テーマとしては、イ

ンターアクションや体験中心、ソシアルスキル項目に重点を置いている日本の日本事情コースと異なり、インドネシアでは知識的な文化項目に重きが置かれている。これらを踏まえて、インドネシアにおいてこれまでに行われてきた日本事情コースの内容は、再考すべきであると考えられる。

細川 (1999) が述べているように、日本事情コースにおいて注目すべき文化項目は、人間関係に関わる項目、つまり人間関係というものはどのように確立し、どのように保持していくべきかといったことに目を傾けるべきである。また、日本事情コースの主な目的は目標文化を理解することで、異文化適応能力や異文化コミュニケーション能力の育成を支援する役割が狙いであるため、このコースで学習する文化項目は文化背景が異なる人とのコミュニケーション能力を育成するに役立つ学習項目が欠かせないと言える。

#### 日本事情教育のありかた

以前に指摘されたように、日本事情教育の学習内容として知識的な項目を設定すると、単に教師から学習者に知識を移動するだけの学習方法になってしまいがちである。例えば、学習項目として日本の社会や生活に密着している事柄などを教師が教える場合は、学習者が消極的な聞き手になってしまう可能性が大きいということも先行研究で指摘されている。

日本で行われている日本事情教育の捉え方は、異文化理解や適応の訓練課程などといった知識的な内容から、スキルの実践に変わっている。一方、インドネシアの場合は、現在でも知識的な学習項目を学習コンテンツとして扱っている日本語教育機関が多数ある。これは教師の日本事情教育観にも関わっている。日本事情に対する教育観が変われば、日本事情教育の内容、即ち学習コンテンツ、評価方法、教授法なども変わる可能性がある。

現在の日本事情教育の見方は、文化とコミュニケーションとの親密な関係があまり重視されていない、と Putra (2018) は批判している。例えば、歌舞伎、能などの伝統芸能を学習項目に入れるとする。実際には、一般の日本人でも興味がない人、そのようなことに関する知識が必要ではない人も多くいるのは事実である。そういう情報が必要な場合、様々な情報手段が

存在する現在では、それに関する知識を得るの主目的が自然な日本語でのコミュニケーション能力を習得することであれば、それを促す異文化理解に関わる日本文化項目を日本事情での学習コンテンツとする必要があり、更に授業運営を通して教師自身の学問レベルを向上させることも求められる、ということも日本事情教育の研究では大いに指摘されている。

国際文化フォーラム（2012）は文化を見える文化及び見えない文化に分けられている。物事や行動といった目に見える文化事象を学習者が自ら観察することで、自立発見や気づきを促すとのことである。さらに、価値観や考え方といった文化事象の背景となる見えない文化については、なぜ文化に同意があるのかを、学習者が自ら調べ、考えることも重要だと述べている。

に困難がなくなった。そのため、日本語教育の教師の役割は学習者の興味や好奇心、関心を喚起し、適切な教材を提供したり、学習を導いたりして、学習者の観察力、想像力、調査力、分析力などを高めることで、文化の学ぶ力が身についていくとのことである。

### 日本事情教育の学習コンテンツ

本来、日本事情コースにどのような文化的学習のコンテンツを入れるかは学科や大学の教育方針にも関わり、教師の教育観にも影響される。国際交流基金（2010, p.6）は日本事情の学習コンテンツを2つに分け、1つ目を日本の生活を知るための情報、もう1つを日本を知るための情報としている。詳細は表1の通りである。

表1 日本事情コンテンツ（国際交流基金 2010, p.6）

日本事情・日本文化	カテゴリー	例
社会生活を知る上で必要な情報	対人関係	挨拶、名前・敬称、上下関係、親疎関係、内外関係
	生活	衣食住、趣味・娯楽、仕事・職業、家族構成、生活リズム、休日・休暇
	社会システム	交通システム、生活インフラ、通信、メディア、学校、金融、医療、行政、社会ルール
	習慣・慣習	礼儀・作法、冠婚葬祭、年中行事、贈答
日本を深く理解するために必要な情報	伝統・芸能	茶道・華道・書道、伝統芸能、柔道・空手・相撲、祭り、日本的な遊び、サブカルチャー（映画、ドラマ、漫画、アニメ、音楽）、
	社会・人文文化学	政治、経済、教育、歴史、宗教
	自然環境	地理・気候

国際交流基金が述べた文化のカテゴリーを考えると、現在インドネシアの多くの大学が設置している項目は所産・知識的な文化に傾いていると Putra（2018）は指摘している。これは決して欠陥とまでは言えないが、インドネシアと日本の文化が異なることを考えれば、コミュニケーションスキルをサポートする文化概念についての理解の必要性を念頭に置き、これまでの文化の学習コンテンツのあり方を考え直すこと、さらには異文化コミュニケーションに必要とされる異文化理解はどのような文化なのかを再考し、日本事情コースに反映する必要がある。

### 日本事情と異文化コミュニケーションの関連性

異文化コミュニケーションは先行研究で様々な定義がなされてきたが、共通しているのは、異文化コミュニケーションはコミュニケーション能力と異文化理解から成り立つものであるということである。前述のように、世界において文化の普遍性を中心とする観点は「文化一般」と呼ばれているのに対して、日本文化や韓国文化、アメリカ文化などといった文化の特徴に焦点を当てる領域は「文化特定」と呼ばれている。後者のような1つの「文化特定」の環境に生まれ育った人が異なる「文化特定」からの人とコミ

コミュニケーションを行う場合、必ず文化的な共通点と相違点がある。その際にコミュニケーションの障害を削減するためには、コミュニケーション能力はもちろん、異文化理解も不可欠なものである。このような場合を異文化コミュニケーションの場面と呼ぶ。

異文化コミュニケーション過程において、自文化と他文化の特性を理解すると同時に、それぞれの文化がコミュニケーションにどのような影響を与えるかといった知識が異文化コミュニケーション研究では重要な項目である。そこで日本事情コースは、異文化コミュニケーション能力に必要とされる文化的項目を提供できるのではないかと考える。

Sarbaugh 他 (1983) は、異文化コミュニケーションの理論的な視点を三つ述べている。まず、異文化コミュニケーションは一般のコミュニケーションの拡大であり、異文化または同文化の変数は同じである。二つ目は研究分野として、異文化コミュニケーションは文化が異なる個人或いは集団レベルでのコミュニケーションの問題になる要因に焦点を当てている。最後に、異文化コミュニケーション研究における実践の指針は、人間コミュニケーションの研究の基礎となる理論的な視点である。異文化コミュニケーションを研究の対象とする場合は、このような3つの前提を考えなくてはならず、これらは最低限の条件であるとも言えよう。

### 異文化コミュニケーションの目的

石井他 (1996) は、異文化コミュニケーションの目的を、異文化相互理解に対する積極的な態度の養成と世界的展望をもつ人間観の確率であり、異文化の接触に必要な適応力の養成、また、学校や職場における教育の一部をなす実際の異文化コミュニケーション技能の養成であるとしている。グローバル化が進んでいる現在では、政府間の外交はもちろん、個人と個人の交渉のレベルでも異文化コミュニケーションを行う機会が増えている。このような状況では、個人が持つ異文化コミュニケーション能力の育成を促進する方法の一つとして、外国語教育の観点から、異文化コミュニケーション教育を展開させることも不可欠だと言えるだろう。

Spitzberg (1991) は異文化コミュニケーションの定義を個人内の能力だと出張しており、価値と規範といった異文化コミュニケーション

における変数を態度や発話で具体化することで、有効なコミュニケーションに移る能力だと述べている。コミュニケーション能力は先行研究では様々な定義が為されているが、共通するのは、文法的な正しさはもちろん、コミュニケーションにおいての態度や行為が適当であることが求められるという点である。また、異文化コミュニケーション能力の場合は、社会や文化的な価値や規範に相応することも必要である。

### 異文化コミュニケーションに向けた日本事情コース

日本語教育において、中崎 (2005) は日本語能力を獲得する指導に加え、学習者が学びたい項目や学習者の専門に関わる項目を重視し、異文化環境での問題解決能力を育成することが教師の重要な役割であるとしている。更に、学習支援、キャリア支援といった異文化環境としての現実の日本社会で生きる能力を主体的に確立させるための支援などがカリキュラム上で具体化させる必要があるとも述べている。小川 (2013) は、「学習者が主体的に異文化と自文化の関係を体得する総合学習を捉えるのには教師が学習者の実際に議論したい内容を把握し、関心のある共通のテーマを取り上げ、教師と学習者、及び学習者同士の協働によって、知的好奇心を刺激して活発な授業を展開することが求められる」と述べている。久保田 (2008) も、日本文化を学習者がクリティカルに見て、それを学び、理解することが望ましいとしている。つまり、日本事情教育を通して、学習者は日本文化を理解するために自らの観点で文化を検討して体得する、と結論づけられる。文化とコミュニケーションの関係を再考すると、相互の関連性は様々ある。例えば石井他 (1996) は、コミュニケーションを行うことによって文化を体得し、文化を通じて適切なコミュニケーションの活動方法を学ぶという課程を述べており、社会的な環境における文化とコミュニケーションの関係の見方を示している。

日本語での異文化コミュニケーション能力を育成するためには、異文化適応能力も必要であり、三代 (2009) は日本語能力は異文化適応の一要因であり、日本文化やソーシャルスキルを教えることで、学習者のコミュニケーション能力も向上するという考え方を示している。島崎 (2016) はアクティブラーニングを実行し、

「Understanding Japan through Miyagi's Traditional Culture」というコースに応用し、本コースでは英語を教授言語にして、日本人学生や留学生向けに開講された。本コースの目的は、伝統文化の理解を通して日本への理解を深めることであり、特に地域文化に学習者の目を向けさせるということである。

さらに新崎(2007)は、異文化コミュニケーション能力の育成方法を2つに分けている。それは知識型と体験型である。知識型は言わば講義、ビデオ視聴、ディスカッション、ケーススタディなどである。一方、体験型はロールプレー、シミュレーション、ワークショップといった、経験を通じて学習し、実際に対象文化に身を置いて行うフィールドワークや交流活動も体験とすることである。体験型は体験することのみ焦点を置きがちであるが、実際に文化を経験することで学習者は何かを学び取り、それを実際の生活に活かすことに繋がるため、それを繰り返すことは学習活動に欠かすことのできないことだと出張している。

## おわりに

以上の考察を踏まえ、日本事情コースの文化学習項目は伝統文化及び所産・知識的な文化に傾いてしまうと、異文化コミュニケーション能力の育成につながらないという可能性もあることが明らかになった。本来の教育目的が異文化という壁を乗り越えてコミュニケーションできる能力を育成することであるならば、コミュニケーションをすることで他者との相互関係をどのように確立・保持するかを重視し、コミュニケーションを介在する文化項目により一層着目する必要があると考えられる。また、これまでの異文化コミュニケーションの育成モデルを見ると、異文化環境での態度や文化知識、社会文化がキーワードになっている。教える方法に関しては、教師から学習者へ知識を移動するのではなく、教師は言わばファシリテーターの役割を果たし、学習者が自ら日本文化を発見して体験することで、文化を啓発的に体得していく教室活動の展開が必要であると考えられる。今回、日本事情コースのあり方について再考してきたが、日本語母語話者や日本文化に接触する機会が希少であるインドネシアのようなJFL環境において、異文化コミュニケーション能力を育成

するためにどのような方法が必要かということに関しては、検討すべき大きな課題として残っている。

## 参考文献

- Aneros, N., Judiasri, M. D., & Herniwati. (2017). *Penerapan Active Learning pada Pembelajaran Choukai Untuk Meningkatkan Pemahaman Nihonjijo*. <http://repository.umy.ac.id/bitstream/handle/123456789/17413/full.pdf?sequence=1&isAllowed=y> (diambil pada 28 September 2018)
- Danasasmitha, W. (2010). Pendidikan Bahasa Jepang di Indonesia Sebuah Refleksi. *Repositori UPI. Universitas Pendidikan Indonesia*. [ [http://file.upi.edu/Direktori/FPBS/JUR. PEN. D. BAHASA JEPANG/195201281982031-WAWAN\\_DANASASMITA/Makalah/43B05~1.pdf](http://file.upi.edu/Direktori/FPBS/JUR._PEN._D._BAHASA_JEPANG/195201281982031-WAWAN_DANASASMITA/Makalah/43B05~1.pdf) ] (diambil pada 12 Agustus 2017)
- Diner, L. (2014). *Pembelajaran Budaya Jepang Melalui DVD Erin ga Chousen*. <https://media.neliti.com/media/publications/9100-0-ID-pembelajaran-budaya-jepang-melalui-media.pdf> (diambil pada 28 April 2018)
- Putra, J. (2018). 日本事情教育における異文化コミュニケーション能力の育成を促す方法. *International Conference on Japanese Language Education 2018: Japanese Language Education and Its Relationship to Bussines World*.
- Sarbaugh, L., & Asuncion-Lande, N.(1983). Theory Building in Intercultural Communication: Synthesizing the Action Caucus. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Intercultural Communication Theory: Current Perspective. International and Intercultural Communication Annual* (Vol. 8, pp. 45-60). Beverly hills, California: Sage.
- Spitzberg, B. H. (1991). Intercultural Communication Competence. In L. Samovar & R. Porter (Eds.), *Intercultural Communication* (pp. 353-365). Belmont, CA: Wadsworth.
- Widianti, S. (2016). 日系企業におけるインドネシア人のコミュニケーション. 2016年日本語教育国際研究大会.
- 安井朱美 (2009) 「留学生と日本人学生との合同授業の試みーコメントから見えてくるものー」 [http://office.nanzan-u.ac.jp/ncia/about-ncia/item/pdf\\_09/jissen\\_03.pdf](http://office.nanzan-u.ac.jp/ncia/about-ncia/item/pdf_09/jissen_03.pdf) (最終検索日: 2018年1月28日)
- 園田博文、奥村圭子 & 中村朱美 (2008) 「異文化能力とコミュニケーション能力の養成にむけてー山梨大学・山形大学・佐賀大学の授業実践を事例としてー」 『山形大学紀要(教育学科)』, 14(3), 55-77.
- 久保田竜子(2008)「日本文化を批判的に教える」佐藤慎司・ドーア根理子編 『文化、ことば、教育

- 日本語／日本の教育の「標準」を越えて—』  
(pp.151-173). 明石書店
- 金子正子 (2015) 「大学における異文化コミュニケーション能力を育てる授業の試み —受講者の気づきに注目して—」教育実践ノート  
〔 <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~edugrad/1006kaneko.pdf> 〕 (最終検索日: 2017年8月10日)
- 高寄幸子 & 都恩珍 (2016) 「海外の日本語学習者に日本文化をどう教えるか—アクティブラーニングを取り入れた授業の試み—」*JLSA*, 8, 115-127.
- 国際交流基金 (2016) 「2015年度海外日本語教育機関調査結果 (速報値) 2016/11/10」  
〔 [http://www.jpfbj.cn/sys/wp-content/uploads/2016/11/2015\\_jieguoshuoming.pdf](http://www.jpfbj.cn/sys/wp-content/uploads/2016/11/2015_jieguoshuoming.pdf) 〕 (最終検索日: 2017年6月10日)
- (2010) 『日本事情・日本文化を教える』ひつじ書房
- 国際文化フォーラム (2012) 「外国語学習のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言—」PDF 版  
[http://www.tjf.or.jp/pdf/meyasu\\_web.pdf](http://www.tjf.or.jp/pdf/meyasu_web.pdf) (最終検索日: 2018年6月10日)
- 細川英雄 (1999) 『日本語教育と日本事情—異文化を超える—』明石書店
- 三代純平 (2009) 「留学生生活を支えるための日本語教育とその研究の課題 —社会構成主義からの示唆—」『言語文化教育研究』, 7(8), 65-99.
- 小川 都 (2013) 「留学生に必要とされる『一般日本事情』のあり方」『専修大学外国語教育論集』41, 105-113.
- 新崎隆子 (2007) 「異文化コミュニケーション能力の修得プロセス～通訳演習参加者の事例より」日本通訳学会第8会大会発表配布資料
- 石井敏, 岡部朗一 & 久米昭元著 (1996) 『異文化コミュニケーション: 新・国際人への条件』有斐閣選書
- 中崎温子 (2005) 「多文化共生社会の日本語教育--「コミュニケーション」ということの考察を通して」『言語と文化』, 13, 103-120.
- 島崎 薫 (2016) 「日本文化のクラスにおけるアクティブラーニングの実践 —すずめ踊りプロジェクトでのアクション・リサーチを通じた—考察—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』, 2, 181-191.
- 北村武士 (2011) 「日本事情・日本文化を取り入れた日本語授業を考える—国際交流基金教授法シリーズ『日本事情・日本文化を教える』より—」  
[https://www.koryu.or.jp/Portals/0/resources/kaohsiung/ez3\\_contents\\_nsf/15aef977a6d6761f49256de4002084ae/b23cb5657c97286049257825002658fe/\\$FILE/dai%20san%20kai%20jyunkai%20handout.pdf](https://www.koryu.or.jp/Portals/0/resources/kaohsiung/ez3_contents_nsf/15aef977a6d6761f49256de4002084ae/b23cb5657c97286049257825002658fe/$FILE/dai%20san%20kai%20jyunkai%20handout.pdf) (最終検索日: 2017年6月13日)



## The Emerging of Japanese Neologism and Aging Society

Ni Nengah Suartini

*Department of Japanese Education, Universitas Pendidikan Ganesha, Singaraja, Indonesia*  
[nnsuartini@undiksha.ac.id](mailto:nnsuartini@undiksha.ac.id)

### ABSTRACT

Neologism are new words, terms or phrase created to apply to new concepts or to make older terminology sound more contemporary. The changing of society reflected in language is the emerging of myriads of neologisms. Japan currently is trying to cope with the aging population, known as aging society. The new words are invented to describe social phenomenon around the aging society in Japan. Considering the influence of social changing and neologisms, it is significant to learn how these new words are created. This study aimed to investigate issues concerning Japanese neologisms in aging society from the perspectives of characteristics, definition and social connotations. List of aging society neologisms is developed by looking in academic articles, scholarly books and online sources. The result shows that aging society neologisms created by combining existing words, borrowing, abbreviation and by rhyming with existing words or simply playing with sounds. Japanese aging society neologisms are the language mirror to reflect social phenomenon that the public concerns most. The study of neologisms is also a valuable tool to understand social cultural changes and improve communicative and cultural competence of the Japanese learners.

### KEYWORDS

Aging Society; Neologism; Social Phenomenon

### ARTICLE INFO

*First received: 14 April 2019*

*Final proof accepted: 27 June 2019*

*Available online: 28 June 2019*

### PENDAHULUAN

Bahasa selalu mengalami perubahan sejalan dengan perkembangan waktu. Perubahan tersebut dapat diketahui dengan adanya penggunaan kosa kata. Ada kosa kata yang sudah tidak lagi digunakan, yang sudah tidak lagi dikenal penggunaannya oleh masyarakat karena sudah tergantikan oleh kata lain atau sudah tidak sesuai dengan kondisi yang mengacu pada kata tersebut.

Perbendaharaan kata mengalami perubahan karena terjadinya perubahan pada masyarakat pengguna bahasa tersebut. Hal ini ditandai dengan bermunculannya kosakata baru dalam perkembangan bahasa.

Neologisme merupakan suatu istilah yang mengacu pada munculnya kosa kata baru. Kosa kata tersebut dapat berupa kata yang sudah ada sebelumnya, tetapi mengalami perubahan makna, kata yang terbentuk dari kosa kata sebelumnya, kata serapan dan kata yang memang baru.

Terbentuknya neologisme dilatarbelakangi oleh berbagai faktor seperti dari sisi perkembangan teknologi, ekonomi, politik, sosial, budaya dll pada masyarakat pengguna bahasa. Sehingga kosa kata baru diperlukan untuk menjelaskan perubahan tersebut. Jurnalis sangat berperan dalam membuat, memperkenalkan dan sekaligus mempopulerkan neologisme melalui tulisan-tulisannya dalam media berita (Usevics, 2012). Semakin seringnya neologisme tersebut digunakan oleh jurnalis, digunakan untuk mengangkat suatu berita, maka masyarakat akan semakin mengenal dan menggunakan neologisme tersebut. Media berita merupakan sumber informasi neologisme yang sekaligus mejadi cerminan kondisi terkini kehidupan masyarakatnya (Usevics, 2012; Zhou, 2016).

Neologisme juga merupakan salah satu masalah dalam penerjemahan karena tidak semua neologisme pada bahasa sumber memiliki padanan kata yang sama dengan bahasa target. Hal ini bisa dipahami karena perbedaan kondisi masyarakat pengguna bahasa. Sehingga bagi pembelajar bahasa asing, khususnya profesi sebagai penerjemah, pengetahuan tentang kondisi masyarakat pengguna bahasa merupakan hal yang sangat penting untuk menambahkan kosa kata dalam meningkatkan kemampuan bahasa secara kontekstual sesuai dengan perkembangan pada masyarakat pengguna bahasa (Rets, 2016).

Kondisi masyarakat Jepang yang dinamik juga tercermin dari bermunculannya neologisme. Salah satunya adalah dinamika sosial dalam hubungannya dengan masalah demografi yang dikenal dengan *shoushikoureika* (少子高齢化). *Shoushikoureika* (少子高齢化) yaitu menurunnya angka kelahiran dan semakin meningkatnya angka lansia. Masalah demografi ini menimbulkan fenomena sosial dalam kehidupan masyarakat Jepang dan berkontribusi besar terhadap munculnya neologisme yang menggambarkan fenomena tersebut. Media cetak maupun elektronik, jurnalis dan akademisi sangat berperan dalam mempopulerkan neologisme. Semakin serius dan kekerapannya neologisme tersebut diangkat dalam suatu tema, maka neologisme tersebut akan semakin dikenal di masyarakat. Seperti misalnya masalah *koureika* (高齢化).

Berdasarkan data dari Badan Statistik Jepang tahun 2018 persentasi penduduk lansia (usia 65 tahun ke atas adalah 27,7% dari total jumlah penduduk dan ini merupakan jumlah yang tertinggi di dunia. Angka tersebut menunjukkan

tingginya jumlah lansia di Jepang. Salah satu masalah utama yang berhubungan dengan *koureika* (高齢化) adalah perawatan kesehatan untuk para lansia (berikutnya akan digunakan istilah berbahasa Jepang, *kaigo* (介護)). Dengan meningkatnya jumlah lansia, maka kebutuhan akan tenaga pramurukti untuk *kaigo* (介護) juga meningkat.

Tingginya kebutuhan akan tenaga pramurukti memberikan peluang kerja bagi orang Indonesia untuk bekerja di Jepang. Berbagai pelatihan sebagai calon pramurukti juga diberikan sebagai pembekalan untuk bekerja di Jepang, khususnya ketrampilan bahasa Jepang. Tetapi, ketrampilan berbahasa saja tidak cukup. Neologisme yang berhubungan dengan *koureika* (高齢化) juga sangat penting bagi calon pramurukti yang akan bekerja di Jepang. Pembelajaran bahasa Jepang dengan menambahkan neologisme yang berhubungan dengan bidang kerja mereka akan dapat menambah wawasan, meningkatkan pemahaman tentang masyarakat Jepang dan meminimalisir gear budaya saat bekerja di Jepang. Misalnya pengalaman gear budaya yang dirasakan oleh para calon pramurukti tentang banyaknya lansia di Jepang yang tinggal di panti jompo dan tidak dirawat oleh keluarganya (Sugawara & Suartini, 2015). Hal ini disebabkan karena para calon pramurukti tersebut merasakan suatu kondisi yang berbeda dengan di Indonesia. Khususnya tentang kesan orang tua yang tinggal di panti jompo, kepedulian dan perhatian keluarga terhadap lansia, kedekatan dalam sistem kekerabatan di Indonesia. Tetapi, dengan menambahkan neologisme tentang *koureika* (高齢化) akan dapat membantu pemahaman mereka tentang kondisi sosial masyarakat Jepang dan menumbuhkan kesadaran akan pentingnya profesi mereka sebagai pramurukti bagi masyarakat Jepang. Sehingga akan memberikan motivasi, kebanggaan dan rasa percaya diri terhadap profesi yang ditekuninya sebagai pramurukti.

Neologisme merupakan salah satu kendala bagi pembelajar bahasa Jepang. Hal ini disebabkan karena neologisme tidak segera dapat ditemukan di kamus. Sehingga pembelajar bahasa Jepang perlu mendapatkan informasi terkini yang berhubungan dengan neologisme dan sekaligus kondisi masyarakat pengguna bahasa tersebut. Misalnya masalah demografi, khususnya yang berhubungan dengan peningkatan angka lansia (selanjutnya disebut *koureika* (高齢化)). *Koureika* (

高齢化) merupakan salah satu fenomena pada masyarakat Jepang yang melatarbelakangi munculnya neologisme.

Neologisme yang dibahas dalam penelitian ini lebih fokus pada kosa kata baru yang berhubungan dengan fenomena sosial yang disebabkan oleh *koureika* (高齢化). Penelitian ini bertujuan untuk menjelaskan bagaimana pembentukan, definisi dan konotasi sosial dari neologisme tersebut.

Pemahaman terhadap neologisme tentang *koureika* (高齢化) tidak hanya diperlukan bagi pembelajar bahasa Jepang secara umum untuk memahami dinamika masyarakat Jepang. Tetapi, juga diperlukan bagi para calon pramurukti yang akan bekerja di Jepang. Pengetahuan tentang kondisi sosial masyarakat Jepang akan memberikan pengetahuan tambahan yang berhubungan dengan profesi yang ditekuni dan juga mengurangi potensi gegar budaya. Sehingga dengan memahami kondisi sosial masyarakat setempat akan mempermudah para calon pramurukti dalam beradaptasi dengan lingkungan yang baru.

## PENELITIAN TERDAHULU

Neologisme merupakan tema yang menarik untuk diteliti karena selain dapat memahami terminologi baru juga sekaligus dapat mengetahui sisi lain yang berkaitan dengan perkembangan bahasa terkini. Penelitian tentang neologisme yang telah dilakukan sebelumnya adalah sebagai berikut.

Penelitian tentang pembentukan neologisme dan penyerapan kata berbahasa Inggris sebagai yang dimofikasi sebagai bahasa prokem dalam perkembangan bahasa Shona (Mareva, 2014). Penelitian ini dilakukan melalui observasi dan angket kepada 500 mahasiswa di tingkat universitas. Hasil penelitian ini menunjukkan bahwa bahasa prokem yang dibentuk bersifat dinamis dan kata dalam bahasa prokem yang dibentuk dari kata serapan bermakna eufemisme, intoleransi, pujian, dan juga bermakna cenderung menyembunyikan maksud yang sebenarnya. Neologisme tersebut muncul karena merupakan refleksi dari perkembangan sosial, ekonomi dan politik terkini di negara tersebut. Penelitian ini lebih memfokuskan pada bahasa prokem dikalangan generasi muda karena unsur bahasa serapan. Tetapi, bahasa generasi muda,

khususnya bahasa prokem sangat dinamik sehingga keberagaman neologisme tersebut sangat singkat dan pemakaiannya juga terbatas berdasarkan umur, yaitu hanya pada generasi muda.

Penelitian berikutnya adalah penelitian tentang pembentukan dan ruang lingkup neologisme yang muncul pada media cetak, khususnya koran *The Guardian* di Inggris (Usevics, 2012). Dari hasil penelitian tersebut disimpulkan bahwa secara struktur semantik neologisme yang dibentuk adalah berupa bentuk baru yang berpijak pada makna yang sudah dikenal sebelumnya dan didominasi oleh neologism yang bermakna deskripsi. Tetapi, penelitian ini hanya membahas jenis pembentukan neologisme dengan pola yang sama dan tidak ditemukan keragaman pembentukannya.

Tema neologisme juga sangat penting untuk dibahas dalam pembelajaran bahasa asing. Hal ini bisa dibuktikan dari hasil penelitian tentang perlunya memunculkan neologisme bahasa Inggris dalam pembelajaran di kelas (Rets, 2016). Melalui pengenalan istilah baru tersebut secara tidak langsung pembelajar bahasa asing dapat belajar dan memahami budaya pengguna bahasanya (Rets, 2016). Rets (2016) juga menyarankan untuk menyisipkan istilah baru dalam materi yang membahas tentang kosa kata melalui artikel terkini yang terbit dalam kurun waktu 1 tahun dan tematik. Tetapi, penyajian materi dengan tema artikel terkini tidak sesuai untuk tingkat pemula, hanya bisa diberikan kepada pembelajar bahasa asing yang sudah memiliki pemahaman dan keterampilan yang hampir memadai penutur asli.

Penelitian lainnya adalah tentang munculnya neologisme yang berhubungan dengan penurunan jumlah anak-anak atau *shoushika* (少子化) pada masyarakat Jepang (Suartini, 2018). Pada penelitian ini lebih menekankan pada munculnya neologisme yang dilatarbelakangi oleh kondisi sosial masyarakatnya, khususnya yang berhubungan dengan *lifecourse*. Data dikumpulkan dari media cetak dan elektronik, artikel dan buku akademik bidang Sosiologi Keluarga. Hasil penelitian ini menunjukkan bahwa neologisme yang terbentuk lebih banyak berupa akronim dan lebih menunjukkan makna yang berhubungan dengan kesulitan orang Jepang untuk mendapatkan pasangan hidup dan menikah. Penelitian hanya membahas tentang neologisme yang berhubungan dengan latar belakang masalah penurunan kelahiran sebagai fenomena sosial.

Tetapi fenomena sosial yang memunculkan neologisme tidak hanya masalah *shoushika* (少子化), masalah *koureika* (高齢化) yaitu peningkatan usia lanjut juga memberikan kontribusi yang signifikan terhadap perkembangan neologisme bahasa Jepang. Sementara penelitian tentang neologisme yang berhubungan dengan fenomena demografi di Jepang yang berdampak pada fenomena sosial masih sangat kurang. Pemahaman terhadap neologisme yang dilatarbelakangi oleh masalah sosial masyarakatnya sangat penting untuk meningkatkan pemahaman terhadap kondisi budaya pemakai bahasa tersebut.

## METODE PENELITIAN

Penelitian ini menggunakan metode dekriptif analitis, yaitu mendeskripsikan suatu kondisi fenomena yang terjadi sesuai keadaan yang sebenarnya. Metode ini digunakan untuk mendeskripsikan makna neologisme dan menganalisis latar belakang munculnya neologisme tersebut.

Objek penelitian ini adalah neologisme yang berhubungan dengan *koureika* (高齢化). *Koureika* (高齢化) dilatarbelakangi oleh masalah demografi, lalu berdampak pada munculnya berbagai fenomena sosial di masyarakat dan menjadi salah satu topik hangat yang diangkat oleh berbagai media, baik media elektronik, cetak maupun media sosial. Termasuk juga sebagai topik penelitian di kalangan akademisi.

Data pada penelitian ini berupa kosa kata yang berhubungan dengan *koureika* (高齢化). Sumber data didapatkan dari buku akademik terutama bidang keilmuan Sosiologi Keluarga (家族社会学) seperti “*Kazoku to Jendaa no Shakaigaku* (家族とジェンダーの社会学)”, “*Ima, Kono Nihon no Kazoku: Kizuna no Yukue* (いま、この日本の家族-絆のゆくえ)” dan “*Kazoku o Koeru Shakaigaku* (家族を超える社会学)”. Sehingga dapat diketahui bahwa kosa kata tersebut telah dipakai secara akademik. Selain dari buku, data yang telah dikumpulkan juga bersumber dari internet dan web site resmi yang membahas topik tentang *koureika shakai* (高齢化社会) seperti [minnanokaigo.com](http://minnanokaigo.com), [tyoju.or.jp](http://tyoju.or.jp), [htb.co.jp](http://htb.co.jp), [rieti.go.jp](http://rieti.go.jp), [irs.jp](http://irs.jp), [fukushihoke.metro.tokyo](http://fukushihoke.metro.tokyo).

Ada 5 tahapan analisis data yang dilakukan dalam penelitian ini. Tahapan tersebut adalah sebagai berikut.

Pertama, mencari informasi tentang berita yang berhubungan dengan *koureika* (高齢化) baik melalui media elektronik maupun media cetak untuk mengetahui signifikansi *koureika* (高齢化) sebagai salah satu fenomena sosial. Termasuk juga informasi yang bersumber dari buku akademik dan artikel ilmiah.

Kedua, mengumpulkan neologisme yang berhubungan dengan *koureika* (高齢化). Sekaligus membuat kategori berdasarkan proses pembentukannya.

Ketiga, mencari definisi dan mendeskripsikan masing-masing neologisme yang sudah dikumpulkan. Definisi tidak didapatkan di kamus karena banyak neologisme yang dimaksud dalam tema ini belum dimuat. Definisi tersebut didapat melalui penjelasan atau uraian pada media berita elektronik, tulisan ilmiah dan buku akademik.

Keempat, setelah masing-masing definisi neologisme dijelaskan, selanjutnya dikategorikan berdasarkan konotasi sosial dari neologisme tersebut. Sehingga dapat ditemukan fenomena sosial dan konotasi sosial seperti apa yang memunculkan neologisme yang berhubungan dengan *koureika* (高齢化).

Kelima, membuat simpulan yang mengacu pada permasalahan yang diangkat dari penelitian ini. Simpulan berdasarkan pada temuan dari penelitian ini tentang pembentukan dan masalah sosial yang melatarbelakangi pembentukan neologisme dalam hubungannya dengan fenomena *koureika* (高齢化).

## HASIL DAN PEMBAHASAN

### Pembentukan Neologisme

Berdasarkan pada data yang terkumpul, pembentukan neologisme yang berhubungan dengan kehidupan lansia dapat dikategorikan menjadi 5. Neologisme yang terbentuk dari kosa kata yang telah ada sebelumnya, permainan bunyi, singkatan, kata serapan dan *portmanteaus*.

Pertama, neologisme yang terbentuk dari kosa kata yang telah ada sebelumnya atau merupakan ‘peniruan’ dari kosa kata yang telah dikenal. Neologisme tersebut adalah sebagai berikut. *Shuukatsu* (終活), *taikikoureisha* (待機高齢者) atau *taikiroujin* (待機老人), *kaigokyuuka* (介護休暇),

*kaigorishoku* (介護離職), *kaigo utsu* (介護鬱), *koureisha gyakutai* (高齢者虐待), *houmon kaigo* (訪問介護), *Zaitaku kaigo* (在宅介護), *kaigo nanmin* (介護難民), *kaimono nanmin* (買い物難民), *mitori nanmin* (看取り難民), *rougo hinkon* (老後貧困), *rougo hatan* (老後破綻), *rougo hasan* (老後破産), *kenkou jumyou* (健康寿命), *kodokushi* (孤独死), *koritsushi* (孤立死) dan *karyuurojin* (下流老人). Berikut akan dijabarkan masing-masing pembentukan neologisme tersebut.

*Shuukatsu* (終活) merupakan kata yang dibentuk dari kata lain yang telah dikenal sebelumnya dan memiliki kesamaan bunyi yaitu *shuukatsu* (就活). *Shuukatsu* (就活) merupakan singkatan dari *shuushoku katsudou* (就職活動) yaitu aktivitas mencari kerja, melamar kerja, mengikuti *job fair*, dll. Pembentukan kata dengan mencontoh *shuukatsu* (就活) menjadi *shuukatsu* (終活).

*Koureisha gyakutai* (高齢者虐待), *taikikoureisha* (待機高齢者) atau *taikiroujin* (体育老人), *kaigokyuuika* (介護休暇), *kaigorishoku* (介護離職), *kaigo utsu* (介護鬱), *koureisha gyakutai* (高齢者虐待) merupakan istilah yang telah ada sebelumnya, yang lebih banyak digunakan dalam menggambarkan fenomena sosial yang berhubungan dengan masalah pengasuhan dan tumbuh kembang anak.

*Taikijidou* (待機児童) menjadi *taikikoureisha* (待機高齢者) atau *taikiroujin* (体育老人). Ada persamaan menggunakan istilah *taiki* (待機) yang berarti menunggu atau mengantre agar dapat menggunakan fasilitas yang telah disediakan.

Begitu juga dengan *ikuji kyuuika* (育児休暇) menjadi *kaigokyuuika* (介護休暇). Sama-sama menggunakan kata *kyuuika* (休暇) yang bermakna mengambil cuti agar dapat konsentrasi dalam melakukan suatu kegiatan.

*Ikujirishoku* (育児離職) menjadi *kaigorishoku* (介護離職). Penggunaan kata *rishoku* (離職) bermakna berhenti bekerja atau mengundurkan diri dari pekerjaan karena ada suatu hal yang harus diprioritaskan.

*Ikuji utsu* (育児鬱) menjadi *kaigo utsu* (介護鬱). Penggunaan kata *utsu* (鬱) yang berarti kondisi tertekan secara psikologis, sehingga membuat orang tersebut menutup diri terhadap lingkungan sekitarnya.

*Koureisha gyakutai* (高齢者虐待) mencontoh dari *jidougyakutai* (児童虐待). Penggunaan kata

*gyakutai* (虐待) yang bermakna tindakan kekerasan. Termasuk juga kekerasan fisik, verbal maupun mental.

*Houmon kaigo* (訪問介護), mencontoh penggunaan kata *houmon* (訪問) yang sering dipakai pada *gakkou houmon* (学校訪問), *katei houmon* (家庭訪問). *Houmon* (訪問) bermakna melakukan kunjungan.

*Zaitaku kaigo* (在宅介護) mencontoh penggunaan kata *zaitaku* (在宅) pada kata *zaitaku hosupisukea* (在宅ホスピスケア). Penggunaan *zaitaku* (在宅) yang bermakna keberadaan di rumah.

Penggunaan istilah *nanmin* (難民) yang bermakna pengungsi, dalam hal ini lebih dimaknai berada dalam kondisi sulit. Misalnya *kaigo nanmin* (介護難民), *kaimono nanmin* (買い物難民) dan *mitori nanmin* (看取り難民).

Penggunaan istilah *hinkon* (貧困), *hatan* (破綻), *hasan* (破産), *karyuu* (下流) merupakan istilah yang sudah tidak asing lagi untuk menggambarkan masalah ekonomi yang terpuruk. Sehingga penggunaan istilah tersebut pada kata lansia mempermudah pemahaman tentang kondisi lansia yang dimaksud pada neologisme tersebut. Misalnya *rougo hinkon* (老後貧困), *rougo hatan* (老後破綻), *rougo hasan* (老後破産), dan *karyuurojin* (下流老人).

Penggunaan istilah *kenkou* (健康) untuk menyatakan kondisi kesehatan yang baik pada kata *kenkou jumyou* (健康寿命). Begitu juga dengan penggunaan istilah *kodoku* (孤独) atau *koritsu* (孤立) yang bermakna dalam kesendirian. Misalnya pada kata *kodokushi* (孤独死), *koritsushi* (孤立死).

Kedua, neologisme yang terbentuk dari permainan bunyi. Bentuk yang ditemukan sangat terbatas, yaitu *nimminkaigo* (認認介護) dan *rouroukaigo* (老老介護). Permainan bunyi pada kata *nimminkaigo* (認認) dan *rouroukaigo* (老老) lebih menarik dan mudah dikenal bila dibandingkan dengan kata *ninchishou doushi* (認知症同士) dan *roujin doushi* (老人同士) yang mempunyai makna sama.

Ketiga, neologisme yang terbentuk dari singkatan. Hanya ditemukan satu, yaitu *sakoujuu* (サ高住). Singkatan yang dibentuk berbeda dari singkatan pada umumnya yang biasanya menggunakan huruf latin, tetapi memadukan huruf depan dengan menggunakan huruf *Katakana* dan *Kanji*.

Keempat, neologisme yang terbentuk dari kata serapan lebih banyak berasal dari Bahasa Inggris. Misalnya *hoomu herupaa* (ホームヘルパー), *disaabisu* (ディサービス), *dikea* (ディケア), *shooto sutei* (シヨートステイ), *sakusesu eijingu* (サクセスエイジング), *endingu nooto* (エンディングノート) dan *rekurieeshon* (レクリエーション).

Kelima, neologisme yang terbentuk dari *portmanteaus*. Data yang terkumpul semua berupa *portmanteaus* yang terdiri dari Bahasa Jepang dan Bahasa Inggris. Perpaduan Bahasa Jepang digunakan untuk istilah '*kaigo*' lalu dipadukan dengan kosa kata serapan dari Bahasa Inggris. Misalnya *kaigo ashisutanto* (介護アシスタント), *kaigo kafe* (介護カフェ), *kaigo sutoresu* (介護ストレス) dan *kaigo rifoomu* (介護リフォーム). Neologisme lainnya adalah *houmon rihabiriteeshon* (訪問リハビリテーション) dan *mutodoke hausu* (無届けハウス).

Berdasarkan kategori pembentukan di atas ditemukan dua hal yang menarik. Pertama, sebagian besar neologisme dibentuk berdasarkan pada istilah yang telah ada sebelumnya. Hal ini akan membuat neologisme tersebut lebih mudah dikenal dan digunakan karena tidak merasa terlalu asing. Apa lagi istilah yang digunakan tersebut memiliki kesamaan untuk mendeskripsikan fenomena sosial yang dimaksud. Kedua, penggunaan istilah bahasa Jepang, *kaigo* (介護) tidak digantikan dengan istilah berbahasa Inggris. Hal ini dapat dimaknai bahwa aktivitas merawat lansia berdasarkan kebiasaan pada orang Jepang memiliki cara yang khas bila dibandingkan dengan kebiasaan pada budaya lain. Seperti misalnya kebiasaan mandi dengan berendam di air hangat atau *ofurou* (お風呂) merupakan salah satu bagian dari *kaigo* (介護).

## Definisi Masing-masing Neologisme

Berikut akan dijelaskan definisi masing-masing neologisme tersebut lebih detail. Penjelasan diurut sesuai dengan karakteristik pembentukan yang telah disebutkan sebelumnya.

*Shuukatsu* (終活) merupakan persiapan yang dilakukan oleh lansia pada saat masih sehat agar bila nanti meninggal tidak terlalu merepotkan keluarga yang ditinggalkan. Misalnya membuat surat wasiat, menulis catatan penting yang ingin disampaikan tentang dirinya, menyiapkan foto yang akan dipajang saat prosesi pemakaman, termasuk membuat surat yang berisikan tentang

permintaan untuk prosesi pemakaman yang dipilih. *Shuukatsu* (終活) merupakan sikap kemandirian para lansia untuk mengurangi ketergantungan pada keluarga yang ditinggalkan, terutama anaknya. Istilah *Shuukatsu* (終活) memiliki kemiripan dengan istilah *Shuukatsu* (就活) yang telah dikenal lebih dulu.

*Koureisha gyakutai* (高齢者虐待) adalah tindakan kekerasan yang ditujukan kepada lansia. Tindakan kekerasan ini lebih banyak dilakukan oleh orang yang justru merawat mereka. Misalnya dilakukan oleh orang terdekat (anaknya), bahkan juga terjadi di *roujin hoomu* (老人ホーム) tempat mereka mendapatkan perawatan dan pelayanan. *Koureisha gyakutai* (高齢者虐待) merupakan kekerasan berupa berbicara dengan menggunakan kata-kata kasar, nada membentak, menakut-nakuti atau mengancam, menelantarkan dan juga kekerasan fisik yang berujung pada kematian.

*Taikikoureisha* (待機高齢者) atau *taikiroujin* (待機老人) merupakan kondisi lansia yang harus mengantre untuk dapat menggunakan fasilitas *roujinhoomu* (老人ホーム). Jumlah lansia yang semakin meningkat, tetapi tidak didukung oleh peningkatan jumlah *roujinhoomu* (老人ホーム) untuk memfasilitasi lansia. Istilah ini meniru dari istilah *taikijidou* (待機児童) yang berarti jumlah anak-anak, khususnya balita yang memerlukan fasilitas penitipan agar orang tuanya dapat bekerja. Fenomena yang sama juga terjadi pada para lansia yang ingin menggunakan fasilitas tinggal di *roujin hoomu* (老人ホーム) untuk mendapatkan pelayanan yang lebih baik karena berbagai kondisi keluarga yang tidak memungkinkan lansia untuk dirawat di rumah.

*Kaigokyuuka* (介護休暇) merupakan istilah mengambil cuti untuk merawat orang tua yang sudah lansia. Istilah ini berasal dari *ikuikyuuuka* (育児休暇) yaitu cuti untuk merawat anak yang baru lahir, berlaku untuk laki-laki agar dapat membantu istrinya pasca kelahiran sebagai bentuk dukungan suami dalam pengasuhan anak. Dengan semakin meningkatnya jumlah lansia yang memerlukan perawatan ditambah lagi dengan masalah kurangnya fasilitas untuk menampung lansia di *roujin hoomu* (老人ホーム) membuat kesibukan keluarga menjadi bertambah. Karena itu diterapkan kebijakan berupa cuti untuk merawat orang tua yang sudah lansia. Kondisi ini memiliki kesamaan dengan kesibukan pada saat istri lahir. Tidak hanya saat istri

lahiran saja yang memerlukan cuti, tetapi merawat orang tua yang sudah lansia juga memerlukan cuti.

*Kaigorishoku* (介護離職) merupakan kondisi berhenti kerja karena harus merawat lansia. Karena pekerjaan merawat lansia sangat berat, sehingga tidak memungkinkan bagi mereka untuk bekerja sambil merawat orang tua. *Kaigorishoku* (介護離職) dilatarbelakangi oleh *taikikoureisha* (待機高齢者), kesulitan membagi waktu antara bekerja dan merawat lansia atau *kaigo* (介護), sehingga memutuskan untuk berhenti bekerja demi merawat orang tua.

*Kaigo utsu* (介護鬱) merupakan kondisi seseorang yang mengalami depresi karena secara psikologis kelelahan saat merawat lansia. Hal ini berdampak pada keengganan untuk bersosialisasi, bahkan menjauh dari lingkungan sosialnya, dan akhirnya menutup diri untuk berkomunikasi dengan orang lain. *Kaigo utsu* (介護鬱) merupakan suatu masalah yang serius karena menjadi salah satu penyebab orang yang merawat lansia melakukan tindakan bunuh diri.

*Houmon kaigo* (訪問介護) merupakan *kaigo* yang dilakukan dengan cara mendatangkan pramurukti ke rumah lansia. *Houmon kaigo* (訪問介護) biasanya dilakukan oleh pramurukti yang sudah memiliki sertifikat untuk memberikan tindakan perawatan terhadap lansia yang dirawat di rumah. *Houmon kaigo* (訪問介護) sangat berperan dalam meringankan beban keluarga yang merawat lansia di rumahnya.

*Zaitaku kaigo* (在宅介護) merupakan kondisi merawat lansia di rumah karena keinginan keluarga dan juga berbagai keterbatasan seperti misalnya tidak memungkinkan untuk menggunakan fasilitas *roojin houmu* (老人ホーム). *Zaitaku kaigo* (在宅介護) bukanlah hal yang mudah, sehingga memerlukan kerja sama seluruh anggota keluarga dan bantuan dari jasa *houmon kaigo* lainnya, seperti *houmon kaigo* (訪問介護).

*Kaigo nanmin* (介護難民) merupakan kondisi kesulitan dalam mendapatkan layanan perawatan bagi para lansia. Hal ini menimbulkan kesan mereka menjadi terlantar. Istilah *nanmin* (難民) berarti pengungsi, orang dalam kesulitan. Neologisme ini mengacu pada makna bahwa mereka dalam kesulitan untuk mendapatkan perawatan.

*Kaimono nanmin* (買い物難民) merupakan kesulitan yang dihadapi oleh para lansia untuk berbelanja, terutama berbelanja kebutuhan pokok

sehari-hari. Hal ini dilatarbelakangi oleh keterbatasan ruang gerak (tidak dapat mengendara, kesulitan naik kendaraan umum), tempat berbelanja yang terbatas, jarak yang cukup jauh, bahkan juga karena kondisi tempat tinggal yang sulit misalnya banyak tangga, tanpa ada fasilitas elevator. Sehingga mereka mengalami kesulitan untuk berbelanja dalam memenuhi kebutuhan pokoknya.

*Mitori nanmin* (看取り難民) merupakan kesulitan yang dihadapi lansia untuk mendapatkan perawatan intensif sebelum meninggal. Hal ini disebabkan karena semakin meningkatnya individualisme atau *kojinka* (個人化) dalam sistem kekerabatan maupun lingkungan sekitar tempat tinggal.

*Rougo hinkon* (老後貧困) merupakan kondisi kesulitan ekonomi, identik dengan kemiskinan yang dialami oleh lansia. *Rougo hinkon* (老後貧困) ini disebabkan oleh susahnya lansia untuk mengatur keuangan yang disebabkan oleh semakin kecilnya uang pensiun, ketidakmampuan untuk bekerja lagi, sehingga berdampak pada semakin berkurangnya pendapatan. Sehingga mencapai kondisi tanpa pekerjaan, tanpa tabungan dan tanpa mendapatkan uang pensiun.

*Rougo hatan* (老後破綻) merupakan kesulitan ekonomi yang dialami oleh lansia. Istilah *rougo* (老後) dipakai untuk menandai suatu kondisi yang terjadi setelah seseorang menjadi lansia. Kesulitan ekonomi lansia ini terjadi karena setelah pensiun pun masih ada tuntutan untuk membayar tagihan yang harus dilunasi (misalnya cicilan rumah atau apartemen), biaya pengobatan, dan pengeluaran lainnya. Tetapi, pensiunan yang diterima tidak mencukupi dan harus diambil dari uang tabungan, sehingga membuat tabungan semakin berkurang.

*Rougo hasan* (老後破産) merupakan kesulitan ekonomi yang dialami oleh lansia yang disebabkan karena ketidakmampuan mengatur keuangan pada saat masih bekerja. Terjadinya selisih pendapatan yang cukup tinggi antara saat bekerja dengan setelah pensiun. Setelah pensiun para lansia baru menyadari bahwa uang pensiunan yang didapat tidak sebanyak saat masih aktif bekerja. Sehingga, mengalami kesulitan ekonomi pada masa lansia.

*Kenkou jumyou* (健康寿命) merupakan harapan kepada para lansia yang tidak hanya berumur panjang, tetapi juga sehat dan mampu beraktivitas mengisi masa lansia dengan berbagai kegiatan yang positif. Misalnya menikmati

kegemaran, menjadi sukarelawan dalam berbagai kegiatan, memberikan kontribusi bagi masyarakat sekitarnya.

*Kodokushi* (孤独死) atau *Koritsushi* (孤立死) adalah kondisi meninggalnya seseorang tanpa ada yang sempat merawatnya, sampai meninggal pun tidak ada orang yang mengetahuinya. Sehingga, orang tersebut baru diketahui meninggal setelah beberapa hari kemudian karena adanya bau yang tidak sedap di lingkungan sekitarnya. Dengan semakin meningkatnya lansia yang tinggal sendirian, membuat kekhawatiran adanya peningkatan kasus *Kodokushi* (孤独死) atau *Koritsushi* (孤立死).

*Karyuurojin* (下流老人) merupakan kondisi kesulitan ekonomi yang dialami oleh para lansia. Para lansia yang merupakan ekonomi kelas bawah disebabkan karena perceraian, kondisi kesehatan yang memburuk, biaya perawatan kesehatan yang tinggi dan terisolir dari lingkungan sosial sekitarnya.

Berdasarkan uraian di atas dapat diketahui bahwa dengan menggunakan istilah yang memiliki kemiripan dengan istilah yang telah ada sebelumnya mempermudah dikenalnya istilah tersebut oleh masyarakat luas. Hal ini disebabkan karena telah ada pemahaman terhadap istilah yang telah dikenal sebelumnya. Selain mencontoh istilah yang telah ada, pembentukan istilah dengan permainan bunyi juga mempermudah istilah baru tersebut untuk diingat. Misalnya pada istilah berikut ini.

*Ninninkaigo* (認認介護) merupakan kondisi lansia yang mengalami penyakit demensia, tetapi mengalami kesulitan untuk mendapatkan perawatan. Sehingga terpaksa sesama penderita demensia saling merawat. Misalnya suami yang mengalami demensia, merawat istrinya yang juga menderita demensia.

*Rouroukaigo* (老老介護) merupakan kondisi lansia merawat lansia atau saling merawat sesama lansia. Misalnya suami istri atau kakak beradik yang sudah mencapai usia lanjut, tetapi tidak mendapatkan pelayanan untuk dirawat oleh pramurukti atau menggunakan fasilitas *roujin hoomu* (老人ホーム). Sehingga terpaksa merawat sesama lansia.

Selain permainan bunyi seperti tersebut di atas, pembentukan istilah baru dengan menyingkatnya juga merupakan cara yang efektif untuk mengenal kosa kata dan mengingatkannya. Istilah *sakoujuu* (サ高住) merupakan singkatan dari *saabisu* (サービス), *koureisha* (高齢者) dan *juutaku* (住宅).

Masing-masing berarti layanan, lansia dan perumahan. Jadi, *sakoujuu* (サ高住) berarti perumahan yang dilengkapi dengan pelayanan terpadu yang diperlukan oleh para lansia. Model perumahan ini diperkenalkan sebagai tindak lanjut terhadap masalah peningkatan angka lansia dan tidak tinggal bersama anaknya, sekaligus sebagai solusi terhadap masalah yang berhubungan dengan lansia. Misalnya untuk memberikan kenyamanan dan keamanan tempat tinggal bagi lansia, mencegah lansia yang terisolir dari lingkungan sekitarnya, dan mencegah lansia yang meninggal tanpa ada yang mengetahui atau *kodokushi* (孤独死).

Berikut dijelaskan definisi neologisme yang terbentuk dari *portmanteaus*. Neologisme tersebut terbentuk dari perpaduan bahasa Jepang dan bahasa Inggris.

*Kaigo ashisutanto* (介護アシスタント) adalah orang yang menjadi asisten pekerjaan yang dilakukan oleh pramurukti. Sebagai asisten tidak diperlukan sertifikat. Pekerjaan yang umum dilakukan oleh *Kaigo ashisutanto* (介護アシスタント) sebagian besar berupa pekerjaan yang sama dengan pekerjaan rumah tangga seperti mencuci piring, membereskan cucian, membuang sampah, membersihkan dan merapikan ruangan, mengecek persediaan barang-barang kebutuhan pokok dan pekerjaan lainnya yang tidak memerlukan keahlian khusus atau disebut *tanjun roudou* (単純労働). Keberadaan *Kaigo ashisutanto* (介護アシスタント) sangat membantu pramurukti atau *kaigoshi* (介護士) karena mereka dapat lebih konsentrasi merawat lansia. Tidak sedikit para pensiunan pegawai kantoran yang masih sehat, tertarik menjadi *kaigo ashisutanto* (介護アシスタント) karena berbagai motivasi seperti dapat memberikan kontribusi pada masyarakat luas, setelah pensiun pun ingin berguna bagi orang lain, mencari pengalaman dan pengetahuan tentang fasilitas untuk lansia atau *kaigo shisetsu* (介護施設) karena suatu saat nanti mereka pasti akan memerlukannya.

*Kaigo kafe* (介護カフェ) merupakan komunitas yang dibentuk untuk orang yang merawat lansia. Melalui kafe ini orang yang merawat lansia, sambil menikmati kopi dan teh mereka dapat saling berbagi informasi, pengalaman, masalah selama merawat lansia, saling memberi semangat, sekaligus menambah pengetahuan tentang *kaigo* (介護). *Kaigo kafe* (介護カフェ) juga menjadi tempat untuk bersantai, melepas lelah disela-sela

kesibukan merawat lansia. Sehingga keberadaan *kaigo kafe* (介護カフェ) dapat mengurangi stress yang ditimbulkan karena merawat lansia.

*Kaigo rifoomu* (介護リフォーム) merupakan istilah yang digunakan pada renovasi rumah yang bertujuan untuk mempermudah ruang gerak lansia dalam beraktivitas sehari-hari di rumah. Misalnya menambahkan pegangan pada sisi toilet duduk, menggantikan bagian tangga dengan membuat jalur khusus agar dapat dilalui kursi roda dan hal lainnya yang dapat memudahkan kegiatan merawat dan melatih lansia untuk mandiri di rumah.

*Mutodoke kaigo hausu* (無届け介護ハウス) merupakan istilah yang digunakan untuk *roujin hoomu* (老人ホーム) yang tidak terdaftar secara administrasi di pemerintahan. *Mutodoke kaigo hausu* (無届け介護ハウス) lebih banyak menggunakan rumah tempat tinggal atau apartemen sebagai kamar untuk merawat lansia sehingga banyak aspek yang tidak sesuai standar sebagai *roujin hoomu* (老人ホーム). *Mutodoke kaigo hausu* (無届け介護ハウス) sebenarnya merupakan salah satu bisnis ilegal untuk menampung para lansia yang tidak diterima di *roujin hoomu* (老人ホーム). Tetapi, karena berbiaya murah sehingga banyak para lansia yang memilih menggunakan jasa ini karena kondisi lansia yang kesulitan secara ekonomi, tinggal sendirian dan kecemasan bila nanti meninggal tanpa ada merawat. Keberadaan *Mutodoke kaigo hausu* (無届け介護ハウス) semakin meningkat karena sangat berperan sebagai alternatif bagi para lansia yang tidak memiliki kemampuan ekonomi, keluarga yang merawatnya, tetapi memerlukan perawatan kesehatan pada masa lansia.

*Kaigo sutoresu* (介護ストレス) merupakan kondisi stress yang disebabkan karena terlalu kelelahan dalam merawat lansia. Sehingga aktivitas *kaigo* (介護) menyebabkan tekanan secara psikologis. *Kaigo sutoresu* (介護ストレス) dapat mengakibatkan berbagai masalah baik bagi yang merawat lansia, maupun bagi lansia yang dirawat. Sehingga banyak terjadi kekerasan pada lansia, termasuk juga bunuh diri yang dilakukan orang yang merawat karena merasa terlalu lelah, tertekan dan sudah tidak kuat lagi merawat orang tua yang sudah lansia.

Berikutnya merupakan penjelasan tentang neologisme yang terbentuk dari kata serapan. Neologisme ini lebih banyak diserap dari istilah yang berbahasa Inggris.

*Hoomu herupaa* (ホームヘルパー) merupakan layanan bantuan lansia yang dirawat di rumah untuk membantu kegiatan sehari-hari berupa menyiapkan makanan, mandi, ekskresi, mengganti pakaian, termasuk mencuci dan memasak, termasuk juga berbelanja kebutuhan harian. Kebanyakan lansia yang tinggal sendirian menggunakan jasa *Hoomu herupaa* (ホームヘルパー) untuk mengatasi kesulitannya dalam melakukan aktivitasnya sehari-hari.

*Disaabisu* (デイサービス) merupakan layanan untuk merawat lansia dalam 1 hari dari pagi hingga sore hari. Layanan ini diberikan berupa tempat penitipan lansia yang ada di panti wreda atau *roujin hoomu* (老人ホーム) maupun rumah sakit tertentu berupa makan, mandi termasuk ekskresi, mengganti pakaian, melakukan rehabilitasi dibawah pengawasan ahlinya, berolah raga ringan sambil bersosialisasi dengan lansia lainnya dll. Layanan ini dapat dikatakan tempat penitipan untuk merawat lansia yang bersifat harian. Lansia dititipkan dari pagi hingga sore hari. *Disaabisu* (デイサービス) digunakan untuk menitipkan lansia selama keluarga yang merawatnya sedang berhalangan karena kesibukannya.

*Dikea* (デイケア) merupakan layanan rawat jalan untuk menjalani rehabilitasi bagi para lansia. Layanan ini hanya diberikan setengah hari, tidak untuk menginap.

*Shooto sutei* (ショートステイ) merupakan layanan untuk menitipkan lansia agar mendapatkan perawatan intensif dalam masa tinggal yang sudah ditentukan. Jadi, lansia tersebut tidak tinggal selamanya di *roujin hoomu* (老人ホーム).

*Houmon rihabiriteeshon* (訪問リハビリテーション) merupakan rehabilitasi yang dilakukan di rumah dengan mendatangkan orang yang membantu proses rehabilitasi. Rehabilitasi yang dilakukan berupa fisioterapi yaitu lebih banyak bertujuan untuk melatih tubuh agar dapat melakukan gerakan yang berhubungan dengan kegiatan sehari-hari seperti berjalan, menggerakkan anggota tubuh, sehingga lansia tersebut dapat melakukan aktivitasnya sendiri. Termasuk juga memberikan saran kepada orang di rumah yang merawat lansia tersebut agar memberikan motivasi untuk membantu pemulihan kondisi lansia.

*Sakusesu eijingu* (サクセスエイジング) merupakan harapan menikmati masa lansia yang ideal. Kondisi ideal yang dimaksud adalah

kondisi kesehatan yang mendukung untuk melakukan kegiatan yang memberikan kontribusi bagi masyarakat. Misalnya menjadi volunter dalam berbagai kegiatan sosial. Sehingga secara psikologis memberikan motivasi hidup karena ada rasa senang dapat berguna bagi orang lain.

*Endingu nooto* (エンディングノート) merupakan salah satu bagian dari *shuukatsu* (終活) yang dilakukan dengan cara membuat catatan-catatan pada buku sebagai salah satu persiapan bila nanti meninggal. *Endingu nooto* (エンディングノート) berisikan informasi penting tentang penulisnya yang diperlukan bila nanti yang bersangkutan meninggal. Misalnya tentang aset yang dimiliki, riwayat hidup, orang-orang yang ingin dihubungi saat meninggal, termasuk prosesi pemakaman yang diinginkan. *Endingu nooto* (エンディングノート) dibuat agar tidak merepotkan keluarga yang ditinggalkan.

Uraian definisi dari semua neologisme tersebut menggambarkan kondisi masyarakat Jepang yang tengah menghadapi kondisi peningkatan jumlah lansia. Neologisme tersebut muncul karena diperlukan istilah yang baru untuk menggambarkan fenomena tersebut. Dari pemahaman terhadap neologisme secara tidak langsung kita dapat mengetahui kondisi masyarakat pengguna bahasanya.

## Neologisme dan *Koureika* (高齢化)

Berdasarkan definisi masing-masing neologisme yang telah diuraikan sebelumnya, dapat diketahui masalah atau fenomena sosial yang terjadi pada masyarakat Jepang dalam hubungannya dengan *koureika* (高齢化). Secara garis besar dapat dikategorikan menjadi neologisme yang berhubungan dengan persiapan sebagai lansia, masalah ekonomi, masalah *kaigo* (介護), dan pandangan positif tentang lansia. Berikut akan dijelaskan masing-masing kategori.

Pertama, neologisme yang berhubungan dengan persiapan lansia, yaitu *shuukatsu* (終活) dan *endingu nooto* (エンディングノート). Istilah ini mencerminkan salah satu karakteristik orang Jepang yaitu kemandirian. Sehingga berbagai persiapan bila nanti meninggal pun dilakukan agar tidak terlalu merepotkan orang lain. Selain itu, istilah ini juga dilatarbelakangi oleh semakin kuatnya individualisasi dalam keluarga atau dikenal dengan istilah *Kazoku no kojinka* (家族の個人化). Misalnya semakin jarang intensitas komunikasi dan interaksi dalam keluarga dan

juga semakin meningkatnya lansia yang tinggal sendirian, tidak Bersama dengan anak, menantu dan cucu. *Shuukatsu* (終活) dan *endingu nooto* (エンディングノート) merupakan salah satu solusi agar pada saat meninggal orang tua yang sudah lansia dan tinggal terpisah dengan anaknya dapat menyampaikan informasi yang tidak sempat disampaikan saat masih hidup.

Kedua, neologisme yang berhubungan dengan masalah ekonomi yaitu *Rougo hinkon* (老後貧困), *Rougo hatan* (老後破綻), *Rougo hasan* (老後破産) dan *Karyuuroujin* (下流老人). Istilah ini mencerminkan kesulitan ekonomi yang dihadapi oleh lansia. Kesulitan ekonomi ini disebabkan oleh berkurangnya pendapatan karena uang pensiun tentu tidak sebanyak penghasilan yang didapat saat bekerja, kondisi kesehatan yang tidak stabil memerlukan biaya perawatan kesehatan yang tidak sedikit. Sehingga memerlukan biaya hidup yang jauh lebih mahal, bila dibandingkan dengan saat sebelum lansia dengan kondisi kesehatan yang baik.

Ketiga, neologisme yang berhubungan dengan *kaigo* (介護). Misalnya *Kaigo nanmin* (介護難民), *mitori nanmin* (看取り難民), *taikikoureisha* (待機高齢者), *kaigo utsu* (介護鬱), *kaigo sutoresu* (介護ストレス), *kaigorishoku* (介護離職), *kaigokyuuka* (介護休暇), *kaigo ashitutanto* (介護アシスタント), *kaigo rifoomu* (介護リフォーム), *houmu herupaa* (ホームヘルパー), *disaabisu* (デイサービス), *dikea* (デイケア), *shooto sutei* (シヨートステイ), *sakusesu eijingu* (サクセスエイジング), *endingu nooto* (エンディングノート) dan *rekurieeshon* (レクリエーション). Banyaknya neologisme yang berhubungan dengan *kaigo* (介護) menunjukkan bahwa masalah yang berhubungan dengan *kaigo* (介護) merupakan masalah atau fenomena dari *koureika* (高齢化) yang paling mendapat perhatian dari masyarakat.

Keempat, neologisme yang berhubungan dengan pandangan yang positif tentang lansia yaitu *kenkou jumyou* (健康寿命) dan *sakusesu eijingu* (サクセスエイジング). Masyarakat Jepang dikenal sebagai masyarakat dengan usia harapan hidup yang tinggi. Rata-rata usia harapan hidup untuk perempuan adalah 87,26 tahun dan menduduki peringkat ke-dua di dunia setelah Hongkong, sedangkan laki-laki adalah 81,09 tahun dan menduduki peringkat ke-tiga setelah Hongkong dan Swiss (Switzerland). Usia harapan hidup yang tinggi salah satunya juga ditunjang

oleh majunya teknologi dan keilmuan di bidang medis. Tetapi, usia harapan hidup yang tinggi di sisi lain akan menjadi masalah bila tidak diikuti kondisi kesehatan yang baik juga. Karena itu pemerintah mulai menyampaikan harapannya terhadap usia harapan hidup yang tinggi di Jepang dengan memperkenalkan istilah *kenkou jumyou* (健康寿命) dan kondisi lansia yang bahagia dan sejahtera dengan mempopulerkan istilah *sakusesu eijingu* (サクセスエイジング). Melalui istilah *kenkou jumyou* (健康寿命) dan *sakusesu eijingu* (サクセスエイジング) terdapat tujuan agar masyarakat Jepang tidak pesimis menghadapi masa tua karena pemberitaan lansia yang cenderung memicu kekhawatiran, tetapi lebih berpikiran positif dan mempersiapkan masa lansia lebih baik, dengan demikian diharapkan dapat menikmati kehidupan masa lansia.

## SIMPULAN

Topik mengenai lansia bukan lagi merupakan hal yang baru bagi masyarakat Jepang. Misalnya tradisi peringatan Hari Lansia atau *keirou no hi* (敬老の日) yang diperingati setiap hari Senin pada minggu ke-tiga bulan September dan merupakan hari libur nasional. Hari Lansia sebagai hari libur merupakan bentuk penghormatan masyarakat Jepang terhadap lansia. Begitu juga dengan munculnya neologisme yang berhubungan dengan lansia merupakan bentuk perhatian dan keseriusan masyarakat Jepang terhadap fenomena sosial yang terjadi karena peningkatan jumlah lansia. Neologisme yang muncul lebih banyak berupa masalah yang menimbulkan kekhawatiran masyarakat Jepang dalam menjalani masa tuanya nanti. Sehingga memberikan kesan yang suram terhadap kehidupan setelah pensiun dan menjadi lansia.

Penelitian tentang neologisme sangat menarik dan penting untuk dilakukan karena selain menelusuri perbendaharaan kata yang berkembang di media dan masyarakat, juga dapat meningkatkan pemahaman terhadap fenomena yang terjadi pada masyarakat pengguna bahasa tersebut lebih luas lagi. Penelitian kali ini hanya dibatasi pada jenis pembentukan dan definisi dengan latar belakang sosialnya. Pada penelitian berikutnya perlu diperluas lagi tentang neologisme dalam keterkaitan dengan bidang linguistik dan sosial budaya. Penelitian neologisme sangat menarik karena membuka

peluang untuk berkolaborasi antardisiplin ilmu yang meliputi kajian bahasa, kajian budaya dan kajian komunikasi. Sehingga sangat memungkinkan untuk dilakukan penelitian yang lebih dalam lagi tentang neologisme.

## PUSTAKA RUJUKAN

- Konopelkina, O. (2017). Comparative Analysis of Ukrainian and English Neologisms. *International Journal of MULTILINGUAL EDUCATION*, 33, 23-30.
- Mareva, R. (2014). The Art of Neologisme: Some Recent Additions to the Shona Slang Lexicon. *GLOBAL JOURNAL OF INTERDISCIPLINARY SOCIAL SCIENCES*, 3(4), 179-183. Global Institute for Research & Education.
- McDonald, L. (2005). *THE MEANING OF "e-": Neologisms as Markers of Culture and Technology*. ETopia.
- Rets, I. (2016). Teaching Neologisms in English as a Foreign Language Classroom. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, 232, 813-820.
- Suartini, N. N. (2018). Neologisme dalam Perkembangan Bahasa Jepang dan Latar Belakang Fenomena Masyarakatnya. *Prosiding Seminar Nasional Jurusan Sastra Jepang*, 79-90. Sastra Jepang Fakultas Ilmu Budaya Universitas Andalas.
- Usevics, S. (2012). *NEOLOGISM IN BRITISH NEWSPAPERS*.
- Zhou, L. (2016). Neologism in News English. *Sino-US English Teaching*, 13(4), 292-295.
- 千葉モトコ. (2011). 『家族とジェンダーの社会学』. 京都: 法律文化社.
- 岩上真珠・鈴木岩由弓・森健二・渡辺秀樹. (2010). 『いま、この日本の家族—絆のゆくえ—』. 東京: 弘文堂.
- 牟田和恵. (2010). 『家族を超える社会学』. 東京: 新曜社.
- 菅原 真枝, ニ・ヌンガー・スアルティニ. (2015). 「インドネシア人介護福祉士候補者が日本で働く理由——宮城県における社会福祉法人 X の事例——」 『社会学研究』, 97, 75-103.

Situs Internet:

- <https://www.minnanokaigo.com>  
<https://www.tyojyu.or.jp>  
[www.htb.co.jp/news/oiru/](http://www.htb.co.jp/news/oiru/)  
<https://rieti.go.jp>  
<https://irs.jp/article>  
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp>  
<https://ansinkaigo.jp>  
<https://seniorguide.jp>

